
卯の花月夜

都鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卯の花月夜

【Nコード】

N4326T

【作者名】

都鳥

【あらすじ】

巫女の隠れ里、澄沢村でひっそりと暮らす巫女見習いの鈴。愛する姉達に追いつく事、ただそれだけを糧に生きながら。それなのに、目の前で姉達のいる御殿が業火に吞まれようとしていた。

「お願い、姉様達を助けて
薄れゆく意識の中で、鈴はただそれだけを叫んでいた。

突然の終わり

鈴は、一心不乱に水盆を見つめていた。

一尺をゆうに超える水盆には並々と水が張っており、その水面には難しい顔をした鈴しか映っていない。

「……はい、そこまで」

静寂を切り裂いたのは、美津の厳しい声だった。その途端、周りにいた少女達からほう、と疲れのため息が漏れる。

「今朝の修練はこれまでにしましょう」

齢五十を超えているいるだろう美津は、微塵の老いも感じさせないきびきびとした動きで室内から出ていく。少女達もするすると衣擦れの音をたてながらも、決して水盆の水をこぼさない滑らかな動きで一人また一人と室内を後にした。

残されたのは鈴一人。

鈴は一度顔を上げて室内に誰もいないのを確認してから、また水盆へと顔を向ける。ほかの少女達と同じくざつくばらんに切りそろえた前髪がその動きに合わせて揺れる。前髪よりも少しだけ長く残してある横髪がさらさらと頬を撫でた。

「……やっぱり、だめね」

思わず一人で呟いてから、鈴は水盆を抱えてすつと立ち上がった。

ここは勝亦藩かつまたにある小さな村、澄沢村すみさわ。人口わずか数十人程度の小さな村だ。四方を山に囲まれた村は時折ひっそりとやってくる客人以外に往来のない、静かな村。それもその筈、澄沢村というのは勝亦藩の抱える巫女達の隠れ里だった。そして鈴はその勝亦藩の抱える巫女見習いのうちの一人である。

しかし。

(どうして、私は駄目なんだろう)

歩きに合わせてゆらゆらと揺れる水面に、鈴の苦々しげな顔が映る。

鈴は物心ついた時から巫女のために建てられたこの屋敷にいる。しかしその巫女としての力は誰よりも劣っているのだ。その実力はいまだに水盆ひとつ波立たせる事が出来ない。後からやってきた少女たちが数年すると巫女として認められ、お勤めとしてどこかへ遣わされていく。鈴は既にこの屋敷の少女たちの歳年長であり、一番の古株だった。たくさんの少女達が鈴の後からやってきて、追い抜いていく。最早新しくやってくる少女たちと仲良くなる気もなかったし、そんな鈴に話しかけてくる少女もまたいなかった。

この屋敷の巫女見習い達の世話役である美津はそんな鈴に特に何か言っわけではなかったが、その静かな瞳を見るたびに、鈴は無言で責められているように感じて、つい目を逸らしてしまうのだった。

朝の修練が終われば、昼食の時間がやってくる。といっても彼女達の食事を誰かが作ってくれるのではなく、毎朝村人から届けられる食料を材料に、自分達で手分けして準備するのだ。いくら頑張っても身に付かない力とは裏腹に料理は作れば作った分だけ腕が上達する。野菜を刻み、鍋をかき回している時のみ鈴はほっとする事が出来た。

ふと鍋から目を離し、小窓から外を見上げると鈍色にびいろの暗雲が立ち込めていた。まだ春分が過ぎたばかりで天気が安定しないのだろう。か。ぽつぽつと霧雨も降ってきている。

鈴は雨があまり好きではない。淀んだ空も、物悲しい雰囲気も、ただたださびしさが募るばかりで、恵の雨だとは分かっていても気分が沈むのはどうしても抑えられなかった。

それに、と思う。

姉達が鈴の元から去っていった日は、二人とも揃えたかのように雨が振っていた。

「行ってくるね」

上の姉、藤ふじの柔らかい声とその名にふさわしい藤色のやわらかい瞳。月白げつぱくの髪を静かに揺らしながら去っていく姿を、幼い鈴はじつと見つめていた。下の姉、落ふきの手に繋がれた小さな手が不安げにきゅっと握られる。そうすると藤とよく似た落の、けれど色味だけが違った若葉色の瞳が優しく降り注いでくる。

そんな落も一年と経たないうちに藤と同じく鈴の元を去って行った。今度こそ一人ぼっちでその背中を見送りながら、鈴は一日も早く二人に追いつきたいと願うのだった。

とはいえ何もそれほど寂しがる事ではない。二人が行った先は同じ村にある大きな屋敷で、そこで巫女として日々仕えている。絹のような月白の髪に、不思議な色の瞳の姉達は、生まれた時から途方もない力を持っていた。だから他の巫女たちのように各地に遣わされるのではなく、勝亦藩の巫女の総本山たるこの村で大事な務めを果たしている。

その妹である鈴だって、恐らく力が身につけば同じように屋敷に上がる事はそう難しくない。

そのはずなのに。

鈴だけは、どうしても駄目だった。

確かに、見た目からして常人離れしている姉達とは明らかに違っていた。よく見れば少しだけ茶が混じっているような何の変哲もない黒髪に、これまた何の変哲もない濡羽ぬわば色の瞳。姉達が常に漂わせているゆるりとした浮世離れの空気など微塵もなく、一見ただの娘となんら変わりない。これで二人と顔が似ていなかったら、姉妹だと言う事すら疑われそうな程だった。

力だって、二人は修練で身に付けたわけではなく、最初からそこに当たり前のものとして在った。むしろもっと早くから屋敷に上がっていてもおかしくなかった所を、鈴のためだけに留まってくれていたのだ。

(姉様……)

もう、何年会っていないんだらう。この小さな村に同じように暮らしているはずなのに、訪ねようと思えば難なく行ける程度なのに、姉達と鈴の間には途方もない距離が空いていた。

とんとん。

物思いにふけっていた鈴の耳に、何かを叩く小さな音がした。

「きやつ！」

それにつられて顔をあげてみると、目の前の小窓に人の顔が浮かんでいた。

「もう！ びつくりさせないで！ 本当に心臓が止まるかと思っただじゃない！」

まだ驚きから立ち直れない心をなだめるために、乱暴に鍋の中をかき回す。

「ごめんごめん、なんか真剣に考えてたからさ」

顔の主、藤真は悪びれた様子なく、形のいい玉葱をお手玉に遊んでいる。快活な黒檀色の瞳が動きに合わせて軽やかに揺れている。

そんな彼を他の少女達がちらちらと盗み見していた。

無理もない、と鈴は思う。この澄沢村にいるのは巫女とその見習いの少女達と、その世話役を兼ねた目隠しのためにいる年老いた村人ばかりだ。藤真のように生命力に溢れた若い男は非常に珍しいのだらう。少女によつては、若い男を初めて見るかもしれない程に。

「それで、今日はどうしたの？ 任務つて感じではなさそうね」

鍋を回す手を止めずに、鈴は後ろにいる藤真に話しかけた。

「ちょっとお館様から休みをもらえたからさ、里に帰るついでに立ち寄ってみたんだ」

そう言いながら、ぐぐぐつと藤間は伸びをした。小袖からよつきりと生えている腕はまだまだ細いながらも、しっかりとした筋肉が根付いている。

藤真は勝亦藩の抱える忍びの一人である。通常、姉達の力が必要

とされる時、藩主の代理に忍びがやってくる事がほとんどだ。隠れ里を見つけれられないようにするための配慮と、澄沢村は藩主の住む領地からは離れているのも理由だ。その任務には三人で一組とされている。そのうちの一人が藤真だった。

初めて藤真に会ったのは、まだ彼が鈴と同じように見習いとして連れてこられた時の事である。その時はまだ藤も落も鈴のそばにいて、珍しい男の童わいわを見ようとして逆にその童に追いかけまわされたのはいい思い出だ。鈴よりも一つか二つ上の藤真も、今では立派な忍びとして正式な任務を請け負って里にやってくるようになったのは、はたしていつ頃からだったか。

「ね、姉様達に会った？」

知らず問いかける声が弾んでしまう。

「もちろん挨拶してきた」

ぱつと振り向くと、藤真と目があった、にやりと笑いかけられて、思わず鈴は見透かされていた事を感じて恥ずかしくなった。

もう姉達と何年も会っていない鈴と違って、藤真はその任務柄よく姉達とは対面している。だから彼から姉達の事を聞くのが、鈴の何よりの楽しみだった。

「藤様が鈴の事を心配してたぞ。元気がどうか、気にかけて欲しいってさ」

思わず、鈴から笑みがこぼれる。柔らかい笑顔でその事を藤真に告げている姉の姿が目には浮かぶようだ。

「それから落様からも、体には気をつけろと」

「まあ、落姉様からも？ 二人して心配性だわ」

たった一言なのに、鈴の心は先ほどまでの憂鬱など忘れて、代わりに暖かい気持ちで満たされていた。

物心ついた時からこの屋敷にいた鈴には、姉達以外に肉親はいない。両親の事を何度か訪ねようとした事もあったが、そのたびに姉達の無言の笑みに押されて聞く事は叶わなかった。いつしか、その事に興味もなくなっていた。姉達さえいれば鈴はそれで満足だった

から。

「ところで今日何作ってるんだ？」

「駄目よ。今日は人数分しかないから」

鼻をひくひくさせて近寄ってくる籐真にぴしゃりと言い放った。

「鈴……それはないだろ……！」

悲痛な面持ちでうなだれる籐真を見て鈴はくすりと笑った。

「うそ。籐真の食べる分くらいは余裕あるから」

途端に籐真の顔が明るくなるのを見て鈴は隠れてくすりと笑った。本当は、いつ籐真が来ても大丈夫なように常に多めに作ってあるのだ。

結局その日の夜まで居ついた籐真を見送ってから、鈴は布団にもぐりこむ。今日は久々に楽しい一日だった。もしかしたら今夜は、楽しい夢が見れるかもしれない。

布団にもぐってから、どのくらいたったのだろう。眠りの底にいた鈴は何かの振動を感じ取っていた。振動は少しずつ大きくなり、それとともに何か声が聞こえる。

「起きて！ みんな早く非難しなさい！」

鈴はまだ開ききっていない瞳で声のした方を見やった。

(……美津様)

いつも冷静な美津が、緊迫した顔で何か叫んでいる。同じ寝所にいた少女達が一人また一人とのそと起き上がってきた。みんな訳がわかっていないようで、不安げに美津を見つめている。美津は近くにいた少女を半ば無理やり廊下に押し出していた。

「火事が起きました、みな早く外に逃げなさい！」

その言葉に頭の芯が冷えていくのが分かった。

無言で、けれど焦りを隠せない顔ではたばたと少女達が走り出す。鈴も同じように後に続いた。

屋敷の外に出てあたりを見回すと、闇夜の中でひときわ明るい場

所があつた。その屋敷全体を包む業火が、新たな獲物を求めてその長い触手をくねらせている。あれは……。

「姉様！」

反射的に走り出していた。目の前で炎に呑みこまれて燃えているのは間違いなく姉達のいる屋敷だった。後ろで美津の鈴を呼ぶ声が聞こえるが関係なかった。

裸足に整えられていない地面の小石が突き刺さる。けれどそんなのはどうでもよかった。もうすでに屋敷ではなく、燃え盛る大きな物体にしか見えない屋敷だったものに、それでも鈴は駆けていく。

「藤姉様！ 露姉様！」

力の限り叫んでみても、厚い炎の壁が易々とそれを阻む。

（裏だつたら、まだ平気かもしれない）

踵を変えて屋敷の裏に走って行く。しかしついた先で鈴が見たのは、同じようにあたり一面炎に包まれている様だった。

「そんな」

姉達の寝所は、すぐそこだった。

「藤姉様！ 露姉様あつ……！」

知らず大きな涙がこぼれていた。少しでも近付こうとすれば、炎が容赦なく鈴をも喰らおうと触手を伸ばしてくる。

「あつっ……！」

触手に触れずとも、その尋常でない熱気に煽られて思わず後ずさった。

その時だった。

めりめりと何かを無理矢理割く音がして、屋敷の一部が倒れてくる。叫ぶ暇もなく、鈴はその下敷きになった。

薄れゆく意識の中で、誰かを見た。闇夜で光る灰青色はいあおの目。誰でもいい、誰でもいいから。

「お願い、姉様を、姉様達を助けて……」

伸ばした手が、空を切った。

灰青の男

夢を見ていた。

周りをたくさんの花に包まれた小さな家で姉達と一緒に暮らす夢を。誰にも邪魔される事なく、おだやかに暮らす日々を。

なのはどうしてだろう。

今日の前にいる姉達は、穏やかな笑みのまま、鈴の傍から少しずつ遠ざかっていく。大人の姿の姉達と違って、鈴だけが子供の姿のまま幼い足取りで追いかけていた。

(待って、おいていかないで、姉様、姉様……！)

「……」

うつすらと瞳を開けると、飴色のなめらかな天井が目に入った。それはいつも共同寝所で見慣れているものと違って、随分と小ぢんまりとしていた。そのまましばし見入っていると、高らかな子供のはしゃぎ声が聞こえてきた。声のする方に顔を向けると、障子越しに部屋にやわらかい光が差している。

(ここは、どこだろう……)

しとねから体を起こすときりりと太腿が痛んだ。眉をひそめて布団をめくりあげると、両の太ももからふくらはぎにかけて丁寧に包帯が巻いてある。そつと触ってみると、じんとした疼くような痛みが走った。立ち上がるには少し覚悟が必要なようだ。

「つく……」

びりびりと不快な痛みを訴え出す足を引きずって障子に手を伸ばす。小さく息を吸ってから、大きな音を立てないようにそつと滑らせる。障子の向こうには廊下と小さな庭があった。そこから見える限りの景色と、その質素な佇まいから判断するに、ここは誰かの家のようだ。

こういつ時はどうすればいいのだろう。鈴が思いあぐねていると、けたたましい笑い声とともに誰かがこちらに走ってきた。

「こら！ 雷！ 風！」

さらにその後ろから追いかけるようなどなり声がある。

呼ばれた当人であろう二人の少年は角を曲がって鈴を目にした途端、ぴたりと動かなくなった。くりくりとした烏羽色の髪と同じ色の瞳をもつ二人の少年。二人の顔は、よく皆に似ていると称された姉達よりも似ていた。瓜二つ、とはこういう事を言うのだろう。双子という二文字が鈴の頭に浮かびあがる。

などと鈴が思っていると、まだ幼さ残る二人は顔を見合わせてから今来た道を走りだした。

「響——！！！」

鈴は目を丸くして少年達を見送った。自分の顔に何かついていてたのかと思つてそつと確かめてみる。特に何も無い。

しばらく何か奥で騒ぎたてる声が出て、また誰かがこちらに来る音がした。今度は一体何が、と思つていと角からひよいと色白の顔が覗いた。先ほどの少年達よりも少し年上だろうか。線の細い面立ちに、さらさらとした墨色の髪。黒々とした瞳は、少しだけつり上がっていた。少女、かと思つた矢先、彼はしっかりとした少年の声で叫んだ。

「老兄——！！！」

一体なんだというのだろう。その少年も誰かの名前を呼びながらすぐに見えなくなった。訳が分からずそのまま突つ立っていたら、また誰かがやつてきそくな気がする。先ほどの少年は誰かを呼んでいたようだ。でももう顔を見て叫ばれるのはごめんだと思う。鈴は障子を静かに閉めると、元いた場所へそろそろと戻った。自由にならない足をしとねに横たえてからまじまじと包帯を巻いた足をつめる。

（やつぱり、この足の包帯はあの時の）

そこまで考えて、す、と音もなく障子が開いた。はじかれたよう

にそちらを見ると、灰青の瞳と目が合った。

「あ……」

てつきりまた少年が来るのかと思っていた鈴の前に立っていたのは、水浅葱色みずあじぎの色無地の着物を着た大人の男だった。

最初に、背の高い男だと思った。男の頭は天井近くまである。部屋に差ししていた陽光は男の背に遮られてわずかにもれ出るばかり。逆光で顔はよく見えないのに灰青の瞳ばかりが確かに光っている。それがなんだかとても恐ろしくて、知らず後ずさりしていた。

無愛想そうなその男は何も言わずに静かな歩みでこちらにやってくる。そして鈴のしとねの少し手前に腰を下ろした。今度は何を言われるのかと身構える。

「……」

予想とは裏腹に沈黙がその場に広がった。

そのすきに鈴は男をじつと見つめる。どこか気だるげに見える目に、筋の通った鼻、少し厚めの唇。最初は大の大人だと思ったが、近くで見ると意外と若い。

(……あ)

鈴は気づいた。無造作に切りそろえられた髪が、頭頂部に近付くにつれて鶏のようにはねていることに。あれは、寝癖なのだろうか。不意に男の視線がはずされる。視線の先を追っていくと、鈴の足があった。

「……もしかして、手当してくれたのは、貴方でしょうか」

おそろおそろ出した声は少しかすれていた。男は何も言わずに小さく頷いた。

「あ……ありがとうございます」

上半身だけで手をつく。少しみっともないが、今は正座できる自信がなかった。もし無礼だと怒られたらどうしよう。そつと顔をあげてみる。

男は微笑んでいた。目を少し細めて、柔らかく。鈴の心臓が音をたてて跳ねだした。

(まさか、微笑まれるなんて)

不意打ちのようなその微笑みに、思わず目をそらしてしまう。

「あの、ここ、どこでしょうか」

唐突に、平静を装いながら聞いてみた。

……返事がない。

疑問に思つて男見ると、また微笑んでいた。それは鈴の目には、男には答える気がないように映つた。

(……なんか)

鈴は思う。

この感じは、藤姉様と露姉様に接しているみたいだと。そして、思い切つて訊ねてみる。

「あの……姉様達を知りませんか。私のそばの、屋敷にいた巫女達なんです」

その途端、男の顔が険しくなつた。眉間に厳しい皺がより、逃げるように視線が外された。

それが答えだった。

「そう、ですか……」

力なく俯いた。

屋敷を飲みこんだ炎。その大きな触手の中に、藤と露も飲みこまれてしまった。目の前でそれを見ながら、何もできなかった鈴を置いて。

(助けて、あげられなかった……)

布団を握る手に、ぎりぎり力が入る。そうしないと大声で泣き出してしまいそうだった。

鈴が必死にこらえていたその時。ぼん、と大きな手が鈴の頭をなでた。そのままゆっくり頭の上を手が優しく行き来する。励まして、くれているのだろうか。

その大きな手が鈴のなけなしの自制心を壊した。

じわ、と目頭が熱くなつたかと思うと、それはまたたくまに大きな雫となつて零れていた。それから堰を切つたように後から後から

大きな涙が布団にしみをつける。嗚咽を漏らさないように齒を食いしめる鈴の頭を、男の手はずつとなでていた。

その手があまりにも優しくて。
それがまた悲しくて。

「う……うっ……」

声がどんどん漏れていく。顔がどんどんくしゃくしゃになっていく。男が鈴の頭をなでるたびに小さな自制心がひとつまたひとつと剥がれて行った。

気がつけば鈴は大声で泣いていた。

どれくらいそうしていたのだろうか。明るかったはずの陽光は、今やうす暗く室内を照らしているだけとなっている。もう涙も声も止まっていた。なのに、相変わらず頭をなでる手だけは止まる気配がない。

「あ、あの、ありがとうございます。もう、大丈夫ですから」
初めて会う人を目の前で大声で泣いてしまった。状況が状況で誰も鈴の事を非難出来ないとは言え、やはり少し恥ずかしい。すっと手が離れていく。同時に男は立ちあがると静かに部屋から出て行った。

散々泣いたせいで頭がぼんやりしている。額に手をあてると少し熱い。ふと、幼い頃はよく泣きすぎて熱を出してしまった事を思い出す。そうすると姉達がひんやりした手を鈴の額に乗せてくれるのだ。熱が出て体はだるかったけれど、それ以上に姉達が傍にいてくれる事がどうしようもなく嬉しかった。

じわり。散々流したはずの涙がまたにじんでくる。慌てて何度も目を拭う。そうしているうちにまた男が戻ってきた。水の入った小さな桶と手拭を持って。

手拭を冷たい水に浸してからきつく絞る。そうしてから男の骨ばった手が鈴に手拭を差し出した。

「……ありがとうございます」

受け取って目にあてると、冷たい手拭がすつと熱を吸い取られて、心地よかった。

「鈴」

突然名前を呼ばれてびっくりとする。一体どこで私の名前を……と考えたところで思いつく。

「もしかして、貴方は藤真といつも一緒にやってくる方でしょうか……？」

澄沢村に藤真がやってくる時は、いつも三人一組。藤真以外は鈴に会いに来る事などはなかったが、一度似たような背格好の忍びを見かけたことがある。

それを肯定するかのように男は微笑んだ。

やっぱりそうなんだ。鈴はほっとした。それだったら鈴の名を知っているも全然おかしくない。

「しばらく、ここにいといるといい」

だから男の言葉にも素直に頷いた。この足じゃすぐに村に帰るのは難しいし、何より今はもう村に帰りたいたいと思う理由がなかった。姉達のいない里。それは鈴にとってなんの意味も持たない言葉だった。

家の主達

昨日はあれから男が持つてきてくれた夕飯を食べてすぐに床に入った。色々な事で体力を消費しすぎたのだろう。布団にもぐって数分と経たないうちに鈴は深い眠りへと落ちて行つた。

翌朝目が覚めた時にはもうあたりは日の光に満ちていた。しつかり寝られたようで頭がすっきりしている。足を触ると相変わらずじくじくと疼くような嫌な感触がした。

(顔を洗いたい)

どこへ行けばいいだろうか。そう思つて障子をあけると、すぐそばで何かがびくつとはね動いた。

「あつ」

驚く鈴よりも先に声をあげたのは、昨日いた双子の少年。どうやら廊下に座り込んで何かしていたようだ。

「あの」

「「吉兄—————!!」」

鈴の声を数倍は上回る大きな声で叫びながら、威勢のいい足音を立てて走り去っていく。予想外の事にぽかんとそれを見送る鈴が次に目にしたのは、角から現れた昨日の男だった。ゆつくりした足取りで廊下を渡ってくる。今朝は掬塵色きくじんの色無地に、仙斎茶せんさいちやの羽織を羽織っている。手には風呂敷を抱えていた。男は鈴の前で立ち止まると微笑んだ。おはよう、とでも言うように。

鈴はお辞儀をした。

「おはようございます。あの、顔を洗いたいです」

ああ、という顔で男はうなずいた。その前にほんと風呂敷を渡される。開いてみると中には数着の色無地と帯が入っていた。そういえば、と、ずっと寝間着一枚で過ごしていた事に気づいて顔が赤くなる。慌ててお辞儀をすると部屋に戻り、中から牡丹鼠色ぼたんねずの色無地を選んで着替えた。鈴が着替え終わってから部屋を出ると、待つて

くれていたらしい男がゆつくりと歩き出す。途中振り返ると、くいと鈴を手招きした。

(ついでこいつてことなのかな)

まだ痛む足をそつと動かして後についていく。男の歩きはとても大の男のものとは思えないほどゆつたりとしていた。それはもしかすると鈴に合わせてくれていたのかもしれない。小さく息を吸い込み、思い切って口にしてみる。

「舌、様」

わずかに男の動きがとまってから、きよとんとした顔でこちらを振り返った。

「さっきの子達が呼んでいたから」

だからそれが男の名前なのだと思はれた。男はまた柔らかく微笑む。どうやらあっているようだ。

冷たい水で顔を洗うと思った以上にさっぱりとした。そういえばあれから体を清めていない。村にいた頃は毎朝虎の刻になる前までには襦をすませていたから、今の体の汚れが気になる。後でそれも聞いてみようか。鈴は顔をぬぐいながら考える。

少し戻った場所に、舌が待っていた。終わった？ と瞳で語りかけられる。鈴が小さく頷くと、またどこかへ向かってゆつくりと歩き出した。

次にたどり着いた先は居間だった。鈴がその部屋に踏み込むと、騒がしかった室内が一瞬静まり返る。みると、先ほどの双子に、昨日見た少女のような面おもての少年、それからさらに知らない、肌を日によくやけたきりりとした面持ちの少年が一人いた。

突然飛び込んできた人に思わず後ずさりする。なんでこうも男ばかりなんだらう。

「「あつ」」

双子がいるのを見つけた瞬間からうつすらと予想していた通り、

真つ先に声があがった。

「お前、名前！」

「なんていうんだ！」

それぞれの人差し指がまっすぐに鈴を差している。

「こら！ 人に名前を聞く前にまず自分から名乗れ！ それから人を指差さすな」

間髪いれずにぴしゃりと怒られる。怒った少年の顔は細面だが、
声音はきりつとしていて厳しい。

「俺、雷！」

「俺、風！」

きつ、と口を一字に結んで双子は答えた。

「僕は響です」

二人をしかつていた少年はにっこりと笑う。不思議なもので、笑うと急に男っぽさが出るようだ。

「俺は睦だ。よろしくな」

残る一人の少年もにっかりと笑って自己紹介をした。くしゃくしゃの枯茶色の髪も、日によく焼けた肌もどことなく太陽を彷彿とさせる少年だと鈴は思う。

「す、鈴です。どうぞよろしくお願い致します」

急いでその場で膝を折り深く礼をする。顔をあげると双子が目を丸くしてこちらを見ていた。

「鈴さん、僕達にそんな畏まった事はしなくても大丈夫ですよ。みんな礼儀なんてわからない奴らばかりですから」

「男だらけでむさくるしいしな」

響の言葉に睦が相槌を打つ。

「鈴、そんなところに座つてないで」

「部屋にはいれよ！」

一つの台詞を役割分担して喋るのが双子の癖らしい。

「こら！ 呼び捨てにするな！」

こつんこつん、小気味のいい音をたてて双子が小突かれる。流れ

るようなそのやりとりを鈴は興味深げに見つめた。澄沢村にいた人たちはみな静かで口数が少なかったし、礼儀や作法にとっても厳しかったからこんなやりとりは見たこともしたこともない。ちらりと舌を見上げると楽しそうに微笑んでいる。

促されて部屋の中に座るとすぐさま双子が興味津々といった形でまわりついてきた。

「「ねえ!!」」

「鈴はどこからきたの!」

「なんできたの!」

不躰だけれど純粋な二組の瞳が爛々と鈴を見つめる。

「え、えつと……」

どつちから、なんて答えていいか迷っているとなんな双子を捕まえるようににゅつと手が伸びてきた。

「吉兄」。腹減ったよ。昼飯は?」

そのまま腕にぎゅつと双子を抱えて、睦がねだるように舌を見た。「邪魔すんなよ睦!」

「離せよ睦!」

双子が睦の腕をはずそうと暴れ始めたところで、それを遮るように響が声高らかに宣言した。

「よしわかった。今日は僕が煮物に挑戦してみようと思う」

(挑戦?)

料理に不思議な言葉を持ち出した響を鈴よりも早く睦がぎょつとした面持ちで見る。

「お願いだから響はやめて!」

「「響ごめんなさい!!」」

睦だけではなく、双子からも悲鳴のような声があがる。ちつ、と響から小さな舌打ちが聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「吉兄お願い!」

響が頭の上で手を合わせた。舌の手がぼん、と優しく乗せられると、舌が一人部屋を出ていく。ああ、よかったと胸をなでおろす睦

と双子を響が忌々しげに睨んだ。

「吉兄の料理だって僕とそんなに変わらないと思うけどね！」

「食べて死なないだけましだよ！」

間髪いれずに返されるそのやりとりに鈴は思わず噴出した。

「ご、ごめんなさい」

口を両手で隠す。それでもくすくす笑いが止まらない鈴に響が口をとがらせながらも恥ずかしそうに言った。

「普段はこんなじゃないんだよ。ただ今はちょっと今までご飯の支度をしてくれてた人が里に帰っちゃって」

「早く次の人派遣されてこないかなあ」

遠い目をした睦に双子がうんうんと頷く。どうやらその食事の支度をしてくれてた誰かがいないせいでこのような状況に陥っているらしい。ならば、と鈴は笑いをこらえて切り出した。

「あの、私でよければお手伝いしましょうか」

「えっ！ほんと!？」

睦がはじかれたように鈴を見た。

「助かるよ！ 死なない食べ物ならなんだっていいからさ！」

「言っておくけど僕の料理だって死ぬわけじゃないからね！」

「すぐさま響が吼える。」

「「鈴ありがとう!」「」

先ほどと違って満面の笑みの双子がぐいぐいと手を引っ張ってきた。

「「台所はあっち!」「」

鈴は双子に手を引かれるまま台所へと向かった。

「じとん。」

台所の引き戸を開けた瞬間やたらと大きな音が聞こえた。包丁を持った吉が不思議そうに鈴を見つめていたので、手伝いに来た事を告げると吉がにっこり微笑んだ。

「今日は何を作るんです……か……」

まな板を覗きこんだ鈴の言葉が止まる。まな板の上に乗っているのはこぶし大程の正方形の白い物体が二つ。

黙ってきを見つめると、きも鈴を見つめ返した。

「……」

「……」

「……じゃがいも……?」

じつくりと考えた後で呟いた。きがそうそう、とばかりに首を縦に振る。

(一体どうしたらこんな形になるの……)

まじまじとみつめながら考えていたら、きは傍の新しいじゃいもをまな板の上にとりだすとためらう事なく包丁をいれた。

ごん、ごん。

大振りの形のよい見事なじゃいもが、皮、いや身ごと勢いよく切り取られていく。あつという間に正方形の物体がひとつ増えた。反射的に言葉が出る。

「あつ、私が切りますから、き様は何か他の事を」

不思議そうな顔をするきからなんとか包丁を奪い取り、皮を向こうと刃をいれたその時。

ごん。

隣で、きがどこからだしたのか別の包丁で盛大に人参を切っていた。皮は勿論剥いていない。

「あつ！ 私、全部作りますから、き様はお部屋に戻っていてください！」

ひきつる笑みを浮かべて鈴はきを台所から押し出した。

「うおー！ 久しぶりにまともな飯が出てきた！」

「めしー」

睦と双子がまばゆいくらいに目を輝かせて人数分のお膳に並べら

れた料理を見つめる。

「へえ！ 見事なもんだね」

響の声も心なしかはずんでいた。そんな四人をよそに、ちらりと舌を見るとにつこり微笑まれた。どうやら台所を追い出された事を怒ってはいないらしい。ほっと胸をなでおろす。いただきますもそこそこに睦と双子が食べ始めていた。はしたない！ と注意する響の口元も既にもごもごしている。

「おかわりはたくさんあるので、たくさん食べてください」

その鈴の言葉に、響までもが黙り込んでかきこむ勢いでご飯を食べ始めた。

新たな始まり

ざあ、と波立つ音を立てながら熱いお湯が鈴の体を伝っていく。辺りに立ち込める湯気の中で鈴はほんのりと顔を赤らめながら久々の風呂を楽しんでいた。

夕飯後すぐに湯屋の事を聞こうとしたものの、吉の姿が見当たらず困っていると響が何事かと訪ねてくれた。恐る恐る体を洗いたいのだと言ったら、そのまますたと小さな内風呂へと案内された。村では皆で大きな湯屋に入っていたし、そもそも冬の間以外はほとんどが川での行水のみだったから、小さいとは言え個人用の風呂がある事に随分驚かされた。物珍しげにしげしげと見渡す鈴に、響はじゃあお湯を沸かしてくるから、と軽い口調で言い、すぐにその通りにしてきてくれた。

熱いお湯なんてどれくらい久しぶりなんだろうか。冬以外は縁がなかったせいでもあまり熱いのは苦手だったが、それでもやはり水とお湯では感覚が全然違う。手桶を使って体を流すとまたほうと一息ついた。

足に巻かれていた包帯を丁寧にとっていくと、変色した生々しい打ち身のあとが出てくる。ただれるほどではないが、火傷も少ししているようだ。いつも触った時に感じる不快な痛みはそれが原因だった。

風呂からあがった頃には、鈴の顔色はすっかりと血色がよくなっていた。響に丁寧にお礼を言うと早々に部屋に戻る。しとねに足を投げ出し改めてまじまじと見た。この打ち身と火傷は間違いなくあの火事の夜についたものだろう。つい二日ほど前の事だと言うのに、それがなんだか別世界の事のように思えた。軽くしとねに倒れこむ。どこか懐かしいような匂いを吸い込みながら、鈴はいつの間にか眠

りへと落ちて行つた。

太腿に何かに触れている感触がして、しばし夢と現実の境目を行き来しながら鈴はうつすらとまぶたを開けた。ぼんやりとその眼にうつつたのは、行燈あんどんに照らされる壺の姿だった。

「……え」

思わず間抜けな声が出てしまう。その声に気づいて壺が鈴を見て微笑んだ。まだ覚醒していない頭で必死に考えていると、太腿にひんやりとした感触が走る。

「きゃっ」

「少し、我慢して」

みると壺が軟膏のようなものを塗っていた。それは塗られると一瞬ひんやりとして、それからすぐに患部が火照るように熱くなった。じつと耐えていると、そこにしゆるしゆると手際良く包帯が巻かれていく。火傷の手当てをしてきているようだ。同じようにもう片方の足も包帯を巻くと、壺は満足したように微笑んで部屋から去って行つた。

ふう、と大きな息を吐く。

いくら怪我の手当とは言え、やはり鈴も年頃の娘。太腿をあらわにしているのは想像以上に恥ずかしかった。顔をそむけてじつと耐えていたかららくにお礼も言えていない。

明日、起きたらきつと言おう。鈴はそう誓ってまた目を閉じた。

今朝は寝過ぎすことなくいつも通りの時間に起きて、一人台所へと向かう。鈴がこの家で役に立つ事といったらそれはきつと食事の準備ぐらいだろう。そしてその事は鈴にとって全くの苦ではない。とんとんと軽い調子で包丁を踊らせながら、今日の献立は何にしよつかと考える。一瞬空いた時間を利用して居間へ向かうと、睦が一人あくびを噛み殺しながら剣道着の準備をしていた。

「おはよう」

鈴に気付いた睦が力なく挨拶する。

「おはようございます。もう出かけるんですか？」

「うん。俺今日朝稽古だから」

開ききつていない目をこすりながら、まとめた荷物を肩にかける。

「朝ごはんはどうしますか」

「いいよ。いつも朝飯なんて食べてないし」

ふわあ、と大きなあくびをして睦が興味なさそうに言った。鈴は少し考えてから、足早に居間から出る。

「ちよつとまつててくださいね」

戻ってきた鈴の手には、小さな包みが抱えられていた。

「とりあえず、おにぎりにしてみましたので、よかつたらどうぞ
す、と差しだすと睦が目を丸くしていた。

「うお！ ありがとう！ 実はすげー腹減ってたんだよね」

そう言いながら活き活きとした手で包みを受け取る。やはり籐真のように育ち盛りの年頃は、誰かれ関係なく皆してよく食べるようだ。多めに包んでおいてよかつたとほつとする。睦を玄関で見送ってから、鈴はまた台所へと向かう。すると前方から吉が歩いてきた。
「おはようございます。もう少しで朝ご飯の用意ができますよ。それと、昨日はありがとうございました」

やつと言えた。深々と礼をすると、吉が微笑んだ。

お膳を居間へと運ぶと、先ほどはいなかった響に、吉の膝の上で半分以上寝ている双子が増えていた。

「おはようございます。朝ご飯できましたよ」

「おはよ。僕も運ぶの手伝う」

目が覚めきつていないのだろう。まだ眠たげな眼をこすりながら響が立ち上がる。

「いえ、大丈夫ですよ」

慌てて制そうとしたら、響がちらりとこちらを見た。

「あのさあ、別に鈴さんはお手伝いさんとかじゃないんだから、僕にも手伝わせてよ。それに別にそんな畏まった言葉づかいじゃなくて普通でいいから」

手厳しい言葉ですっぱりと切られる。

「わ、わかりました」

「わかりましたじゃなくてわかった、でしょ」

双子に怒る時と同じ調子で怒られる。

「わ、わかった」

そうそう、それでいいのと言いながらせっせとお膳を運ぶ響をみて、鈴は嬉しそうに笑った。

礼儀正しく箸を進める響と違って、やっと眠気半分、目覚め半分といった双子たちはぼろぼろと食べ物をこぼしながら食べている。

きはそれを無言でこまめに拾っていた。鈴の足の手当といい今までと言い、きはとても面倒見がいい。無口だし一見無愛想だからそうは見えないが。

「あれ？ 睦は？」

「今日は、朝稽古って言ってます……言ってたわ」

ああ、と響が頷く。

「あいつああ見えて剣道だけは強いからな。なんだかんだ練習さぼらないし」

「そうなんだ」

確かに睦は運動をしている者独特の屈強さがにじみ出ている。腕は決してたくましいわけではないのだが、形よく筋肉の乗った腕と言い、ばねのよく効きそうな足といい、忍びとして動いている籐真と体つきがよく似ているのだ。

「そう言えば、藤真は元気ですか？」

ふと気になって、傍らにいるきに訊ねてみたが、きは双子の世話に忙しくて気づいていないようだった。邪魔するのも悪いと思いきれ以上は追及はしなかった。それに籐真が今の鈴の状況を知ってい

れば、遠からずまたひよつこりと現れそうな気がする。

「籐真つて誰」

怪訝そうな顔でこつちを見てきた響に鈴は説明した。

「吉様のお仕事仲間で、私のお友達」

「ふうん。吉兄に仕事仲間なんていたんだ」

特にその事に興味がないようだったし、双子がやつと目が覚めたようであるさく騒ぎだしたから、それ以上その話題が続く事はなかった。

食事が終わって双子たちは寺子小屋に、響は塾へと出かけていく。片づけを終えて居間を覗くと吉はもういなかった。思い切つて家中の行っていない所へ歩みを進めると、少年達の床の間らしき部屋が目にはいる。なぜ床の間と分かったのかと言うと、誰かの布団が押し入れから盛大にはみ出していたからだ。一瞬ためらいながらも押し入れをあけると、雪崩のように一気に布団が飛び出だしてくる。それを一枚一枚きちんと畳んでからまた鈴は吉を探し始めた。

家の一番奥にある居室へとたどり着いたとき、中に人の気配を感じた。障子は開け放たれている。そつと障子の陰から覗いてみると吉が何か書き物をしていた。なんとなく邪魔をしてはいけない雰囲気を感じて、鈴はそつと息を呑んだ。

大きな背中に真剣な横顔。流れるような動きでさらさらと何かを書き進めていくその姿は絵のように自然で、知らず見入ってしまう。男の人のこういう姿を初めて見たからだろうか。胸の音がとくとくと聞こえるほど高鳴っていた。

ふ、と吉が鈴に気付いたようで、振り返つて鈴を見た。鈴が隠れて盗み見していた事に気付いて顔がみるみる火照つて行く。

（私たらなんてはしたないことを）

けれどそんな鈴の気持ちなどおかまいなしに、吉がまたいつものように微笑んだ。さつきまではあんなに真剣だったのに、次の瞬間には優しく笑っている。それが吉だった。

穏やかな日常

朝起きて食事の用意をして睦達を見送る。それから掃除に洗濯に忙しくしていると双子、響、睦の順で帰ってくる。その頃にはもう夕飯の用意を始めていて、食べ終わって全ての事が終わる時には夜になっている。寝る前に小さなお椀に少しだけ水を張って、祈りを奉げる。それで鈴の一日は過ぎて行った。

吉は朝からいる事もあつたし、いない事もあつた。昼から出かける時もあつたし夜に帰ってくる事もある。一日いたかと思えば一日いない。つまりはとてつもなく不規則だった。気がついた時に来るだけ玄関でお見送りをする。吉は忍びだけあつて足音を立てずに歩くから、ぼやぼやしているといつの間にか消えている。一週間も経つ頃には、鈴は常に吉の居場所を気にするようになっていた。

今日も寝る前に小さく祈りを奉げる。八百万やおひゃくまんの神様に、そして現世しよにはもういない姉達に。

不思議なもので、あれから鈴が姉達を思つて激しく泣く事はなかった。あんなに好きだったにも関わらず、初日のように泣き叫ぶ事が無いなんて、自分とはんでもなく非情になってしまったのかと悩むほどに。しかし、同時にまた鈴は姉達と繋がっている。そんな、なんともいえない感覚も感じていた。もう姿を見にいけないところに姉達は逝ってしまったのに、ふとした拍子に、たとえば風の囁きに、たとえば水の流れに、姉達を感じてしまうのだ。そのたびに鈴は戸惑い、そして同時に懐かしく暖かい気持ちになる。その不思議な感覚は決して嫌いじゃなかった。むしろ、村にいたころよりも自然で、気持ち良かった。修練はあれから一度もしていない。

「やっぱり私、巫女じゃなくて普通の娘なんだわ」

言葉に出してみてもっとする。村にいた頃は誰の目から見ても明らかに才能がなかったのに、皆姉達の妹だからという理由だけで力

があると思ひて疑わなかつた。鈴自身もそつだ。けれどそれがどれだけ鈴にとつて重圧だつたのか、解放された今だからこそわかる。(でも私、これからどうするんだろつ……)

事实に気付いたところで、すべてが解決ではなかつた。ずっとこの家にいるわけにもいかないのは十分わかつていても、また巫女としての力を期待されながら村に帰る日が来るのかと思つと、いつになく心が沈んだ。いつそ本当に女中としてどこかに仕える事ができたら……。そんな事を夢見てしまう。

風に揺れる衣をぼんやりと見つめながらそんな事を考えていた。

「鈴」

不意に名前と呼ばれる。ぱつと声のした方向を見ると、壱が立っていた。

「どうしましたか」

何か忘れ物だろうか。慌てて駆け寄ると壱がゆつたりとした足取りで歩きだした。

「壱様？」

「町にでかけよう」

町。

その響きに鈴は息をのんだ。物心ついたときからずっと澄沢村で暮らしていた鈴は、町なんて一度も行つた事がない。籐真からたまに話を聞く程度だ。どきどきと鼓動が速くなる。

「私と一緒に……？」

もちろん、という様に壱が微笑んだ。

「わ」

くねくねとしたあぜ道を過ぎて更に一里ほど歩くと、一気にたくさんさんの建物に、人の姿が飛び込んでくる。みなのおんびりとした様子で談笑しているその様を、鈴は物珍しげに見つめた。

茶屋に、八百屋に、呉服屋に、何屋なのかわからない建物までた
くさんの店が暖簾のれんを開けている。大人も子供も、通り過ぎていく人
の顔はみないきいきと輝いていた。

「すごいですね、町って」

嬉しそうに吉に話しかけると見守るように微笑み返される。自分
ははしやぎすぎてみつももない姿を晒していないだろうかと鈴は頬
に手をあてた。

吉は慣れた足取りで呉服屋に入り、一言二言なにか主人と話した
かと思うと、主人がさつと奥に引っ込んだ。それから大量の女物の
呉服を持って出てくる。ずらつと並べられた呉服には、正絹から麻
まで、色無地から小紋までのたくさんのものがあった。

「すごい……」

近くで手にとつてまじまじと見る。巫女はずつと白無地に赤袴し
か着させてもらえなかったから、こんなに可愛い着物を見るのは初
めてだ。鮮やかな花が描かれた小紋に、流れるような模様が美しく
入っているもの、一見色無地に見えて実は金糸が織り込まれている
ものまであった。鈴が見とれているうちに、主人が持ってきた服を
全て風呂敷に包みだす。それを吉が受け取ると、行こう、と促され
た。

（あんなに大量に何に使うのだろう）

家には男しかいないし、仕事で使うものでもなさそうだし、もし
やそちらの趣味と言う事もないだろう。とても失礼な事を吉の隣で
ぼんやり考えながら何気なく視線を彷徨わせていたら、ふとある一
点に目が吸い込まれた。

「吉様、あの、少しあの店によつていってもいいですか？」

吉の返答を聞くのもそこそこに、早立つ気持ちを抑えて店頭に走
り寄る。一目見て感嘆の息が漏れた。

「綺麗……！」

それはとんぼ玉で出来たかんざしだった。丸いとんぼ玉の中に色

とりどりの飾りが入っている。花を模したものや、動物を模したもの、そのどれでもないただ艶やかな色を浮かべているもの。どうやったらこんなものが作れるのだろう。鈴はほう、と息をつく。

「好きなものを選んで」

頭の上から降ってきた声に鈴は慌てて否定した。

「いえ、駄目です」

そんな高価な物頂けませんと慌てて後ずさりする鈴を余所目に、吉はひよいと一本のかんざしを手にとった。それは下半分が紅藤色べにふじで、上にいくにつれ綺麗な撫子色なでしこになっているものだった。なかには小ぶりの白い花がたくさん詰まっっていて、全体には小さな金箔が控え目に、けれど上品に散らされている。鈴がさつき一目で見て気に入ったものだった。

「だ……だめです。それに私、使いませんから！」

使わないのは事実だ。髪を高く結いあげる習慣のある町娘と違って、巫女達にはその必要がない。だからもらっても使わないだろう。しかし言葉ではそう言っても、鈴の瞳には欲しいという気持ちがありとにじみ出てしまう。吉はそれを見て満足すると、さっさと勘定をってしまった。

「吉様！」

すたすたと歩き出す吉を追いかけて鈴が怒ると、吉はいたずらっぽく、はは、と声に出して笑った。それは年相応の、無邪気な笑い声だった。どきりと胸が跳ねる。

(こつこつ笑い方も、するんだ)

笑いごとじゃないです、と口を尖らせながらも、鈴は鼓動を鎮めるために胸にそつと手をあてた。

やっと再び家についた時には、玄関で双子が座りこんで石を積み上げて遊んでいた。

「「あ」「」

「吉兄！ 鈴！」

「おかえり！」

足にまとわりつく雷の髪の毛を吉の大きな手がくしゃくしゃとなでる。

「あ、ずるい。風もー」

風が吉の袖をぐいぐいと引つ張ると、吉は風の頭もくしゃくしゃと撫でまわした。双子が嬉しそうに笑ってから、今度は鈴に飛びついて来た。

「「ご飯なーに」」

「今日はお魚の煮付けよ」

「えー。俺魚きらい」

「俺もー。でも鈴のつくるのはおいしいからいい」

「うん。俺も」

言うだけ言うと、吉が持っていた風呂敷に気付いたようだ。獲物を見つめる瞳でじつと風呂敷を凝視している。

「「それなーに」」

「鈴の着物だよ」

「「なーんだ」」

双子は興味なくなりましたとばかりに気が抜けた返事をして、今度は二人で追いかけてこをはじめる。それとは裏腹に鈴は目を白黒させて叫んだ。

「い、吉様！ それ、私のだったんですか！」

吉がにこりと微笑む。

「そんな……そんなたくさん！ 今から返品してくる事ってできないのでしょうか」

さつきみたきらびやかな着物がまさか自分のために買われているものだとは露ほども思わなかった。あんなに質がいいものを、あんなに大量に。自分で銭を持った事はなかったけれど、きつとてつもない金額だと言う事くらいは容易に想像できた。

「鈴」

しっかりと名前を呼ばれ、見つめられる。

(う……)

これは吉が何かを笑顔で押し切ろうとする時の行動だ。その凜とした瞳にまっすぐに見つめられると、何も言えなくなってしまう。「でもほんとうに、そんなにたくさん。かんざしまで買って頂いたのに」

そんな鈴の手にはあのかんざしがしっかりと握られていた。言葉尻がもによもによと空に吸い込まれていく。鈴が了承したと思っっているのか、吉は楽しそうに笑いながら早々と歩き出していた。

「吉様！」

鈴が呼びとめる。

「あの、着物も、かんざしも、本当にありがとうございます」
勢いよく礼をした。

「吉」

吉が珍しく自分の名前を呟いた。

「え」

「吉でいい」

様はいらない、という事なのだろうか。

「でも……」

「鈴」

返事を期待するようにじっと見つめられる。吉は待っているのだ。鈴が名前を呼ぶ事を。それがなんだか恥ずかしくて、鈴の頬が段々赤くなってくるのがわかる。ああ、最近頬を赤らめているばかりだと思う。いつからこんな風になってしまったんだろう。

「吉、ありがとう」

吉がふんわりと笑った。ぽん、と大きな手が頭にのってくしゃつと撫でられる。鈴は赤くなった顔をごまかすようにびたびたと手を頬にあてていた。

賑やかな風

その日、鈴は食料の買い出しを終え家への帰路へとついていた。家へはいつも佐吉という、吉とそう年の違わない男が人数分の食糧などを届けてくれる。しかしその日は佐吉の代わりに妹の佐代が重い荷台を引きずりながらやってきた。もう大の大人の佐吉と違ってまだ女の童わらわともいえる小柄な佐代には、六人分の食料が乗った荷台は随分重かったのだらう。小さな手に銭を受け取る時もまだ頬を林檎のように火照らせながらふうふうと言っていた。丸い瞳いっぱい、やりとげたぞと言わんばかりの輝きをきらめかせている。だから豆腐が一丁足りないと感じいた時も、鈴はくすりと頬をゆるませただけだった。

買ったばかりの豆腐を腕の中で揺らせながら鈴は足取り軽く町を歩く。

鈴はあれから何度も町へと訪れた。最初のうちは吉に連れ出される形で、慣れてくると今度は一人でも出かけるようになった。

店の通りの過ぎると、賑やかな子供達の声が聞こえてくる。こら一帯には寺子小屋や塾などの施設が多く、響と双子もこの中のどれかに通っているはずだ。

もしかしたらいるかもしれない、と期待を込めて見渡す。

「あ」

本当にいた。学友だろうか。響は同じ年頃の少年達と何か話しているようだ。

「響」

名前を呼びながら駆け寄ろうとして、ふと鈴は様子がおかしい事に気が付いた。壁を背にした響をぐるりと囲むように、四人の少年たちが立っている。そして学友と話すには響の表情が硬い。口をきくと一文字に結んで、勉強用具で身を守るようにきつく片手に

抱えている。響を囲んでいる少年達の顔は見えないが、何か一方的に言われているようだった。

(どうしよう)

大事な話にしろ、喧嘩にしろ、鈴が簡単に口出ししてはいけない事かもしれない。かといって響は反論するわけでもなく黙ったままだ。鈴がおろおろとその場に立ち尽くしていると、

「おい、響。なんとか言えよ！」

どん、と響が突き飛ばされる。突き飛ばした少年が一番体格がよく、また響も細い体をしていたために勢いよく壁にぶつかった。ほとんど壁際に立っていたとはいえ、響の顔が一瞬苦痛にゆがんだ。

「やめて！」

咄嗟に鈴は飛び出していった。突然の声に少年達がぎよつと振り返る。近くで見るとやはり少年たちは響と同じ年頃のようだ。響より体格のいい子や背の高い子もちらほらといたが、みな顔つきが幼く鈴よりも年下だと言う事がうかがい知れる。

(大丈夫、年下なら怖くない)

鈴はぎゅつと拳を握った。

「ら、乱暴はやめて」

声が情けなく震えている。けれど年上の威厳を出そうときつと少年たちを睨みつけた。

「鈴」

響が驚いたような顔で鈴を見ている。少年たちはおろおろとお互いの顔を見合っている。

「か、帰ろう。響」

勇気を振り絞ってそういうと、その勇気を台無しにするかのよう
に響がぷつと吹き出した。

「えっ、ひ、響？」

驚く鈴を尻目に今度は大きく腹を抱えながらあっはっはと笑いだす。それには少年達もびっくりしたようで、今度は慌てて響と鈴を交互に見比べていた。

「いいよ。帰ろう鈴」

おかしくてたまらない、という風に目が笑っている。

「お前ら、人を妬んでる暇があったら勉強しろよ」

ほん、と先ほど響を突き飛ばした少年の肩に手をのせると、行く、と鈴を促して歩き出した。

「だ、大丈夫なの響」

「大丈夫だよ。あいつら、いつも僕が成績がいいからっていちゃもんつけてくるんだ。相手にするのもめんどくさくていつも黙ってやりすごしてたんだよ」

なんでもないような風に軽口をたたく。それじゃあ鈴のしたことは。

「ごめんなさい、余計な事しちゃったかも」

いつも足早な響に合わせて鈴も小走りですべていく。

「いいよ。嬉しかったし」

響が大きく伸びをしながら言った。

「それに、なんか面白いもの見れたし。鈴、すっげー声震えてたよ。そう言うてにやっとな響がいたずらっぽく笑う。

「響！ 私は必死だったんだからね」

そう、鈴は本当に必死だったのだ。だいぶ慣れたとはいえ、まだまだ男の存在は鈴にとって慣れないものだ。特にたとえ年下であるうと、乱暴な男は少し怖かった。鈴がむくれて響よりも速く、音が聞こえそうなほどずんずんと歩き出すと、後ろから響の大きな声が聞こえた。

「ありがと！」

えっ、と鈴が振りむくと、大きな口をあけて笑う響がいた。そして一瞬で鈴を追い抜いていく。

「鈴ー！ 家まで競争！」

そんな事を言いながらも遠くまで走っている。

「む、無理よ！ お豆腐持ってるのに！」

腕の中でちやぶちやぶと揺れる豆腐を指差すと、すぐさま響が戻

つてきて鈴の手からそれを奪い取った。

「これでいいだろう」

言うやいなやまた走り出ししている。手には勉強道具の他に不安定な豆腐を抱えているというのに、どちらもこぼす事なく器用に走っている。すごい、なんてのんきに思ってから鈴は慌てて響を追いかけた。なんだかんだ言ってもまだ、響は鈴よりも年下でやんちゃざかりだった。

その次の日の事だった。いつもどおりに響の声がして、帰って来たんだと思つて出迎えると、昨日の響を囲んでた少年たちが響の後ろにずらりと並んでいた。

一瞬警戒した鈴だったが、響の落ち着いた顔と、そして鈴を見て急にもじもじとした彼らを見て意味がわからず目をぱちくりとさせる。

「こいつらが、うちで勉強教えてほしいって頼むから連れてきた」

平然と言い放つとさつさと家にあがる響。その後ろを昨日とは打つて変わって大人しく、いや、頬を赤らめながらついてくる少年達。

「どうもー」

「お、お姉さん、おじゃまします」

ぺこりと頭を下げながら鈴に挨拶していく少年たちを見て、鈴も戸惑いながら迎え入れた。それから余計なお世話かと思いつつも、心配して様子見をかねてお茶を持って行つても、鈴を見ると彼らはへらつと笑いだすだけでおおむねは大人しく勉強しているようだ。

珍しい客人に双子たちと顔を見合わせてみても、状況がさっぱりつかめない。やがて夕時になると彼らはまた、

「どうもー」

「お姉さん、おじゃましましたー」

とへらつと笑いながら帰って行った。それを笑顔を取り繕って見送ると、急いで響の元に駆け寄る。鈴が変な顔をしながら事のいきさつを聞くと、にやにやと笑いながら響が教えてくれた。

「いきなり今日、勉強教えてくれってさ。しかも僕んちで」

「どうやら響が言うには、昨日までの態度は嘘だったかのようだ、今日突然彼らがそわそわと頼んできたのだとか。」

「ふうん……男の子って、そういうものなんだ」

感慨深げに呟く鈴を見て、響は更にもやもやとした。もう、それは輝かんばかりの悪い笑顔だ。その上視線はずっと鈴を見ていた。「……な、なに」

「いやあ、鈴も隅におけないなあと思って」

言葉の意味がわからない。なぜここで急に鈴が出てくるのか。響の表情の意味もわからなかった。

「どういう意味」

本気でいぶかしくて訊ねると、響が実に愉快そうに言った。

「あいつら勉強を、なんて言ってるけど、本当は鈴が目当てなんだよ」

「私？」

思わず素っ頓狂な声が出る。

「自分で気づいてないだろうけど、鈴は見た目がいいからね。あいつらみたいなのがやつはころつといくんだらう」

鈴は眉をひそめた。

見た目がいい……とは間違いなく自分の事を言っているのだらう。ここでわざわざ嘘をつく必要もないし、本当の事を言ってくれているのだと思う。しかし。

「ほら、気づいてない」

「やっぱりね、とでも言うように響が言った。」

「鈴はもうちょっと自覚した方がいいよ」

「だって」

生まれてからずっと見慣れてきた自分の顔。けれど鏡にうつるその顔を特に意識した事はなかった。鈴の顔は鈴の顔であって、それ以外の何物でもない。強いて言えば、姉達に似ているという事が唯一嬉しかった事ぐらいだらう。

「やだねーこれだから無自覚の人は」
そんなのじゃない、と拗ねるように反論しながら、鈴はある事を考えていた。

行燈に照らされた薄明るい室内で、鈴はいつものように壱から手当を受けていた。あれから毎晩、壱はまめまめしく鈴の手当をしてくれる。鈴が自分でやると言って止めたこともあったが、いつものように笑顔で押し切られて、結局気がつけばそれが当たり前のようになっていた。

とはいえ、足をさらけだす羞恥心はいつまでも消えない。それどころか日に日に恥ずかしく、耐えられない事のようになっていく。今夜も鈴は恥ずかしさをごまかすように、今朝響に言われた事を愚痴のように壱に話していた。

「響ったらひどいの。私の事馬鹿にしてばかり」
気がつけばいつからか、この時間が二人の時間となっていた。いや、正確には鈴がいつも一方的に話して、それに壱が相槌を打っているから二人の時間とは言えないかもしれない。それでも朝は必ず家族の誰かしらが家にいるから、特に口数の少ない壱と二人きりで話せるのは今の時間だけだった。

「それでね……響が」
次の言葉を言うのに一瞬ためらう。たいしたことないはずなのに、心臓がドキドキと早鳴りしていた。

「私が、……見た目がいいって言うの。……ほ、本当かしら」
何気ない振りをよそいなながら、ちらりと横目で壱を盗み見る。
なぜだろう。あの時。

もし……他の人はともかく、壱に美人だと思ってもらえるなら、それはすごく嬉しいと思ったのだ。

じっと、鈴が乞うような濡れたような目で壱を見る。鈴本人は自分がそのような目をしている事には一切気づいていなかった。やが

て鈴の視線に気づいたきがまっすぐに鈴を見た。

「鈴は綺麗だよ」

ふわりと、笑みが零れた。

自分でもずるいと思う。あんなふうに言われたらきがまず否定はしない事は分かっていた。

それでも。

その言葉を、きの口から聞きたかったのはなぜだろうか。

思いの先に

それから少年達はよく遊びにきた。いや、よくというよりは、ほぼ毎日というべきだろうか。最初は借りてきた猫のように大人しかったというのに、今ではその大人しさはどこへやら。勉強する気配など微塵もないようだった。その証拠に、初めの頃は持ってきていた勉強用具も、いつからかないのが当たり前となっていた。

「どーもー」

「お姉さんちわつす！」

威勢のいい挨拶もそこに庭に飛び出す。その中にあの響も混じっているというから驚きだ。鈴は庭で駆けずり回る少年たちを不思議な面持ちで見た。響が子供のように息を弾ませながら何か毬のようなものを蹴飛ばして遊んでいる。気がつくまで双子もその中にまじってちよろちよろとしていた。

「響ー！ はずしたらお前、罰として先生に告白するんだぞ！」

「止められなかったらお前が告白するの間違いだろ！」

額から汗を垂らしながらも大きな声を張り上げる。あんなに白かった響の肌がこの頃ではすっかり健康的な色を取り戻している。本当に楽しそうなその光景に鈴は笑みをこぼした。

「うお、すげーな。響に友達なんてできたんだ」

ふいに後ろから睦の声がした。

「睦、おかえり」

「ただいま」

振り向くと、睦が剣道着の入った包みを床に下ろすところだった。「何か飲み物いる？」

気がつけば、そよ風が気持ちよく頬を撫でる季節は終わり、うだるような暑さの夏がやってきていた。睦の額にもつつすらと汗が浮かんでいる。

「うん。お願い」

台所の片隅にある小さな地下蔵から、冷やしておいたお茶を取り出すと、そこから睦の分を器に入れて居間へと持っていく。出された冷たいお茶を睦は喉を鳴らして一気に飲み干した。

「あの子達は、響の初めての友達なの？」

庭にいる響達を見つめながら鈴は訊ねた。

最初は鈴を目当てにやってきていたらしい少年たちも、気がつけばごくごく自然に響と仲良くなっていった。響も最初はなんて事のない風を装っていたが、今ではもうその楽しそうな顔を隠す気もないようだ。

「響ってやたらと口が達者だろ。根は面白い奴なんだけど、自尊心も高いからさ。最初にかかわれたりすると絶対に心を開かないんだ」

頬杖をついて、どこか困ったように笑っている顔で睦は外を見つめた。

「ある意味鈴のおかげだな」

そう言って嬉しそうに笑う睦の眼差しは、一瞬どきりとするほど毒に似ていた。鈴は目を細めて眩しそうに睦を見つめる。

「睦もお兄ちゃんなんだね」

「なんだよそれ」

照れたように睦が笑うのを見て鈴も一緒に笑う。

「みんな何かあるときのところに行っちゃうから、普段はあんまり気付かないけど」

睦もこんなに弟たちの心配をしていたんだ。最後は心の中で呟いて、鈴は睦を見た。

「まあな」

俺はほとんど何もしてやれないけど、と睦が言った。その響を見る目が本当に優しく、鈴はかつて自分を見た姉達の瞳を思い出していた。

「姉様達も、こんな気持ちだったのかな」

何気なく呟いた言葉に睦がこちらを見る。

に分かる。

「で、俺たちももうだめだ、と思って目をつぶったら、気づいた時にはそいつらはみんな死んでた。倒れたそいつらの前に、壱兄が一人で立っていたよ」

一体壱がその時何をしたのかは分からなかった。ただ後の調べで、強盗達は皆頸動脈を一筋で断ち切られていた。しかしその時の壱の手には刃物も何も持っていなかったという。唯一の刃物の料理用の包丁も触った形跡はなかった。今の響よりもまだ幼い当時の壱が一瞬で一体何をしたのか。それは誰にもわからなかった。

「それで壱兄が知らない大人に連れていかれてさ。ああ、俺達もう終わったんだ、って思ってたら、なんでかこの家与えられて、おまけに壱兄は藩主の松浦様のところで働くようになって」

わけがわからないよな、と苦々しく笑う睦を鈴は悲痛な面持ちで見つめた。

鈴にはすぐに分かった。きっと壱は”力”を持っていたのだ。姉達が巫女としての力を持っていたように、壱は忍びとして最適な力を。

それが壱にとって幸せな事なのかは鈴にはわからない。力を持っているがゆえに巫女以外の道を許されなかった姉達のように、きつと壱には忍び以外の道は許されていないのだろう。

「でも俺たちはそれでよかったと思ってる。勿論いい家に住めて生活に困らないっていうのもあるけど、あそこで家族全員がやられるなんてごめんだもんな」

まるで鈴の心の問いかけを聞いたかのように睦が言った。鈴は静かに睦の目を見つめた。

「だから俺も早く大人にならないとな。壱兄一人ばかり苦勞させたくないんだ」

そういつて笑う睦はとても大きく見えた。ただただ姉達と一緒にいたくて頑張っていた鈴とは違う。もっとその先を、壱を守るためにも睦は頑張っている。

「睦、かつこいいね」

心の底からそういうと、睦は照れたようによせよ、と笑った。それをにこにここと見ていたら、ひよいと壱がふすまから顔を覗かせた。

「あ、壱おかえり」

立ちあがって鈴はおや、と気付いた。壱はふすまから顔だけ覗かせて居間に入ってこようとしない。

「壱？」

何か困ったような顔をしている。つられて睦も壱を見た。

「あ、もしかして」

睦の言葉で鈴も気づいた。足早に壱にかけよると、ふすまの向こうに隠した手の中を覗きこむ。

壱の大きな手の中に、小さな雀が一羽包まれていた。その翼は片方だけが変な方向に曲がっている。

「やっぱり」

鈴は呟いた。

壱はこうしてよく手負いの動物を連れてくる。時にやせ細った野良犬を、時に足を引きずった猫を。一番大変だったのは、身重の狸を連れて来た時だ。母狸は警戒心丸出しで怒るわひっかくわ、なのに家から立ち去ろうとはしないわで壱も鈴も傷だらけになったものだ。

「五匹目ね」

動物が、ではない。鳥だけだ。

「今度は何」

睦が座ったまま聞いてくる。

「雀」

「痛い思いしなくてすみそうだな」

睦は露骨にほっとした顔をした。

というのも、なぜか睦は動物に嫌われるのだ。おとなしかった犬も猫も、睦を見ると飛びかかってくる。狸の時に至っては恐ろしくて世話どころか近づくと事すらできなかつた睦である。

鈴達が怒らない事に気付いたのだろう。吉はにこにここと居間へ入ってきた。

「あ、吉兄！」

すぐさま双子がまとわりついてくる。

「あ、また何か拾ってきた」

「今度は雀だ！」

「あ、どうも、睦さん吉さんちっす！」

「おじゃましてまーす」

どかどかと響の友達も室内へとあがってくる。

「吉兄！ また何か拾って来たの？」

響が怒りながら吉の手の中を覗いた。

「雀か。これだったらすぐ治るだろ」

響の言葉に、吉が嬉しそうに笑った。

美しい娘

その日いつものように一通りの家事をやり終え、一息つこうと居間へと入ったところで、鈴ははたと居間の隅に転がっている二冊の冊子に気がついた。鈴の見間違いでなければ、あれはいつも双子が寺子小屋へと持っていく宿題用の冊子ではなかったか。

「あ、やっぱり」

手にとって呟く。分厚く束ねられた冊子には、片方には雷、もう片方には風とでかかど名前が書いてある。

「二人して宿題を家に忘れるなんて」

一体双子と言うのはどこまで似ているのやら。くすりと笑みがこぼれる。しかし笑っている場合ではない。時刻はもう午の刻をとうにすぎている。今頃はもう午後の部の勉強がはじまっているのではないだろうか。

まだ、間に合うかしら。でもきつとないよりはましだろう。あわてて草履をひっかけると、鈴は双子の寺子小屋に向かって駆け出した。

「「すず！　ありがとう！！」

ちょうど鈴が寺子小屋を覗いた時、二人は揃えたかのように同じ顔でむくれて叱られていた。本当にやったんだもん、と雷が呟けば怒られ、家に忘れてきたただけだもん、と風が呟けばまた怒られていた。恐る恐る声をかけると、二人をしかっていた男の先生が鬼の形相で振り向いたものだから危うく腰を抜かすところだった。しかし鈴の姿を確認するとその先生は打って変わって輝くばかりの笑みを浮かべて近づいてくるではないか。

「あいつ、さっきまで怒鳴ってたばかりだったくせに」

「鈴見た途端ころっと態度かえちゃってさ」

「「こら、先生のことあいつなんて言っちゃだめよ」

とがらせられるだけ唇をとがらせて、双子は先生の真似をした。それを後ろで先生がにこにここと鈴を見ている。今の言葉が聞こえてなかったといいけれど、と鈴は冷や汗をかいた。

「もう宿題、家に忘れちゃだめよ」

二人の背を押して教室へ促すとはあい、と不満げな返事が返ってきた。

「いやあ、姉上殿わざわざすみません。こら、雷、風、今度から忘れるなよ！」

先生の言葉に双子はべえっと舌を出して逃げるように席に駆けていく。

「あつこら！ すみません、先生」

「いえいえいいんですよ。それより姉上殿、よかつたらちよつと授業を見学していきませんか」

にこにここと鈴を寺子小屋内に招きいれようとする手をさつとかわして鈴は笑顔で言った。

「いえ、まだ家の中の事が残っているのでこれでおいとまします」

そうですか、と露骨に残念がる男に一礼して鈴は足早にそこから立ち去った。あの男に悪気はないと分かっている、どうも以前から鈴にやたらべたべた触ってきたりと馴れ馴れしくて好きになれない。今日は生徒の目があるからだろう、あつさりと解放してもらえてほっとした。

(そつだ、せつかく出てきたのだから、何か町で買っていこう)

寺子小屋を出てすぐのところ、鈴ははたと思いついた。確かこの間、雷と風がいくつか小鉢を割ってしまった気がする。以前どこかで食器を置いているお店をみかけたのだが、それは一体どこだっただろうか。

うろつろと町を歩いていると、ふと見慣れた後姿があるのに気付いた。寝癖がたったままの頭に、すらりとした長身、それにあの軸がぶれないまっすぐな歩き方、あれは。

「吉様！」

鈴が吉にかけよるよりも早く、傍らの茶屋から一人の女が飛び出してくる。その声に反応して見えた横顔はまぎれもなく吉だった。

「吉様、随分久しぶりじゃない、元気にしていらしたの？」

女は声はずませて、吉の裾をつかんでいる。思わず鈴は足をとめた。

(誰？)

「ねえ、たまにはよって行ってくださいな。団子くらいあたしが奢るから」

言いながらするりと吉の腕に自分の腕を巻きつけて、ぐいぐいと茶屋の中に引つ張って行こうとする。その馴れ馴れしさはどこか先ほどの先生を思い出させるもので、鈴はむっと眉をひそめた。

「すまない。今日は時間がないんだ」

いつもの笑顔で、やんわりと腕をほどく。

「あ、じゃあ吉様、明後日の夜は空けておいてくださる？」

「明後日の夜？」

「ねっ、お願い！ どうしても頼みたい事があるの！」

吉はしばし口に手をあてて考えて、それからふわりと笑った。

「分かった、あけておく」

嬉しい！ と女は声をあげて喜んだ。じゃあ明後日ね、と大きく手を振る女に吉は微笑むと、静かにその場から立ち去った。

その様子を鈴はじっと見ていた。

(なんだろう)

鈴の心の中で言いようのないもやもやとした気持ちが始まる。と言う事は明後日の夜、吉はこの女と会っているのだろうか。知らず、鈴の足は女のいた茶屋へと向かっていた。

女は箒を手に店前の掃除をしていた。鈴には気づいていない。

「美代」

あと少しで、という距離になって不意に女に声かけられた。鈴ははっと我に帰って、咄嗟に茶屋の陰に隠れた。

「あんたまた、大胆な事してるわねえ」

さつきとは違う女が、呆れたように呟いている。

「いいの。今の時代女だって前衛的にならなくちゃ、あの方は落ちないわよ」

茶屋の陰からそつと覗くと、美代と呼ばれた女はまっすぐに背筋を伸ばしていきいきと答えていた。勝気そうな大きな瞳が生氣にきらきらと輝いている。卵型の小さな顔に、すんと筋の通った鼻、形のよい花弁のような唇。美代のはつきりとした顔立ちは健康的な色気に満ちあふれていた。

(綺麗な、人)

鈴は見とれた。大輪の花のような、華やかな雰囲気、美代には漂っている。素朴な着物でもこれなのだから、美しく着飾ればそこらへんの姫にだって負けないだろう。

「それはそうだけどさ、今まで吉様に振られた女がどれだけいると思ってるの。それにあんた、宍戸の大名様に輿入れを望まれているんでしょう?」

「それはそれ、これはこれよ。私の本命は別にいるからってちゃんと宍戸様にも言ってるんだから」

からからと明るい笑い声をたてて美代が笑う。その姿は咲き誇る夏の花によく似ていた。

「あんたねえ……そんな事言ってる斬られないのも、宍戸様だからこそよ? あんないい方滅多にいないわよ」

「そんな事わかってるわよ、多恵。でもね、吉様が好きなのよ。何もせずにこの恋を諦めて輿入れするなんてまっぴらごめんだわ」

吉様が好き。その言葉を言った時の美代の瞳は女の鈴から見ても艶めかしかった。情熱と言うものが形を持つのなら、今の瞳がそうなのかもしれない。あんなにまっすぐに、あんな目で愛をささやかれたら、男なら堪ったものではないと思う。

「でも美代。あんたも知ってるでしょ。最近吉様が拾ってきた女のこと」

鈴の心臓がどきりと跳ねた。

(私の事だ)

途端に美代の顔が曇った。

「知ってるわよ。鈴とかいう娘でしょ」

「だから最近町にあんまり来ないって噂よ。どうする気なの」

美代の美しい眉間にしわが寄る。

「別に。近くで見た事あるけど、確かにあの娘はそこそこ綺麗よ」

「だったら」

「でもそれだけじゃない」

ふん、と美代が鼻を鳴らす。

「見てればわかるわ。あの娘、恋愛のレの字も知らないわ。それにね……」

美代は勝ち誇ったように言った。

「あの娘、吉様にとって犬や猫と一緒になのよ。大方何か事情があったから拾ったんでしょ」

「ずばりと言いあてられて、ぎゅっと握りしめた鈴の手にじとりと嫌な汗がにじんだ。

「なんでそんな事わかるの」

「吉様の目を見てれば分かるわよ。あれは愛しい女を見る目じゃないよ、か弱い生き物を見る時と同じ目よ」

「愛しい女って……吉様そんな目で誰かを見た事なんかないじゃないの」

多恵からあきれたような声が返ってくる。

「わかってないわね、だからこそ勝ち目があるのよ」

美代は真剣な顔で多恵を見た。箸を握る手に力がこもっている。すつと息を吸うと、美代は一気に喋った。

「あたし、明後日の夜吉様に告白するわ。ううん、告白なんて軽いものじゃない。抱いてもらうの」

「美代、あんた」

多恵の目が驚きで見開かれる。

「本気よ」

美代の声はかすかに震えていた。多恵が何かを言おうと口を開きかけたが、思い直したように閉じられる。それから大きなため息をついた。

「まあ、頑張ってね、一応応援してるから」

「本当？ やっぱり多恵、大好きよ」

しぶしぶといった表情の多恵に美代が大きく飛びついた。

「あんなねえ、自分がどれだけ大変な事しようとしてるかわかってる？ いくら穴戸様でもこれがばれたら打ち首よ？」

「だから多恵がいるんじゃないの。ねっ多恵、明後日はお願いね」

甘える猫のように美代が多恵の肩に首をもたげた。

「そういうのは殿方にする事であってあたしにしたってだめなんだからね」

口ではそういいながら、多恵もまんざらではなさそうに笑っていた。

「あたし決めてるのよ。明後日の夜にもし情けをもらえたら、もうそれ一度きりでもいいの。穴戸様にお断りして、一生き様を追いかける」

思いつめたように美代は言った。その瞳は怖いくらい、どこまでも真剣だった。

「美代……」

多恵は困ったように美代を見た。やがて二人が茶屋の奥に入ってしまったっても、鈴はしばらくその場に立ち尽くしていた。固く握られた掌はもう感覚がない。

（きは……きは、どうするの）

あの腕の中に美代を抱くのだろうか。あの優しい瞳を美代に向けて、美代の愛の囁きに答えるのだろうか。

考えただけで心臓が凍る思いがした。鈴は顔を硬くこわばらせて一目散に家へと向かって走り出した。

産声

居間に並べられた六つの膳、差し込む夕日。いつもと変わらぬ夕食の風景の中で、いつからか、気がつけばうるさく蝉の音が聞こえるようになっていた。

双子たちがとりとめのない話を、まるで競い合うかのように大きな声で喋り合っている。それを睦が楽しそうに聞いている横で、ちよいちよいと鋭い突っ込みを入れているのは響だ。吉は会話には参加せず、静かに聞きながら双子の口の端からこぼれた米粒をとっていた。

その中で鈴だけが呆けたように右手に箸を、左手に茶碗を持ったまま固まっていた。瞳の視点は定まっておらず、虚ろにただ目の前の風景を視界に収めている。

「「すず？ すーずー？」」

袖をくいくいと引つ張られる感覚と、鈴の名を呼ぶ二つの高い声にはっと我に返る。

「あ……ごめんね。どうしたの？」

そんな鈴を見上げる双子の茶碗はいつの間にもやらすっかり空になっていた。まだ細く小さな両手が二組、誇るようにそれを突き出してくる。

「「おかわり！」」

「はいはい、待ってね」

片手にひとつずつ茶碗を抱えて鈴が立ち上がる。見た目は幼いの雷も風も鈴の二倍は軽く平らげるあたり、やっぱり男の子はすこいなんて思いながら。

「あ、鈴。俺も」

そう言ったのは睦だった。

けれど鈴の両手にはもう双子の茶碗で埋まってしまっている。どうしようかと思えばぐねる前に睦が自ら立ち上がった。

「ってそれじゃ無理だよな。自分でやるよ」
そう言つと睦は鈴と並んで台所へと向かった。

あれから一日経つた今でも、鈴は壱に何も聞けずにいる。

たまたま見てしまった事だ、鈴には何の非もない。なんて事のないように軽い調子で「明日、美代さんと会つのは？」と聞けばいい。深く突つ込んだ話をしなければ何も怪しまれるはずなんてない。

分かつていても恐ろしくて聞けなかった。

もし肯定されてしまったら？

もし、それ以上の話を聞いてしまったら？

想像するだけで、気持ちが底なし沼のようにどんよりと沈んでいくのが分かった。

壱だつて、若い男だ。

誰とどこで何をしていようと、鈴には関係のない事だと分かっている。

分かつていても、他の女の人と一緒にいるところを想像しただけで言いようのない焦りと怒りに襲われた。じりじりと火であぶられているかのように胸の奥が熱く苦しい。

「鈴さあ……」

不意にそれまで黙って隣を歩いていた睦が口を開いた。

「え？」

「何か、あつたの？」

そう言つてまっすぐ顔を見つめられて一瞬どきりとしてしまう。

「なんか、昨日くらいからずっと様子変だけど」

珍しく笑っていない睦の瞳を正面から見る事が出来ず、鈴はさつと目をそらした。

「な、にもないよ」

「ふうん……」

納得はしていないけど、それ以上は聞かないというように睦が咳いた。

「まあ、なんか相談があつたらいつでも言えよ」

それだけ言うと、ぽん、と鈴の頭に手を乗せて睦は先に歩き出す。その気遣いがうれしくて、鈴は少しだけ底なし沼から浮き上がった気がした。

（睦には、話してしまおうか）

沸き上がってきたその気持ちに口を開きかけて、けれど再び貝のように固く閉ざす。やっぱりこればかりは睦にも言えなかった。いや、正確には言いようがなかった。

自分の中に渦巻いているこの自覚するのも嫌な黒いどろどろとした感情。

それを説明するのは、見たことのない風景を描くのと同じくらい、鈴には難しい事だった。

お日様が姿を隠し始め、子供達がすっかり家へとたどり着いた頃、玄関では壱がゆっくりと草履に足をかけていた。

「……夕飯はいらないの？」

不意に聞こえてきた声に壱が驚いたように振り返る。そしてうす暗い影に音もなく立っているのが鈴だと分かって、壱はほっとしたようだった。

「今日は外で食べてくる」

やさしく向けられる頬笑みが、鈴の心を深くえぐる事にきつと壱は気づかない。

「そう、いつてらっしゃい」

いつものように壱を玄関で見送って、そして壱のいなくなった玄関をそれでも鈴はただ静かにじっと見つめていた。

（行ってしまった。あの人のもとへ）

まだ、壱がその気だと決まったわけではない。もしかしたら、すぐに帰ってくるかもしれない。

そんな事はできないとあの人を突っぱねて、やっぱり夕飯を食べ

るよって、帰ってくるかもしれない。

必死に自分に言い聞かせて、そして祈るような思いでひたすら壱の帰りを待った。

けれどその日、朝日が昇る時間になっても、壱が帰ってくる事はなかった。

大きく目をこすりながら、鈴はいつもの時間に台所に立って包丁を持っている。

昨夜はほとんど眠れなかった。いつ壱が帰ってくるのか気になって、厠へ行くふりをして壱の部屋を覗いたのは一度や二度じゃない。やっと浅い睡眠が取れたと思ったら、すぐにまた自然と目が覚めた。あんなに悩んでいても、結局時間どおりに目が覚める自分の体の律儀さが憎かった。

あまり休めていない目に朝日が鋭く突き刺さる。いつもよりも動きの鈍い手を無理やり動かしながら、鈴は大根を細切りにしようとした。

「いつ……!!」

突然の痛み到手をひっこめると、指の先から鮮血が溢れ出た。どうやら不覚にも切ってしまったらしい。普段滅多にしない事に、鈴はただ驚いて流れ出る鮮血を見つめた。

朝焼けが、まるで鈴を包み込むように台所の中を茜色に染め上げる。

指の先の血が限界まで膨らんで、ぱたりと落ちた。木のまな板に血が吸い込まれるようにして赤い染みをつくる。

(いけない、早く洗わなければ……)。

分かっている、鈴はその強烈な赤色から目が離せなかった。一

片の濁りもない深紅の滴は、まるで血で出来た宝玉のよう。

新たな染みがひとつ、またひとつと増えていく。

「鈴ー。俺、今日は朝早いから弁当は……」

そこへ欠伸を噛み殺しながら睦が顔を覗かせた。

「何やってるんだ！」

鈴の指から流れる鮮血を見て、睦の頭が一気に冷めたようだった。慌ててかけよるとそこへ勢いよく水をかけていく。

その時になって初めて鈴は刺すような痛みを顔に歪めた。そして同時に、まるで心臓が指の先に移動してしまったかのような激しい鼓動に小さく身を震わせた。

睦は包みの中から乱暴にさらしを引っ張り出すと、それを細く割いて鈴の指先に強く巻き付けた。

「とりあえず、血がとまるまでこれで我慢して」

「ありがとう……」

まだどこか呆けているような鈴の声に、睦が大きくため息をついた。

「……あのさ」

くしゃりと前髪を書きあげながら睦が言う。

「無理に聞こうとは思わなかったけどさ、やっぱり鈴変だよ」

きゅ、と鈴が口を結んだ。

「俺、一応鈴の事大事にしたいと思ってるんだよ」

思ってもみなかった言葉に、思わず顔をあげた。そこには少し怒ったような顔をした睦が鈴を見ていた。

「吉兄が誰かを家に連れてくるなんてはじめてで、しかも女の子だろ？俺だけじゃないよ。響とか、雷と風まで鈴の事心配してるんだよ」

響に、双子まで。

まさかそこまで心配されているとは思わなかった。鈴は小さく俯いた。

「ごめんなさい……。迷惑をかけるつもりはないし、きちんと話し

た方がいって思ってるの。ただ」

「どう言えばいいのか分からない。」

「何回も自分の中でこの気持ちを説明しようとして試みたことがある。」

「けれどできなかった。考えれば考える程、どうしても嫌な感情ばかりが先立って、そのたびに自己嫌悪でいっぱいになってしまふのだ。」

「そんな鈴に、睦がためらいがちに言った。」

「……吉兄の事だろ」

「弾かれたように顔をあげた鈴を見て、やっぱりな、と睦が呟いた。」

「なんで……」

「鈴、ずっと吉兄の事食い入るように見てただろ」

「さらりと指摘されて、恥ずかしさにどうしていいかわからなくなる。もしかして、響や双子にも気付かれていたのだろうか。」

「大丈夫だよ。響と双子は気づいてない。俺だけそういう事に敏感なんだ」

「心を見透かされたように睦が続けた。その言葉に鈴がほっと息をついた。」

「(……本当に、睦はよく気づくのね)」

「ここまで気付かれたら、これ以上隠していても何の意味もないのかもしれない。」

「(それなら、睦にだけ……話してしまおう)」

「胸の中で決心して、けれどそれでもしばらくは言葉がうまく見つからなくて黙り込んだ鈴を、睦は辛抱強く待った。やがてぽつりぽつりと言葉を探しながら、鈴はあの日見た事をゆっくりと睦に話し始めた。」

「それって、平谷の茶屋の美代の事だろ」

「美代の名前までは伏せていたのに、さらりと言いあてられて鈴は動揺した。もしかして気付かぬうちにすっかり言ってしまったのだろうか？ それが表情に出ていたのだろう。すぐに睦が付くわえるように言った。」

「美代が吉兄の事を追っかけている事なんて有名だよ。あの人、一度うちにまで押しかけてきた事があったし」

「えっ」

思いもよらない言葉にまぬけな声をあげてしまう。大胆な人とは思っていたが、まさかそんな事までしていたとは。

「吉兄はいなかったから、すぐ追い返したけどさ」

心底迷惑そうな顔を浮かべながら睦が思い出したように言った。

「あの人の事だったら、そんなに心配しなくてもいいと思うけど。吉兄、あの人に全然興味ないし。っていうか女の人に特別興味持った事なんて見た事ないよ」

何を今さら分かり切った事を、とでも言うようなその言葉に、鈴の心が驚くほど軽くなっていくのがわかった。

全然、興味がない。

美代だけでなく、他の女の人も。

鈴はかみしめるようにそれを心の中で繰り返した。

もちろん興味がないのは、鈴に対しても同じかもしれない。それでも、その事は鈴にとって一瞬で底なし沼そのものを吹き飛ばしてしまうくらい嬉しい事だった。

安堵するような鈴の笑みに、睦がわからない、というように眉をひそめるた。

「それにしてもなんでみんな吉兄なんだろうな」

確かに、見た目もいいし、優しいし、すごいいい兄だとは思っている。と独り言のように呟いてから、睦は鈴をまっすぐ見た。

「鈴も、吉兄の事が好きなんだろう」

何のためらいもなく言われたその言葉が、すんと鈴の胸に落ちる音がした。

戸惑いも恥ずかしさも押しつけて、ただひとつの言葉が震える口からこぼれ出る。

「……好き」

かすれたようなその呟きに、自分の心が大きく震えた。まるで生

またたての小鹿が、初めて立ち上がろうと試みる時のように。

(……そういう、事だったんだ)

鈴はその時初めて理解した。

今まで、壱にだけは綺麗と思われたかったのも、壱の笑顔を見るとどうしようもなく嬉しかったのも、美代との事に激しい嫉妬を感じたのも。

(全部全部、私が壱の事を好きになっていたから)
気付くと同時に、はらりと一粒の涙がこぼれた。

「うわっごめん！ そんなつもりじゃ」

睦が慌てて謝罪の言葉を口にする。どうやら自分の無神経な発言に鈴が傷ついたと思ったようだった。

「うっん、違うの。違うの」

傷ついたから、涙が出てきたんじゃない。

はらはらと流れ出る涙をぬぐおうともせずに鈴は静かに目をつぶった。

とめどなく溢れる涙が、朝日を受けて眩く輝く。

それは、赤子が初めてこの世に生まれた時に流すような、清らかで暖かい涙だった。

鷹の目の男

容赦なく焼けつく日差しに、鈴は顔を隠すように手をかざした。玄関で草履を履きながら暑い暑いと騒ぐ双子に、もうすぐ夏の休みに入るからあと少しの辛抱よと、言ったのはいつの事だったろうか。

きつと今頃、寺子小屋で舌を出しきつた犬みたいにのびているんだろう。その姿が目には浮かぶようで、くすりと笑みがこぼれた。そしてこの分だと、今干したばかりの洗濯ものもきつとすぐに乾くだろうな、と思いながら鈴は空を見上げた。

今朝睦に話を聞いてもらってから、驚くほど心が軽くなっていた。それだけではない、ふわふわと浮かぶ風船のように、心が落ち着きなく浮き立っていた。

(ききの事が、好き)

目覚めたばかりの思いにそつと触れるたび、胸がその事でいっばいに満たされてしまう。とても恥ずかしい。なのに同時に少し嬉しい。

暑さだけが原因ではない頬のほてりを鈴は両手で包みこんだ。

この気持ちをもっとすぐにきに話す気なんてなかった。言えばきつときを困らせるだろう事を知っていたから。

でも、今はそれでいいと鈴は思う。

ただそばにいただけで、こんなにも嬉しいのだから。

(それとも)

と考える。いつかはそれ以上の事を望むようになるのだろうか？ その考えに自分の体温が急に上がった気がして、鈴は辺りに人がいないのを確認してからぐつと衿を引っ張った。ゆるく開いていた衣紋えもんがきゅつと締まり、代わりに胸元に少しだけゆとりが出来る。そこに風を誘う様にひらひらとはためかせると、中のこもった空気が

が外の新鮮な空気と入れ替わった気がして鈴はほつと息をついた。

この時期いくら夏用の紹^{しょう}の着物を着ていると言っても、やはり下に長襦袢を重ねて着ているだけでどうしても暑さからは逃れられない。はしたないと思いつつも、今は人目がないから、と理由をつけてはこのようにこつそりと涼んでいた。

「おやおや、若いおなごの白い胸元が見えてしまっているよ」

突然聞こえてきた明朗な男の声に鈴は慌てて両手で衿を手繰り寄せた。

「ごめんなさいっ」

まさか見られていたなんて。自分の醜態に耳まで赤くなる思いがした。

「いやなに、いいものを見せてもらった」

ちらりと声の主を見上げると、熟年の、けれど驚くほど精悍な顔つきの男が微笑みながらたっていた。目尻に深く刻まれた笑い皺とは裏腹に、その瞳は鋭い生気を放っている。

(誰だろう)

普段この家にやってくる顔ぶれはいつも決まっていて、たまに知らない誰かの友達がやってくる事はあれど、この男のように大人の男がやってくる事はほとんどない。

「……きなら、今家を開けております」

恐らくきの客人なのだろうと見立てをつけてから、確かめるように鈴は聞いた。

「ああ、いや、今日はきに用事があったのではない」

今日は？ その言葉に鈴が目を細める。

「私はそれよりもあなたに用があつてね」

言いながら男が一步、鈴の方へと歩み寄る。

それにつられて鈴は男とは逆に、詰められた分の距離だけ後ずさっていた。それがとても失礼な事だとは分かっている。けれど。

どうしてだろう。

顔は朗らかに笑っているのに、男の瞳は、まるでこれから捕える

獲物を見る鷹の目のようだと言は思った。

一瞬で全身に走った緊張に、口の中がからからに乾いている。

鈴の頭の中で警笛がうるさいほどに鳴り響いていた。

「どれ、お手並みを拝見しようか」

そんな鈴を試すかのように、男がすつと手を持ち上げた。

鈴は咄嗟に身を翻して逃げようとした。逃げようとして、その場で石のように全身が固まった。

(助けて！)

叫ぼうとしても、口すら動かせない。かすれるような吐息だけがむなしくヒュウヒュウと聞こえている。

男は大股で鈴の前までやってくると、鉤爪のような大きな手で鈴の頭を掴んだ。

「つきやああ！」

その瞬間、鈴の全身を稲妻で撃たれたような痛みが走った。衝撃を和らげるための生理的な涙が次から次へと溢れ出る。全身がびくびくと痙攣していた。

「ほう？　これは」

男は鈴の様子に驚きを見せながらも、決して手の力を緩めることはない。ぎりぎりとかめかみに食い込む指の力に鈴の意識が遠のきかける。

とその時、鈴の頭の片隅で、ぱらりと紙をめくる音がした。同時に鈴の頭の中に、今朝睦と話をしていた場面が蘇る。

更に一枚めくられた。

今度は、壱が美代の元へ行くのをじつと見ている鈴の姿。

それから、ぱらり、ぱらりとゆっくりと紙がめくられていく。

鈴を気にかける睦。ずっと壱を目で追う鈴。

一枚、また一枚と紙をめくられるたびに鈴の頭の中で風景が流れていった。

美代と多恵の会話。美代に呼び止められる壱。にこやかに笑う先生。先生に叱られてむくれている双子。雀を拾ってきた壱。

(記憶を見られている)

本能でそう悟って、鈴はいつの間にか動かせるようになった両手で男の腕をはずそうとした。けれどどんなに力を込めても、男の片腕はそこに固定されてしまったかのようにびくりとも動かない。

いつしか紙は風が走るよりも早くめくられていた。まるで自らその姿を見てと言わんばかりの勢いで、次々とさらけだされていく。

壱にかんざしを買ってもらった日、壱の代わりに料理を作った日、初めてこの家にやってきた日。

そして、燃え盛る屋敷の夜。

記憶は澄沢村の頃まで遡っていた。

最後に見た藤真の笑顔。水盆に映る自分の顔。失望を浮かべて鈴を見つめる美津の瞳。正式に忍びになったと報告をしにきた藤真の嬉しそうな顔。出立の日の落姉様の瞳、出立の日の藤真様の瞳。初めて藤真に会った日の、自分の好奇心に輝いた瞳。

「や、めて……」

勝手に、私の記憶を見ないで。

鈴の叫びは小さく空へと消えていく。記憶は、鈴自身ですら覚えていなかったような幼いころのものまで鮮明に映し出していた。

何度叩いても、爪を立てても、男の腕が動くことはない。

諦めにも似た気持ちでぼんやりとそれを眺めていると、不意に目の前が真っ赤に染まった。

鈴の目の前で、一組の男女が折り重なるようにして倒れていく。

男の背中から流れ出る大量の血が飛沫のように辺りを深紅に染め上げた。

(これ、は……)

ぐらりと目の前が揺れたその時だった。

「松浦様！」

静寂を切り裂くように、壱の張り詰めた鋭い声があたりに響き渡る。

その途端今までびくともしなかった男の手が、いとも容易く鈴か

ら離れた。

「壱……」

視界の端に映る壱の名を呼びながら、鈴はぷつりと糸の切れた人形のようにその場で意識を失った。

「鈴！」

鈴の体が地面に崩れ落ちる前にかろうじて抱きとめて、壱が険しい顔で松浦を見上げる。

松浦はそれに動じることなく、まるで我が家だと言わんばかりの落ち着いた態度で縁側にどっかりと座りこんだ。

「随分と早かったな、壱。私はもう少し、お前が遅く来る事を期待していたんだが」

どこか愉快そうに語りながらも、瞳は何一つ見逃すまいと鋭く壱を見据えている。

「お前が隠していたその娘、少し調べさせてもらったが……驚いたな。あの勝亦の隠し巫女の妹だというから最初から全力で行ったんだが、反撃どころか反抗すらできなかったぞ」

壱ははっとして胸に抱いた鈴を見た。顔は血の気がなく、まるで死人のように蒼白だった。

「まあ、死ぬほどの事ではないだろうよ。しばし苦しむだけだ」
「たいしたことはない。そう言いきった松浦の前で壱がぎゅっと口をむすんだ。」

「お前が一体どんな企みを持ってその娘を隠しているのか、私は気が気ではなかったぞ。いくらお前とて、謀反を企てたりしないなんて保証はないからな」

そう言った松浦の顔から笑みが消えていた。容赦のない冷たい瞳が、壱の意味のない弁解を待っているようだった。

「……お許しを」

それだけを言って、壱はその場で深く頭を垂れた。

「その娘を困う事をか？ ならん！」

嘲るように笑った後、松浦は一変して辺りに轟くような声で怒鳴

りつけた。

「他に女なんていくらでもいるだろう。それを好きなだけ困え。だがこの女だけはだめだ！」

「お許しを」

暴風のような怒りに頭を垂れたまま、きっぱりとそう言い切る。

しばしの沈黙が流れた。

頭を垂れたままぴくりとも動かないきを、松浦は目を細めて面白そうに見た。やがて子供を諭す時のようにゆっくりとした口調で話し始める。

「なあき、私は言ったな？ あの日のお前の任務は勝亦の隠し巫女を全員殺すことだと」

きの肩がぴくりと震えた。

「いくら力がないとは言え、その娘もまた勝亦の隠し巫女だ。そうだろう？」

きは何も答えない。

「私に逆らうという事はお前だけではない、お前の家族がどうなるか、分かっているな？」

静かな、けれど強烈な殺気がちりりときの髪の毛を焦がす。

「もう一度だけ言う」

慈愛のかげらすら含まれていないその声に、きがごくりと唾を飲んだ。

「殺せ」

どこかで蝉の鳴き声が聞こえる。

うだるような暑さの中で、ここだけがまるで切り取られたかのようになり静まり返っていた。

痛い程の殺気と、膨れ上がった緊張の中で、ぴんと張り詰められた糸が限界まで引つ張られる。それはきりきりと細い悲鳴をあげながら少しずつ千切れていくようだった。

一歩でも動けば、命はない。

壱の額から流れた汗が、音もなく地面に吸い込まれた。

覚悟を決めて壱が口をぎゅっと結んだその時だった。

「「ただいまー」」

雷と風の能天気な声が、張り詰めていた空気を吹き飛ばすようにぶち壊した。

「おかえり」

壱はほっとして、二人の方を見る。

「……全く、運のいい弟達だな」

松浦の感情のこもらない声に、壱はもう一度緊張を含ませた面持ちで松浦を仰ぎ見た。

「忘れるな、壱。任務はまだ終わっていない」

それだけ言うと、松浦はやれやれというように立ち上がる。松浦に気がついた双子が物珍しげに見つめている前を何も言わずに通り過ぎると、あっという間にその姿は見えなくなった。

「鈴どうしたの？」

「鈴大丈夫？」

松浦など最初からいなかったかのようにすぐに双子たちが飛んできて、心配そうに鈴の顔を覗きこむ。

「少し具合が悪いだけだ。休めばすぐ治る」

壱がそう言うと、双子はほっとしたように顔を見合わせた。

焼けつく思考

暗闇の中で小さな鈴がうずくまっている。

泣いているのを隠すかのように顔を両手で覆いながら、けれどすすり泣きひとつ聞こえない。泣くことすらできないようだった。

そんな鈴の横を、雷と風がかけていった。楽しそうに笑いながら、しかし傍らにいる鈴にはまるで気づいていないようで、目もくれず走り去っていく。その後ろから、今度は幼い姿の響と睦が歩いてくる。ちらりと鈴を見た睦に、響が楽しそうに話しかける。睦はそれに気を取られて、結局二人もそのまま消え去ってしまった。

てん、てん、と弾けながら毬が転がってくる。それを追いかけてきたのは小さな籐真。

鈴に気付いて、恐る恐る触れようとして、誰かに呼ばれたらしい。まだ小さな体を強張らせて、たちまち身を翻して鈴の前から姿を消してしまった。

代わりに雪んこのように真っ白な藤と露がふわりと鈴の傍に舞い降りる。鈴を見ながら楽しい内緒ごとのように何か囁き合った後、鈴に触れる事はないまま二人で手を取り合ってまたどこかへ飛び去ってしまう。

鈴はそのまま忘れ去られた毬のように一人佇んでいた。

全てを拒絶するように、ひたすら小さく身を縮こませたその姿は針鼠が身を丸くするよりも頑なだった。

もはや誰もそんな鈴を顧みる事がない。そう思われたその時、鈴の頭に、そっと小さな手が乗せられた。

初めて見る優しい瞳の少年。

だけど鈴には分かっていた。

夢の中の鈴が泣きそうな顔をあげる。小さな唇が少年の名を呼ぼうと開かれた。

「……吉」

荒く呼吸をしながら、鈴はその名を呼んだ。

かたわらにいた吉がすぐに心配そうに覗きこんでくる。行燈に照らされた吉の瞳が心配そうにゆらゆらと揺れていた。

「大丈夫か」

大きな手が鈴の頭を撫でる。

「……大丈夫」

頭が鉛のように重かった。熱も少しあるようだ。額には水にぬらした手拭が置かれている。

あれからどれくらい経っているのだろうか。随分と長く寝ていた気がする。

みんな食事の準備をしなれば。

まず思いついたその事に体を起こそうとして、同時に目眩で視界が歪んだ鈴を吉が止めた。

「まだ熱がある」

吉に促されるまままたしとねに横になると、ぬるくなった手拭が取り払われる。代わりにさらりと乾いた手拭でゆっくりと額の汗が拭われていった。

「もう少し休んでいろ」

吉の手が鈴の両目を隠すように覆った。染み込むように熱い体温が瞼から伝わってくる。

「うん……」

そのまま静かに息を吐くと、鈴は情けないほどすぐにまた深い眠りへと誘われた。

次に目が覚めた時には、部屋の中に朝日が差し込んでいた。頭だけ動かして探してみたが、部屋の中に吉の姿はない。

思い切って体を起こすと、少し目眩はしたもののそれ以外は普段とそう変わらなかった。

とりあえず、と習性のように台所へと向かうと、そこには思わぬ人物の姿があった。

「睦？」

白い前かけに、手にはお玉。その奇妙な姿に鈴が眉をひそめる。

「おはよう鈴。夏風邪はもう大丈夫なのか」

そんな鈴をちつとも気にすることなく、睦は朗らかに鈴に聞いてくる。

「うん、もうだいぶよくなったわ。……それより、その格好は」

「いやー、なんか俺って、意外と料理の才能もあっちゃったりしたみたいで」

鈴の問いには答えずに、どこかしみじみと遠くを見つめる目で睦は言った。

台所を見渡してみると、確かに鍋からいい匂いが漂ってくる。小皿にとつて一口含んでみると、匂いどおりのなかなかの味だった。

「おいしい」

素直に感想を漏らすと、睦の顔が褒められた犬のように輝いた。

「やっぱり？　なんとなくて作ってみたただけなのに、やっぱり俺ってすごい？」

「うん！　でもお出汁はちゃんと入れないとだめだよ」

鈴に笑顔でばっさりと斬られて睦が輝かんばかりの笑顔のまま固まった。それに気づいて鈴が慌てて弁解する。

「あつ……ごめんなさい！　えと、でもみりんとお醤油の加減は完璧！　すごい！」

「……だよな」

さっきの言葉はまるで聞こえませんでしたとばかりにまた動き出した睦に鈴は我慢が出来ず盛大に吹きだした。

「なんだよ、そんなに笑わなくても」

睦はお玉をふりふりと尻尾のように振り回しながらも恥ずかしそうに口を尖らせる。

「ごめん、ちよっとびっくりしたから」

くすくす笑いを必死に抑えながら鈴が言った。そんな鈴に不満げに、同時にどこか照れたように睦が言う。

「いやさ、まさか響に作らせるわけにもいかないし、鈴のご飯食べなれた後でき兄のご飯もちよつと……だし、試しに俺が作ってみたら意外とうまくつて」

どうやら鈴が寝込んでいる数日の間はずっと睦がご飯を作ってくれていたらしい。

そんな睦は思わぬ才能が開花して、睦は戸惑い半分喜び半分のようだった。それはそうだろう、本来なら台所は女の領域。男なんて入ることすら許されない家もあるくらいだ。人によっては男が家庭で料理をする事を馬鹿にするかもしれない。

「睦はすごいね。剣道だつて強いのに」

世間の目にとらわれることなく素直な感想を漏らすと、睦は恥ずかしそうにはにかんだ。

「おはよう鈴。もう大丈夫なの？」

「「平気なの？」」

居間に姿を現した鈴に響が声をかけると、すぐさま双子が飛びついてきた。彼らは彼らなりに心配していてくれていたようで、鈴がしゃがんで目線を合わせると小さな両手が一斉に飛びてくる。ぴたぴたと鈴の頬や額に手をあてては自分のと比べているらしい。

「うん、もう大丈夫。ありがとう」

いつものように微笑むと、やっと満足したようだった。二人で揃えたかのように、にっこり笑ってから朝食が乗せられたお膳の前へ走っていく。

「まだあんまり無理するなよ。寝てていいんだからね」

「うん。ありがとう」

響の顔はちよつと怒っているようだったが、それもまた鈴を心配しての事なんだろう。それが嬉しくてまた自然と笑顔になる。

と、そこへ慌てた顔をしたきが入ってきた。すぐに目の前に元気

そんな鈴を見つけてほっとしたような顔になる。

「おはよう、き」

「おはよう」

いつものように優しい笑みをたたえてき目が細められた。心臓が小さな生き物になってしまったかのようにとくとくと小刻みに自己主張をしている。挨拶をするだけなのに、どうしてこんなに満ち足りた気分になるんだろう。

自分がふわりと花のような笑顔をこぼしたことに、鈴は気づいていなかった。

いつも通りにみんなを見送ってから、鈴は恐らく溜まっているだろう家事に取り掛かることにした。想像通り、床の間の隅に脱ぎ棄てられた服がうず高く山をつくっている。それを一枚一枚拾いあげて急いで洗濯桶の中に放り込む。他の事には目もくれずに必死で洗いあげて、干す頃にはすっかり昼飯の時間が過ぎるところか、夕飯の時間ですら近くなっていった。

風ひとつない庭でだらりとぶら下がった洗濯物を見て一息つきながら、鈴はふとある事を思い出した。

（そういえば、雷と風の夏物が仕立て上がるのってもうそろそろじやなかったかしら）

ただでさえ育ち盛りのやんちゃ盛り。毎日これでもかというくらい服をどろどろの汗まみれに汚してきてくれる二人の服はいくつあっても足りない。それに少しずつだが確実に背が伸びてきたようで今あるものはだいぶ裾が足りていなかった。その事を以前きに言ったら、すぐさま二人を連れて呉服屋に採寸をとりに行っていた記憶がある。

（出来上がると言っていたのが確か……昨日だわ）

既にお日様がそろそろ休もうかどうか考え始める時間だ。急がなければ、今日も間に合わない。あわてて草履をひっかけて鈴は外に

飛び出した。

鈴が寝込んでいた間、恐らく吉は受け取りにいつていない。それどころか今朝の能天気な笑顔を見ると、綺麗さっぱり忘れている可能性の方が高かった。吉は意外とその辺り、抜けている。

けれど一歩外へ出て、鈴は立ち止った。

「暑い……」

先ほどは濡れた洗濯ものを手にしていたから気づかなかったが、今日この時間でも日差しは容赦することなく、その存在を知らしめるかのように熱さを降り注いでいる。まだ万全とは言えない体に今の日差しはきつかった。

懐から手拭を出して頭の上にかけてと、顔の前だけは影ができる。しかしそれでも暑さが和らいだわけではない。

こういう時は余計な事を考えずにもくもくと歩くのが吉だ。そう思いながらやっと町までたどり着いた先で、さらに細かい道を確かめるために顔をあげた時、くらりと目眩がした。

(う、わ……)

ただでさえ面通りにはこの時間が一番人が多い。汗で濡れた面々に、日差しに負けないくらい大きく張り上げられた声。その活気は今の鈴には少々眩しすぎた。

(裏道、使っちゃおうかな……)

普段ほとんど使う事のない、と言うよりは使うなと珍しく吉から言われた道。

そこは柄の悪い男達がよく使っていると聞く。けれど同時に日影が多く、表通りよりはずっと涼しいはずだ。

(すぐに通っちゃえば、大丈夫)

一瞬きの言葉を思い出したものの、安易な言い訳がそれを打ち払う。

暑さで鈍った思考のまま、鈴は裏通りへと一歩踏み出した。

陰湿な裏通り

想像していた以上に裏通りは暗く、また人通りも少なかった。

表通りより遙かに多い日影のおかげでだいぶ涼しかったものの、それと同時に気味の悪い静けさも漂っている。人の姿はまだらとはいえ確かにあるにも関わらず、一人ひとりがまるで何かを恐れて固く口を閉ざしているかのように静かだった。

（早く、通り過ぎてしまおう）

先ほどよりはいくらかましになった体で鈴は足早に歩き始めた。少し余裕が出てくると、歩を進めながらも頭の中には別の事が浮かんでくる。

松浦と呼ばれた男は、初対面の鈴に何の情け容赦もなくいきなり襲いかかってきた。その力は以前見た姉達の力によく似ていたが、少なくとも姉達はあやまって誰かを傷つけるために力を使った事はない。ましてやあんな、無理矢理記憶を暴くようなことなど決してなかった。

体に走った痛みと、力づくで記憶を覗かれる不快感を思い出して、鈴はぶるりと体を震わせた。

（あの時きが来てくれなかったら……私は殺されていたのかもしれない）

少なくともそう思わせるだけの非情さが男にはあった。

でも、と思う。昔はあの男を松浦様と呼んでいた。つまりは昔の知り合いなのだ。それどころか呼び方から見る限り、昔よりも上の立場の人間なのは間違いない。

（勝亦の偉い人が、なぜ私の事を？）

鈴が役立たずだから、いらなくなってしまうのだろうか。

それにしても理解できなかった。役立たずは今に始まった事ではないし、いくら役立たずでも殺されるほどの人物でもない。外に流

せるような情報も持っていなかったし、今現在自分がどの辺りにいるのかも正確に把握できていないほど疎いというのに。

(わからない……)

松浦という名もどこかで聞いたことがある。あれはどこだっただろうか。

わからない。わからない。

わからないことだらけだった。

そして、記憶の底に眠っていたあの光景も。

どうして自分があんな記憶を持っているのか、まるで理解できない。

(あの男の人は誰？ 女の人は誰？)

こちらに背を向けていた男の顔は見えなかったけれど、女の顔ははつきりと見えた。

瞳に悲しそうな、けれど穏やかな光を湛えたまま事切れていった人。死を目前に、どうしてあんな表情かおが出来たのだろう。

突然、血に沈み込むその顔に自分の顔が重なったような気がして鈴はぐらりと揺れた。

(いけ、ない……)

隣を通り過ぎようとしていた人にどん、と肩が大きくぶつかる。

「つごめんなさい」

鈍く痛む頭がぐわんぐわんと鳴っている。ぶつかった人に小さく頭を下げて立ち去ろうとした時、大きな浅黒い手が鈴の手首を捕えた。

「むすめさんよお、それが人に謝る時の態度かあ？」

顔をあげる前に振ってきた下卑た声。鈴は大きく目を見開いて、さざ波のような震えが全身を駆け巡るのを必死に抑えた。

「ちよつと俺達とおいでや。ちゃんとした謝り方つてもんを教えるからよお」

「それあいいな」

声は一人だけではなかった。そのおぞましさに鈴は急いで手を振

り払おうとした。

「は、離してください！」

「はなしてくださいっ、だあってよ。声もかわいいねえ」

一人の男が頭のおかしくなった鶏のような気持ち悪い声で鈴の言葉を真似した。それに他の男達が一斉に笑いだす。鈴は泣きそうな顔で男達を見上げた。いかにもごろつき風情、と言った男達が四人、鈴を取り囲むように立っていた。

手拭に隠されていた鈴の顔が見えると、途端にふざけていた男達から笑顔が消えた。

「……おい、こいつはいい拾いものをしたかもしれないな」

鈴の手首を掴んで離さない、男達の中で一番偉そうな浅黒い男が声をひそめて言った。ぞくりと背筋に寒気が走る。鈴を見る男たちの目に、確かな情欲の色が強く浮かび上がっていた。

「た、助けて！」

少し前を歩いていた男に助けを求めて叫んだ。けれど振りかえった途端男達に一睨みされて、しなびた鼠によく似た男は猫に遭遇してしまった時のようにその場から一目散に走り去ってしまった。

(そんな)

茫然とそれを見つめる鈴の体が大きくのけぞる。鈴の手首を掴んでいる浅黒い男がそのまま歩きだしたのだ。

「やめて、離して、お願い！」

必死に足に体重をかけても、それ以上の力で容赦なく引つ張られる。

「今朝のあれでむしゃくしゃしてたんだが、案外こんなことが起きるんならそれもわるくねえなあ」

ひしゃげるような笑い声。じわりと涙がにじんできてる。

「離して！ 離してったら！」

押しても引いてもびくともしないその手に、鈴は思い切り爪をたてた。

「こいつー！」

次の瞬間、ぱあんと大きな音が辺りに響いて、手首は掴まれたまま鈴はその場に膝をついていた。

一瞬何が起こったのかわからずに茫然としてみると、膝をついた状態で無理矢理引きずられていく。殴られたせいで頬に残った熱い痛みと、それ以上に頭を揺さぶられて沸き起こる吐き気に鈴はその場で嘔吐した。

「うわ、こいつ吐きやがった」

「ちっ、汚いな。まあいい、あつちさえ使えれば関係ない」

無理矢理立たされ、少しでも遅れると後ろからどつかれる。頬を貼られて叫ぶ気力すら失っていた。ただまた殴られないように歩くことだけで必死だった。

やがて男達がたどり着いたのは見るからに人の住んでないボロ屋だった。たてつけの悪い引き戸をがたがたと乱暴な音をたてて開けると、鈴をその中に突き飛ばす。

地面に叩きつけられる衝撃に鈴が小さく呻いた。小屋の中に籠ったすえるような匂いが再び吐き気を誘う。

「てめえ、ここで吐いたら承知しねえぞ」

幸いにも嘔吐する事はなかったが、その声にはぼうつとしていた意識が蘇る。

「やめて……ここからだして」

小さな抵抗は男達には聞こえないも同然だった。力任せに帯が引っ張られて滅茶苦茶に解かれていく。当然帯は絡まって醜くぐちゃぐちゃと広がるだけだ。綺麗にほどけない事に業を煮やした男が強引におくみをかき分けた。そこから現れる鈴の白い太腿に、ごくりと唾を飲む音がする。

「おい……こいつ想像以上の上玉だぞ。見るよこの絹みたいな肌」
興奮を隠せない声で、荒くれた手が鈴の太ももを掴んだ。

その瞬間、途方もないおぞましさか鈴の全身を駆け巡った。

「いやあああ！」

狂ったように叫び声をあげて、鈴は全身で激しく暴れた。

「き！ き！ 助けて！ きー！」

大きな張り手が再び鈴の頬を張る。それでも溢れ出る涙とともに叫ぶことをやめない鈴に、男はうんざりした顔をした。

「おい、誰か口をふさぐものをもってこい」

「それよりこいつ、今”き”って言わなかったか？ それってまさか、”黒衣のき”じゃないよな……？」

恐る恐る言いだした一人の男の言葉に、その場にいた男達の体が強張った。

「……偶然だろ。あいつに女がいるなんて話聞いたことねえよ」

浅黒い男が強がるように言つと、他の男達もそうだよな、とほつとしたように呟いた。そして気を取り直したのか、下卑た笑いを浮かべながら今度こそ捕えた美しい獲物に手をのばしてくる。

「いやああ！ き！ きー！」

無情にも鈴の持っていた手拭で猿ぐつわをかまされる。暴れる手足を抑えつけられ、それでも溢れ出る涙を流しながら鈴は必死に抗った。

「へへ……おい、一番は俺がもらうからな。いいな」

内腿に手がかけられ、力任せにこじ開けられる。鈴はぎゅっと目を瞑った。

その時、不意に男達の手が一斉に鈴から離れた。

次に待ち受ける恐怖に目を固くつぶったまま震えていると、誰かの手が鈴に触れた。

「ううう！」

自由にならない声で必死にうめきながら暴れると、口を戒めていたものが突然解かれて自由になる。

「大丈夫だ鈴。俺だ」

その声に反射的に目を見開いた。

そこには険しい顔をしたきが膝をついていた。

「い……き！」

すがりつくようにのばされた鈴の手をきがしっかり握りしめた。鈴の背中に手を回し慎重に抱き上げると、鈴はそのままきの胸に顔をうずめて激しく泣いた。

「き、き！」

きの服に涙が吸い込まれてぐしゃぐしゃになっていく。けれどそれ以上に顔を歪めて鈴は咽び泣いた。

「もう大丈夫。大丈夫だから」

そんな鈴をきつく抱きしめて、きは言い聞かせるように何度も何度も同じ言葉を繰り返していた。

揺れる

「大丈夫」

何度目になるかわからないその言葉を聞きながら、鈴は子供のように大きくしゃくりあげていた。もう泣き叫ぶだけの力も残っていない程泣きつづけたのに、それでも恐怖がしつこく鈴を蝕んで手放さない。

「大丈夫だから……」

ゆつくりと鈴の頭を壱の手が包み込む。鈴はその時になって初めて、壱の手がかすかに震えている事に気付いた。

「……壱、震えているの？」

伝う涙はそのままに鈴が驚きを交えて訊ねると、そつと体が離されて壱の顔が見える。

「無事でよかった」

苦しそうに、でもどこか安心したように壱は微笑んだ。その暖かい瞳から確かににじみでる鈴を労わる気持ちに、また視界がぼやけていく気がした。こらえきれずに広い胸元に顔をうずめると、大きな手がゆつくりと鈴の背中をさすっていく。

ふと、周りが静かな事に気づいて顔を向けると、暗闇の中に男がうずくまるようにして倒れていた。ぴくりとも動かないその姿にもしやと鈴の体が強張る。

「大丈夫だ、殺してはいない」

そんな鈴の気持ちを悟ったのか、壱が静かに言った。

死んでいようがないなろうが、どうでもよかった。けれどやはりあれが死体なのかもしれないと思う事は恐ろしい。安堵した小さな息を吐くと、鈴を抱きかかて壱が立ち上がった。

「……帰ろう」

そのまま赤子のように胸に鈴を抱いて壱は歩きだした。

「吉兄！」

ぐったりと吉に抱きかかえられたまま、真つ先に聞こえてきたのは響の声だった。

「鈴！」

鈴に負けず劣らず涙で顔をぐしゃぐしゃにした雷と風が転げるように駆け寄ってくる。その後ろを緊張した面持ちの響と睦もついてきていた。

「大丈夫。間に会った」

その言葉に響と睦が大きく息をつく。恐らく二人は鈴がどんな目に遭っていたのか分かっているのだろう。けれどそれを知られる事は決して気持ちのいいものではなかった。知らず吉の服を握る手に力が籠る。

「……今は、鈴を休ませてやろう」

安心で緊張の糸が切れたようにますます泣きじゃくる雷と風をそれぞれ抱えて、睦と響が鈴に視線をやりながらも無言で家の中に入っていく。それを見届けてから、吉も静かに家の中へと入っていった。

「……お風呂に、入りたいの」

優しくとねにおろされようとしていた鈴は、それを遮って力なく呟いた。

「わかった」

当たり前の事のように再び鈴を抱えあげて吉が歩きだす。たどりに着いた内風呂の戸をあけると、吉は腕の中に抱えられるがままになっっている鈴に聞いた。

「立てるか」

こくと頷くとその場に優しくおろされる。どこまでも鈴を労わろうとする吉の気持ちだが、今は嬉しいと同時に少し悲しい。

やがて静かに戸が閉められると、鈴は汚れてみるも無残となった

服をはぎとるように脱いだ。

(壱がくれた一枚だったのに、もう二度と着られない)
自分の代わりに犠牲になった服が惨めで可哀想で、鈴はしばらくそこから目を離す事ができなかった。

幸い頬が腫れる事はなかったが、その代わり体のあちこちに小さな擦り傷が出来ていた。暴れた時についたものなのか、それとも引きずられた時についたものなのか区別はつかない。けれどその全てがああ時に付けられたものだという事だけは間違いなかった。

鈴はそれがまるで忌まわしいものであるかのように、一つ傷を見つけるたびに洗い布で強くこすっていった。

特に内腿についていたひっかき傷のような傷は、肌が真っ赤になってもまだこする事をやめなかった。それでもあの嫌悪感がとれない。こすればこするほどに、あの男達の下卑た笑い声と、欲情に狂った恐ろしい目を思い出してしまう。

「う、う……」

ずぶぬれのまま、気がつけば声をあげながら泣いていた。内腿は既にこすりすぎてうっ血している。

「鈴……?」

外で待っていたのだろう。戸の向こうから壱の心配そうな声が聞こえた。それでも鈴は返事をする事もなく泣き続ける事しか出来なかった。

「鈴? 開けるぞ」

ためらいがちに内風呂の戸が開けられて、そしてすぐに壱が飛び込んできた。

「鈴!」

手から布を取り上げられると、今度は素手でそこをこすり始めようつとする。

「やめろ、鈴!」

壱の手が鈴の手首を掴んだ。

その瞬間あの浅黒い手の感触を思い出して鈴が大きく震えた。

「やあああつ」

はじかれたように壱が手を離す。

「ごめん……」

謝りながら、泣きながら叫ぶ鈴の体を壱が抱きとめた。

「もう大丈夫だから」

壱の服がどんどん水を吸い込んで濡れていく。それを気にする事すらできないほど壱はただきつく鈴を抱きしめていた。

「大丈夫、大丈夫だから、泣くな……」

壱の苦しそうな声が、狭い風呂の中にむなしく響いた。

濡れた髪を背中にしかないようによけてから、壱は壊れ物を扱う様に鈴をしとねに横たえた。真新しい清潔な寝間着は、鈴の体に残るかすかな水分を吸いこんでしっとりとしている。

壱が濡れてまとわりつく自分の服を上だけ脱ぎ捨てると、引き締まった上半身が行燈に照らし出された。

「……壱」

虚ろな目をした鈴の手がこわごとと持ちあげられる。それを優しく壱の手が包み込んだ。

「今日は、傍にいて……」

言いながらまた一筋の涙が頬を伝う。

「……いるよ、ずっと」

握りしめた手を緩めて、壱は鈴の手にそっと口付けた。甲から伝わってくる柔らかな感触に鈴がほっとしたように目を瞑る。

そのまま、毒々しい紫の痣が残る手首にもゆっくりと唇が降ってきた。それはまるで親猫が子猫の傷を癒そうとするかのよう、何度も何度も唇が触れる。

「壱……？」

その不思議な行動にまた鈴がうつすらと目を開ける。

きは何も言わず唇を滑らせた。鈴がこすりすぎて赤くなった傷のひとつひとつに丁寧に口づけられる。

「あ……」

腕に、肩に、お腹に、そして内腿に。

「き……恥ずかしいよ」

あられもない格好に、恥ずかしさに、鈴の息があがっていた。あんな恐ろしい目にあつた直後だったのに、それでも不思議と恐怖はなかった。

優しく、ひたすら優しく内腿の傷に唇が降ってくる。ゆるゆると唇がそこから離れたかと思うと、擦り切れた爪先にも口づけられた。

「汚いよ……」

恥ずかしさに足をあげようとすると、きの手がそれを掴んだ。

「汚くない」

きのまつすくな瞳が鈴を見た。

「汚い、よ……」

鈴の瞳から涙がこぼれた。

その涙をきの指が優しく掬いあげる。

「綺麗だ」

瞼にきの熱い唇が触れた。

「鈴は、とても綺麗だ」

涙の痕をなぞるように、きの唇が滑っていく。

「本当……?」

濡れた目できを見つめた。目の前で苦しそうにゆらゆらと、灰青の瞳が揺れている。

「綺麗だ」

鈴は静かに目をつむった。

震えるきの唇が、ゆっくりと鈴の唇に重なっていく。きの手に絡めた指にぎゅっと力がこもった。

それから、どれくらいたったのだろう。鈴には一瞬のようにも永遠のようにも思えたその時間は、静かに終わった。

「……もう、おやすみ」

唇を離してきは言った。

「そばにいるから」

しとねに自分の体も横たえて、けれど半身は起こしたまま語りかける。

鈴が安心したように目をつむると、間もなく穏やかな寝息が聞こえてきた。

それを確認してやさしく頬を撫でる。いつもより少し色味の失せた白い頬は、それでも触ると絹のように滑らかだった。額に口付けをおとし、それからきは行燈の火を消すと静かに鈴の隣に横になった。

満月の匂い

ぬかるんだ舌でなめあげられたように湿った声。どこまでも追いかけてくる生臭い息。その華奢な体を掴もつと四方から伸びてくる手を背に、鈴は必死に逃げていた。激しく息があがる。何かにつまづいてその場に勢いよく倒れても、すぐ耳元であの声が聞こえた気がして跳ねるように立ちあがった。

(助けて、助けて)

肺が空気を求めて鋭い痛みを訴えている。

上手く息が出来ない。それでも足を止める事は恐ろしかった。止めた瞬間、鈴の命も止まってしまふ気がした。

あまりの息苦しさに、鈴の手が助けを求めて宙を彷徨った。

「鈴、鈴」

薄いもやのなかにききの声が落ちてくる。はっと目を見開くと、ききが心配そうに上から見下ろしていた。

(また、悪夢を見ていたんだ……)

包まれるようにして、鈴の手がき握られている。

「ありがとう、大丈夫……」

鈴は力なく微笑んだ。

あれから一週間経った今でも、毎晩のように悪夢にうなされていく。そのたびに激しく飛び起きる鈴を、きは常に傍らで守ってくれている。

再び辺りが寝静まってから目をそっと開けると、目の前にきの寝顔があった。男にしては長い睫毛に、すっきりと弓なりに伸びた眉。笑うと実は大きな口は、今はゆるかに結ばれていた。

こうして改めて見てみると、きの顔は整っていると鈴は思った。少女のような甘さや華やかさも、男らしい精悍な顔立ちでもないけ

れど、嫌味を感じさせないあっさりとした顔立ちは何よりも好ましいと思う。

頭が呼吸にあわせて静かに上下するその様を鈴がじっと見つめていたら、不意に舌の瞼が開いた。

「眠れないのか……？」

ゆったりとした動きで舌の手が頬を撫でる。

「う、ううん。大丈夫」

慌ててそう言うと、ふ、と舌が微笑んだ。そのまま静かに瞼が閉じられる。それを鈴は美しい生き物を見た時のようにぼつと見とれていた。

あの日からずっと、舌は鈴と同じしとねで寝ている。最初はとにかく恐怖に支配されていたからそれがありがたくて何も考えられなかったが、こうやって少し日常を取り戻した今はどうしようもなく恥ずかしくなる時がある。

何も無いとは言え、男女がひとつのしとねを使うなんて、普通の人が聞いたら卒倒しかねない。

(もう大丈夫だからって、言わなくちゃ……)

言わなければいけない、けれどわかっただけでもなかなか言い出す事はできなかった。もう少し、もう少しだけこの心地よさを味わっていたい。躊躇いながらもかすかに舌の手に触れると、すぐに舌の手が鈴の手を包み込んだ。それがたまらなく嬉しくて、同時に胸がいっぱいになってしまって苦しい。とくんとくんといつもよりうるさく脈打つ自分の鼓動を聞きながら、鈴は目をつむった。

「おはよう鈴」

「おはよう、睦」

すっかり最近の習慣となってしまった睦との朝の挨拶。最近では驚くことに、鈴よりも早く睦が台所にたっている事の方が多い。

「睦、今日も朝稽古でしょ？ あとは私がやるわ」

「大丈夫、まだ時間あるし」

言いながら牛蒡うらちを刻んでいく手つきはとても一週間やそこらで覚えたものとは思えない。かすかな敗北感を感じながらも、それでも鈴は睦のしたいままにさせていた。

睦は気を使っているのだ。

睦はあれから決してその事に触れるような事はしなかったが、鈴が少しでも調子を悪そうにしていればすぐに飛んでくるようになった。それは睦だけではない。響や、あの雷と風まで、何かとお手伝いを申し出てくれるようになった。この間なんか床の間にちょこんと小さく折りたたまれた服を見て、思わず感動したぐらいだ。

(みんな、優しい)

思いだして微笑むと、睦が不思議そうに鈴を見た。それに「思い出し笑い」と返すとますます変な表情をされる。

ゆるやかに少しずつ、けれど確実に鈴の傷は癒えていた。

その夜、ふと妙な匂いが鼻をついて目が覚めた。何の気なしに隣を見ると、いつもいる人影が見当たらない。

「雫……？」

小さな声で読んでみたが、暗い部屋の中には鈴以外誰もいないようだった。

(自分の部屋に、もどったのかな)

何もおかしいことじゃない、むしろ当たり前の事。それでも何かざわざわと心が落ち着かない気がして鈴はそつと体を起こした。少し見るだけだ。雫が自分の部屋に戻っていればそれでいい。障子から差し込むかすかな明かりを頼りに障子を開けて、そしてむつとするような匂いに思わず鼻を押さえた。

(なに、これ)

匂いはそうきついものではない。それでも風によって確実に鼻梁

をくすぐるそれは鉄の匂いによく似ていた。

よろめきながら一步踏み出すと、満月に照らされた庭に真っ黒な人影が立っている事に気付いた。反射的に体がのけぞる。障子に体があたつてかたと音をたてた。その音に反応して影がゆっくりと振り向くのを鈴は固まったように見つめていた。

「……吉？」

月明かりに照らされたその顔にほっとして駆け寄ろうとしたのも束の間、今まで見たこともないような、目に一片の光も宿さない吉の冷たい瞳にまたその場で動けなくなる。

(吉……?)

別人かと思う程、その瞳は冷たく虚ろだった。なのに飢えた獣のように体だけは血肉を求めて彷徨っている。そんな気がした。

吉が無言で歩み寄ってくる。

吉は普段着ている着物ではなく、股下の浅い黒い股引のようなものを履いていた。すぐに忍び装束だと分かった。籐真が同じものをよく着ていたから。

そして、その服が月明かりを受けて濡れているように黒くてららと光っていた。

(あ……)

鈴は気づいた。濡れたように、ではない。実際に濡れているのだ。同時に鼻につくこの甘く熟れたような鉄の匂い。

(血、だ)

みるみる全身の産毛が逆立っていく。

(手当、しなきゃ……)

吉が怪我をしているならすぐにでも手当てをしなければ。けれどどうしてだろう。あのおびただしい量の血が、どうしても吉から出ているものだとは思えなかった。

それはまるで、誰かを切り殺して浴びた後のように、吉の頬に大きく赤黒い筋を描いていたからだろうか。

吉がまた一步、鈴の元へと歩み寄ってくる。

全身の血がざわざわと駆け巡った。不気味に浮き上がる満月も、血に濡れた装束も、月明かりに照らされた壱の無表情な顔も、虚ろな暗い瞳も、何もかも無性に怖かった。

「鈴」

壱の手が鈴に伸びてきて、びくりと体が震えた。もう少しで鈴に触れようとしていた手がぴたりと止まる。

「あ………」

鈴の視線は、目の前の血濡れた手に釘づけになっていた。

「………すまない」

それに気付いた壱が隠すように手を下げる。

「髪に、糸くずがついている」

悲しそうに微笑んで壱が言った。そして立ち尽くしたままの鈴を置いてしずかに立ち去る。その方向には内風呂があった。

（ああ、だから）

鈴は悲しい気持ちで悟っていた。

（だから、この家には内風呂があるんだ）

二つの顔

眠れないまま壱のいない部屋の中で夜が明けるのを待った。

もう今頃壱は部屋に戻っているのだろう。けれどそれを確認する気も起きない。

急に広くなつた気がするしとねの中で、鈴は小さく身を縮ませた。

(別人みたいだった)

目に焼き付いたように離れない、血まみれの手。血を吸って黒光りする服。何の表情も読みとれない固い顔。そして 氷のように冷たいのに、井戸の底によく似た暗く虚ろな瞳。

思い出して、冬の湖に沈められるように鈴の背筋が冷たくなっていく。

どう考えても、あれは任務の帰りだ。

それがどんな任務だったのかは恐ろしくて想像もしたくないけれど、それが忍びなのだ。

人を殺す事など珍しくない。

分かっているつもりだったのに、いざそれを目の前にすると自分でも情けない程すくみあがってしまった。

そして、あの時の壱の悲しそうな顔。

今にも泣きだしそうだったと鈴は思った。

(あれは、自分の手に血が付いている事に気付かなかったから？
それとも)

考えを遮るように、鈴はぎゅっと目をつぶる。今は、この事についてこれ以上考えたくない。それよりも、もっと頭を悩ませなければいけない事があった。

(明日からどんな顔をして、壱に会えばいいの)

壱を見るたびに今夜の事を思い出してしまいそうだった。その時の自分がどんな表情をしているのか、想像もしたくない。

一人になってしまった我が身を守るように、鈴はぎゅっと自分の

体をきつく抱えた。

そしてその日を境に、吉が鈴の部屋で寝る事はなくなった。

(これでいいのよ)

義務的な租借をもそもそと口の中で繰り返して、薬を丸呑みするようにならぬまま呑みこむ。いつもと変わらない食事のはずなのに、砂をかむように味気がない。

「あれ？ 吉兄は？」

響が吉の姿を探してきよろきよろと見渡していた。

「さあ。最近忙しいみたいだ。朝廁に行った時に玄関で見かけたな」「ふうん」

また？ という困惑の表情を浮かべて、それでも響は睦の言葉に納得したようだった。

いつもの食事とひとつだけ違うといえば、最近吉が不在がちなことだ。

前から食事の席で吉だけがない事はたまにあつたが、最近はたまになんて言葉で済むものじゃない。見かけない方が多い。というよりも。

(あれ？ もう、いつから見えていない？)

思い返してはたと気付いた。

この間の気まずさばかりを気にしてその事に目を逸らしていたが、よくよく考えてみると驚くほど吉の姿を見かけていない。

余計なお世話かと思いつつも、吉の分の食事を台所に置いておけばちゃんとそれが食べられた跡があつた。だからいない間に帰つて来たんだらうと思つてあまり気に留めていなかった。

頭をひねって記憶の中を掻きあさり、廊下の角に消える吉の後姿を引っ張り出す。それももう、一週間以上も前の記憶だ。

こんなに会っていないかつたとは思わなかつた。けれど、少し落ち着いてきた今なら。

(おはようの挨拶ぐらいだったら、できるかもしれない)

ぼつりと沸き上がった考えが、急速に鈴の心を明るく照らし出す。(そうだ。そうしよう。何も気にせず、何も見なかつたという風に装って挨拶を交わすぐらい、普通ではないの)

帰ってきたら、ただ一言、おかえりなさいと言えればいい。きっとそれだけなら難しくないはずだ。

けれどそんな鈴の目論見は、遊女が囁いた愛の言葉よりも儂く崩れ去つた。

「壱?」

まだ日も顔を覗かせない、限りなく深夜に近い早朝。鈴はためらうことなく壱の居室の戸を開けていた。けれど暗がりの中でも、はつきりとそこに人がいない事がわかるくらい、部屋の空気は冷めていた。

その事実在眉間にきつく皺がよる。

本当に神隠しにでもあつたのかと思うぐらい、壱の姿は見当たらなかつた。

はじめは挨拶だけをしようとしてそわそわと壱の姿を気にしてただけだったのに、あまりの見つからなさに、気がつけば蟻の子一匹を見つけたような眼差しで壱を探し歩いていた。

(どうして、いないの)

怒りにもた焦りが鈴を震わせる。

朝、昼、夜、いつ来ても居室は空だつた。今みたいにもぬけの空になつている時もある。まだうつすらと残つた人の気配を感じる時もある。わざわざ皆が寝静まつた深夜にむくりと起きたして行つたこともある。その時も敷かれたしとねにはつい先ほどまで人がい

たかのような温もりを残したまま、けれど家主の姿は忽然と消えていた。

鈴の準備する食事だけは相変わらず食べていたようだから、台所で待ち伏せをしたこともある。まるで罠にかかる狸を待つような自分の姿に苦笑もしたが、それも結局鈴が眠っていた一瞬の隙に皿の中は綺麗に平らげられていた。それどころかご丁寧に洗われて、元通り棚にしまわれてすらいたのだ。

(一言ぐらい、かけたっていいでしょう)
ふつふつと怒りが沸き上がる。

壱が鈴をさけているのは今や明白だった。その証拠に、鈴以外は普通に壱の姿を目にしていた。

「壱兄なら今朝会ったけど」

「壱兄に遊んでもらった!」

「壱兄にお土産もらった!」

「壱兄なら昨日ご飯食べてる時に少し喋ったな」

特に変わった様子もなく聞かされる同居人達の声に、鈴だけが一人打ちのめされていく。

「どっして……」

そこまでいいかけて口をつぐむ。

どうしてと言えるほど、鈴は鈍感じゃない。

もう何度も思い返して、記憶の中でより鮮明になっていく壱の悲しそうな微笑みが鈴の顔を曇らせた。

(傷つけたんだ)

童が泣く時のように、鈴は両手で顔を覆った。

(私があんな風に怖がったから)

そのまま本当に滲んできた涙に、歯を固くくいしばってこらえる。泣きたい気持ちなのはきつと、鈴じゃない。

(謝らなきゃ)

きつと口を結んで鈴は顔をあげた。

今でもあの時の壱が怖い気持ちは消え去っていない。また似たよ

うな場面を見たら同じようにすくみあがってしまつかもしれない。
それでも、と思う。

それでも鈴は知っている。壱がどんな人かを。
虚ろな瞳で人を殺せるのが壱ならば、優しい光を瞳にたたえて傷
ついた動物を手当てしてやるのもまた壱だ。

どちらか片面だけが人間の全てじゃない。
それが普通とは違っていても、それを含めて壱は壱でしかないの
だ。

そのことにどうしてもっと早く気がつかなかったのだろうか。

(謝らなきゃ……)

こらえきれなかった涙が空中に舞った。壱の姿を探して鈴は駈け
だした。

美代なら何か知っているかもしれないと思ったのは藁にもすがり
つく思いだった。

あの日壱と一緒にどこかにいた美代なら、壱がよく行く場所を知
っていると思ったのだ。不意打ちのような形でそこに行けば、壱も
避けきれないかもしれない。

まだ止まらない涙をぬぐいながら草履をひっかけて外に飛び出る。
日差しは相変わらず鈴を試すかのように強く照っている。けれどそ
んな事を気にする余裕はなかった。

「鈴！」

あぜ道に差し掛かったところで、誰かが強い声で鈴の名を呼んだ。
その意外な声に、壱の事で頭がいっぱいになっていた鈴が振り返る。

「籐真……？」

立っていたのは籐真だった。よろめくように鈴が一步籐真へ歩み
寄った。

最後に会った日から随分経っている。籐真の顔は幼い少年っぽさ
が抜けて、洗練された鋭さがにじむようになっていた。

「籐真、久しぶり！ 本当に久しぶり！ ああでもごめんなさい、

今は急いでるの……」

藤真に会えた嬉しさと、壱の事を気にする心が真っ向からせめぎ合っていた。藤真と話したい。でも今はそれ以上に壱に会いたい。戸惑いながら話す鈴の肩を、藤真のいつしかたくましくなった両腕が掴んだ。

「鈴、本当に心配したんだ」

張り詰めたように言う藤真に驚いて、鈴はやっとまっすぐに彼を見た。

「心配？」

それならもつと早く会いにこればよかったではないか。勝手な事を思いながら、それでも今まで見たこともない藤真の真剣な表情に釘づけになる。

「この辺りに鈴がいるのは分かっていたんだ。けれどあいつの術が邪魔でどうしても入れなかった。今日いきなりそれが緩んで、そこから鈴が出てきた時は本当に驚いたよ」

術？ 邪魔？ あいつ？ 言葉自体はわかるのに、その意味が理解できない。鈴の頭の中で言葉が嘲るように踊っている。

「藤真……？ 何を言ってるの？」

事態を呑みこめない鈴に説明するように、藤間が一言一言ゆっくりと区切りをつけて言った。

「鈴、ここは、勝亦藩の領土じゃない」

藤真の刺すようにまっすぐな瞳に、鈴は怯えて後ずさろうとする。けれど痛いほどに掴まれた肩がそれを阻んだ。

急速に遠ざかっていく景色。耳鳴りが、藤真の言葉を塞ぐようかとするように鳴りだした。

何か、恐ろしい事を聞かされる。

確信にも似た予感が藤真の話や聞くなと鈴に告げていた。

「ここは勝亦藩の隣国、小野原藩だ。お前と一緒にいた男は」

そこまで言っつて、藤間は息を吸い込んだ。

「鈴の姉さん達を殺した、張本人なんだぞ！」

責めるといふよりも、痛ましい者を見る眼差しだった。

くわんくわんと頭の中で鉛玉が暴れまわる音がする。その鉛玉を放り投げた籐真は、到底嘘を言っているようには見えない厳しい顔をしている。

「嘘……」

鈴の言葉がかすれて、音もなく風に攫われた。

崩れ落ちる

「だって、吉は私を助けてくれたのよ？ ほら、傷だってもうすっかりよくなって包帯だってもうとれたし」

そう言っておくみをめくりあげて太腿を見せようとする鈴を藤真がとめた。

「それでも、藤様と落様を殺したのは、あの男なんだ」

藤真の手に視線を落したまま、顔をあげられなかった。全身での事実を拒む鈴に、更に藤真は追い打ちをかける。

「小野原藩の藩主、松浦。あいつは松浦の抱える忍びの一人。そこまで調べはついてる」

松浦の名に鈴が震えた。そうだ、あの名前。

”おまけに吉兄は藩主の松浦様のところで働くようになっていつか睦が言っていた言葉だ。

どうして今まで思いださなかったんだろう。

「逃げよう、鈴」

鈴の両手を藤真が掴んだ。

「今しか機会はないんだ。あいつが戻ってきた、ら」

そこまで言って、藤間のかばうように鈴の前に飛び出した。藤真の背中に隠されて向こうになにかあるのかは見えない。けれどその背中から痛いほどの緊張が伝わってくる。

「どうしたの」

顔を突き出そうとする鈴を藤真が片手で制した。ちらりと見えた背中の方こうに、見慣れた顔があった。

「吉……」

吉は静かに立っていた。身構えるでもなく、警戒するでもなく、感情の一切読みとれない無表情に全てを呑みこんでしまったかのよう。ただその場に立っていた。

藤真の目が吉を厳しく見据え、吉から鈴を守るように間に立って

いた。先ほどは浮かんできていなかった脂汗が、じつとりと籐真のこめかみを濡らしている。

少しでも触れれば切れてしまいそうな張り詰めた空気の中で鈴は一言も発することができなかった。

籐真の手がゆっくりと腰の忍び刀に伸びていく。

「やめておけ」

壱の声とは思えないほど、冷たい声だった。

「お前じゃ勝てない」

ゆるりと視線が藤間からはずされる。まるで子供を諭すかのような態度に籐真がごくりと唾を呑んだ。

「……やってみなきゃ、わからないだろう」

「無駄だ」

体のどこにも無駄な力が入っていない。あくまで自然に立っているだけなのに、焼けつくような殺気が放たれていた。それこそ気の弱いものは失神してしまうのではないかというくらい。鈴ですら、気を強く持っていないと倒れてしまいそうだった。籐真の額をまた一筋汗が伝った。

「お前の相手をしている時間はない」

壱の言葉に籐真の体が大きく震えた。刀を握る指に力がこもる。

「鼠の一匹や二匹逃げたって、どうでもいいんだ」

それはまるで、逃げろと言わんばかりの言葉だった。籐真だけじゃなく、鈴までがはっと顔をあげる。その言葉の真意を確かめるように籐真が刀を抜いても、壱はその場に立ったままだった。

「……後悔、するなよ」

次の瞬間鈴は天地がひっくり返ったのかと思った。気がつけば俵を担ぐように籐真が鈴を抱えていて、そこでやっと鈴は我に返った。「い、壱！ 本当に、本当に貴方が姉様達を」

それ以上は怖くて言えなかった。すぎるような眼差しで壱を見つめる。

（お願い、殺してないって言って）

けれど鈴の望みは叶わなかった。

「殺した」

残ったわずかな希望も握りつぶすように、感情のこもらない声で壱が言った。その瞳はどこか虚ろを見ていて鈴に向けられる事はない。籐真がくつと息を呑んだのが伝わってくる。

「わかっただろう、鈴！ そいつはそういう男だ！」

憤るように吐き捨てて、藤間の筋肉がしなった。体が一瞬ふわりと宙に浮きあがり、体勢を崩しかけた鈴があわてて籐真の服を掴んだ。

壱の姿が急速に遠ざかる。それは籐真が鈴を抱えて移動しているせいだと気付いた時には、壱の姿は豆粒ほどに小さくなっていった。

「籐真、まって、まって……！」

鈴の声は届いていないようだった。あっという間に壱の姿が見えなくなつて、流れるような早さで周りの景色が遠ざかっていく。

「私、わたし」

(まだ、壱に謝っていない)

伸ばした手の先には、ただただ見知らぬ風景が冷たく横たわっていた。

やっと体が地面におろされたのは、籐真を呼ぶのも諦めて鈴がぐったりとしはじめた頃だった。

「鈴、着いたよ」

安心したように籐真が顔を覗きこむ。鈴はそれに笑顔で返す事はできなかった。ついと逸らされた鈴の視線に、籐真が眉を寄せた。

「……報告をしてくるから」

籐真にひどい態度をとっているのは分かっていた。彼は命がけで鈴を助け出してくれたのだ。しかしどうしても、それが嬉しい事だとは思えなかった。

一人残された部屋の中を鈴は見渡す。小ぢんまりとはしているも

の、要所要所に贅をつくすように造りこまれているのがわかる。部屋の外にも似たようないくつもの部屋が広がっていて、鈴は近くにあった窓から外を見た。

そして息を呑んだ。

眼下に広がる広大な敷地。全貌の見えない天守閣の一部。緑に包まれた庭の中に人工池。それらを描えるかのようにぐるりと囲む城壁。

(ここは、どこなの)

澄沢村じゃない。

混乱に心臓がばくばくと鳴っていたその時、転げるような足音とともに部屋に誰かが飛び込んできた。慌てて振り向くと、その意外な姿に目を丸くする。

「鈴！」

肩で荒く息をしながら鈴の名を呼んだのは、美津だった。

「美津、様？」

「ああよかった！ 無事だったのですね！」

ふわりと美津の手が伸びてきて、柔らかな懐にすっぽりと包まれる。驚きに抵抗することもできず鈴はされるがままになっていた。

「本当に心配していましたよ。藤真から貴方を連れ帰ったと聞いた時はどんなにほっとしたことか」

その声音にうそ偽りはないうだった。それでも鈴は混乱から抜け出せない。

(この人は、誰?)

鈴の知っている美津はこんな人間ではなかった。美津はいつも笑うことなく厳しく鈴を見据えて、鈴がまた何も出来ずにいると、眉をしかめて呆れたようなため息をつく人だった。決してこんな鈴を思っただけを震わせるような人ではない。

鈴は胸の前で抱えた手を持って余して、やがて諦めたように固く握りしめる。

鈴の戸惑いを察したのだろうか。美津が静かに鈴から離れ、驚く

ことに目頭をぬぐったのを、信じられない気持で鈴は見ていた。

「取り乱してしまつて、ごめんなさい」

それから自分を戒めるようにきつく眉をしかめた。

「明日から、また貴方の新しい一日が始まります。澄沢村の場所が敵に知られてしまつた以上、もうあそこに帰る事はできません」

澄沢村。聞きなれた単語が出てきたことによつやく鈴は安心した。そつだ、確かに外部にばれてしまつた隠れ里など何の意味もない。また別の場所に新しい里を用意しているのだろうか。

「ではほかの巫女達も皆ここにいるのですか」

特別強く関心を持ったわけではなかつた。ただ話の流れでなんとなく聞いただけの質問に、美津の瞳に確かに戸惑いが走る。

「……いいえ、ここにいるのは、貴方と私と、それから貴方の侍女だけです」

「侍女？」

思いもよらない言葉が美津の口から出た。

「こちらへ」

美津が部屋の外に向かつて呼びかけると、待っていたかのように一人の少女がするすると出てきた。

「よろしく願ひします」

固く強張つた声で、しつしつと頭を下げる。長い黒髪がぱらりと零れた。

「なぜ私に侍女が」

「貴方はもう、正式に勝亦の巫女となつたのですよ」

当たり前前の事のように美津が言った。

「あなたの姉達も、同じように侍女がついていました」

同じように、という言葉について反応してしまう。

「でも、私は」

言おうとして鈴は口をつぐんだ。美津の瞳がそれ以上は語るなど、厳しい光を湛えていたからだ。それはいつも鈴を諫めていた厳しい瞳だった。

「では、今日は疲れているでしょうから私はこれで。また明日お会いしましょう。何かあれば侍女を呼ぶのですよ」

「はい……」

有無を言わせない言葉に鈴は素直に従うしかなかった。

根なし草

翌日、目を覚ました鈴を待っていたのは固い表情をした侍女だった。

思わず何かあったのかと聞きたくなるほど彼女の顔は強張っていて、けれどどうしたのと聞いてもいいえと短く返ってくるばかり。しばらく見ているうちに、どうやら何かあったわけではなくそれが彼女の常だと言う事に気付いた。

「名前を、教えてくれないかしら」

「名乗るほどのものでもありません」

勇気を出して聞いた問いを冷たく返される。

鈴はため息をついた。

何気なく話をしようとして、一方的に断ち切られる。もう何度もそういう事が起こっていた。

（私、何かこの子に嫌われるような事したかしら）

そう思いながら侍女を盗み見て、ふと鈴は見たことのある顔だと言う事に気付いた。見た事あるどころか

（なんで気付かなかったの）

いくら興味を持っていなかったとはいえ、鈴は改めて自分の疎さを恥ずかしく思った。

侍女の娘は、鈴と同じく澄沢村で生活を共にしていた巫女見習いの一人だった。

以前、水盆の水をこぼした時に、蔑むような視線を投げかけていった娘。名前は 思いだせなかった。ただ鈴よりは力がある事は確かだ。

（嫌なのね）

自分より力のない鈴に仕える事が。

諦めにも似た悲しい気持ちで鈴は思った。

それはよくある事だった。

あの二人の妹だからと妬まれて、あの二人の妹なのにと嘲られる。巫女見習いとは言えその前に一人の少女。生々しい感情をぶつけられる事は珍しい事ではない。鈴が彼女達から距離をとっていたのはそういうわけもあった。

「こちらをお召しになつてください」

侍女が義務的にいいながら取りだしたのは、花嫁衣装かと疑う程真つ白な打ち掛けだった。驚いて怪訝な声があがる。

「これは？」

「巫女用の装束です」

手にとつてまじまじと見ても、それはやはり白無垢とよく似ていた。ところどころに鮮やかな赤がはいっているものの、澄沢村にいた頃に着ていた白小袖に紅袴とは似ても似つかない。

目の前の衣装が受け入れられなくて茫然としてみると、美津がゆつくりと部屋に入ってきた。

「美津様、これは……」

装束を差し出ししながら戸惑ったように鈴が聞くと、美津はちらりと視線を走らせてすぐに鈴に向き直った。

「勝亦の巫女の衣装です。貴方の姉達も、同じ装束を着ていましたよ」

それでも鈴の戸惑いは消えなかった。触っただけで上質だと分かる布地に、白無垢にどこまでもよく似ている”巫女装束”。白無垢ですら高価で一部の姫君ぐらいしか着られないのに、それを真似したようなこんな派手な装束なんて。

「……勝亦は特殊なんです。気にせずに着てしまいなさい」

その言葉にやっと鈴は諦めがついたようだった。着ていた小紋を脱ぐと、美津が慣れた手つきで着付けていく。

実際に着てみると、ますますそれは白無垢によく似ていた。そもそも袴がない事自体が巫女装束としては決定的におかしい。目の前で平然としている美津が信じられないぐらいだった。ちらりと目を

やると、侍女の娘はどうやら鈴と同じことを思っているらしい。押し殺した瞳の中にかすかな驚きが見えている。

とは言えどうしようもない事に、鈴は諦めてこれを巫女衣装だと思いいこむことにした。

「菊間様が撫子の間でお待ちです」

その名前に鈴は顔をあげた。

菊間 。いつか籐真から聞いたことがある。この勝亦藩の藩主で、鈴達の主人その人だと。

「貴方の力が見たいそうです」
体が固く強張った。

（きつと菊間様は知らないのだ。私に力がないことを）

そうでなければ、鈴に巫女を勤めさせようなんて考えるはずがない。不安に駆られて美津を仰ぎ見ると、美津も同じことを思っていたのかもしれない。普段は厳しい瞳がその時は心配そうに鈴を見ていた。

「……大丈夫です。自分を信じなさい」

励ますように言われても、鈴の心は軽くならなかった。信じるも信じないも、そもそも最初からまるでないという事を美津も十分に知っている。気休めにもならないその言葉をなぜ美津は言うのだろう。

絞首台に向かう下手人のように、重い足取りで美津のあとについていくと、やがて城の一室にたどり着いた。

美津が膝をついて恭しく襖を開けるのを見習って鈴も静かに頭を垂れる。

「鈴を連れてまいりました」

「入れ」

想像していたよりも高く、それでいてしわがれた声だった。中に入り、失礼にならない程度に盗み見る。

菊間は随分とくたびれているようだった。細い目の下には大きな隈ができ、肌もみずみずしさを失って力なく垂れている。同じ藩主

でも、いまだに強く生気がみなぎる松浦とは雲泥の差だと鈴は思った。

「では、はじめよ」

その言葉に、美津は腕に抱えるのがやっとなくらい大きな水盆を鈴の前に置いた。漆器で出来たその大きな盆には並々と水が張っており、鈴の不安げな顔を映し出している。

「次に小野原が狙ってくるのはどこだ？」

鈴はその答えを探そうと必死に手を伸ばした。占うらひをすると、力のあるものなら水盆に手をかざすとその光景が映し出されるらしい。鈴の姉達に至っては、ちらりと一瞥しただけで水盆が従者のように勝手に映し出してくれたと聞く。

けれどそれはあくまで自分以外の話だ。

真似ごとのように手をかざし、苦しげに額に皺を寄せてみたところで目の前の盆は何の変化もなく冷たく鈴を見下ろしている。

汗が鈴の顎を伝って水盆に落ちるくらい、しばらくそのまま動けなかった。そして一粒の汗ほどにも水面を揺らせない自分の力の無さを鈴は絶望したように見つめていた。

「もうよい」

菊間の声が静かな室内に響き渡った。

これで菊間にも鈴の実力がわかっただろう。

呆れた目で見られるのが恐ろしくて、鈴は顔をあげて菊間を見る事ができなかった。

「やはり噂どおりだな。仕方ない。早急に他に巫女を一人見繕え」

予想に反して声は穏やかだった。どうやら最初から知っていて鈴を試したらしい。驚いて顔をあげると、菊間の感情の読みとれない目と合った。

「……ふむ。本当に撫子によく似ているな」

ただでさえ細い眼をますます細めて独り言のように呟く。その時美津が一瞬肩を強張らせたのを鈴は見逃さなかった。

「今日はもうよい。下がれ」

言われるまましずしずと退出する。帰りの廊下で何事もなかったかのように前を歩く美津に、鈴は思いきって尋ねた。

「あの、私はどうなるんでしょうか」

巫女として役に立たない以上、鈴に出来る事は限られていた。炊事が、あるいはあの少女のように誰かの元で侍女として仕えるか。

(それでも構わないわ)

どのみち鈴には行くところなんてないのだ。

「……多分、貴方はこのまま」

美津は言葉を探るように言った。

言葉の続きを待つて鈴が静かに見ている。

「……いえ、まだ分からないことだから」

どうしてか、それはまるで自分に言い聞かせているようだった。

その言い方が鈴の心に引つかかる。

(このまま?)

続きは気になったものの、美津はそれ以上話す気はないようだった。諦めて、もうひとつ気になっていた事を聞く。

「撫子と言うのは、どなたなのでしょう」

菊間の口からそれを聞いた時からずつと気になっていた事だった。かすかに予想していた通り、みるみる美津の顔が強張っていく。

「それはいずれ、教えましょう」

だから美津からそんな言葉が出た時も特に驚かなかった。

(ここでも、わからない事だらけなのね)

鈴の事なのに、皆鈴をを遠巻きにして事を進めていく。秘密裏に進められていくその真意を教えてくれる者は誰もいない。

故郷に帰って来たはずなのに、鈴の存在は今も根なし草のようにゆらゆらと揺れていた。

似合わぬ打掛

割れた器のかけらを土間から掃き出すように、鈴もまたすぐに役立たずとして追い出されるのだろうと思っていた。しかし予想とは裏腹に、あまりの退屈にため息をついてしまうほどに、鈴は放っておかれている。

鈴が言いつけられた事といえば、ただ毎日あの巫女装束を着て過ごすこと、それだけだった。過ごすとは文字通り、ただ黙って部屋にこもり日々を過ごすことにほかならない。

何か仕事を、と聞けば美津が首を振り、ではせめて何か手伝いを、と聞けば侍女が首を振り、じゃあ城の外を見てきていいか、と聞けば二人に首を振られる。その結果何もすることがないというのは本当につまらない事なのだ。鈴は生まれて初めて知る事になった。

一件お姫様扱いのように見えて、その実飼ひ殺しと何ら変わりない。鈴には何かをやらなければいけない義務もなければ、自分の置かれた状況を知る権利もなかった。

ここはどこなの。

私はなぜここに残されているの。

どうして何もさせてくれないの。

撫子は誰なの。

誰も、何も教えてくれなかった。

思い切って訊ねても、ただ黙って首をふるばかり。そしてそれ以上聞こうとすれば悲しそうに、もしくは厭わしそうに見られるだけ。おかげで何もすることがなくただ部屋にぼつんと一人でたたずむ鈴を、美津だけが時折気を遣って様子を見にきてくれた。けれど鈴と違って忙しそうな彼女が長居する事はない。元々口数の多い人でもないし、鈴もいまだに苦手意識の抜けない美津に気軽に話しかけ

る事はなかった。

「変わりありませんか」

「大丈夫です」

一言二言、挨拶のような言葉を交わすだけ。それが終わってしまえばすぐにまた美津はいなくなる。

突然ここへ連れてこられ、そしてその役目を今度こそ失ってしまった鈴のように、窓の外では急速に力強さを失った太陽がぼんやりと浮かんでいた。まわりつくような生温い風に役目を譲って、自身は申し訳程度の日差しを降り注いでいる。

(きは、どうしているんだろう)

暇を持て余す度に思いだすのはいつも同じ事だった。

最後に見たきの姿を思い出すと、浮かぶのはいつも同じ立ち姿。油断ならない刺すような鋭い殺気を放ちながらも、虚ろで、そしてどこか寂しそうなきの姿。

(きは確かに殺したと言った。でも)

鈴にはどうしてもそれが信じられない。本人の口から出た言葉だと言つのに信じないとは、自分でも盲目になつていているとは思つ。

(でも、きは私の目を見なかった)

鈴の目を見て殺したとは言わなかった。いつも優しく、まっすぐに鈴の目を見て物を言う人が、あるときだけは鈴から目をそらした。(それなら私は信じない。もう一度まっすぐ目を見て言われるまでは、決して信じない)

それは盲目と言つにはあまりにも冷静な、確信めいた決意だった。(それよりも)

硬い決意に張り詰めていた顔が、くしゃりと感傷に緩む。

謝るところか、満足なお礼ひとつ言えずに消えてしまった鈴をきはどう思っているのか気になった。出来る事なら、あんな形ではなくもつときちゃんとした別れを言いたかった。それは鈴にとっては大

まらなくつらく切ない事になるだろう。それでも壱が小野原の忍びであり、鈴が勝亦の巫女である限りあの地にはいられない事は分かっている。だからこそ、最後はきちんとしておきたかったというのに、結局それも叶うことはなかった。

もう何度目になるか分からないため息をついてから、鈴は同じく別れを告げられなかった壱の兄弟たちを思い出す。

睦や響、雷に風は元気にしているのだろうか。突然いなくなった鈴の事を少しは気にしてくれているのだろうか。毎日汚れた着物を着ていないだろうか。布団を出しっぱなしにしているだろうか。途中から思考が小言を言う母のようになっていいるとは分かりつつも、少なくとも食事は大丈夫だと思いたい。

(だって睦がいるものね)

だから、鈴がいなくなっても大丈夫。そもそも最初から鈴があの家が必要とされていたわけでもない。それでもつくった食事をおいしそうにほおばる姿を見るたびに、自分の居場所が確かに存在しているようで嬉しかった。何不自由ない、けれど居場所もないことは大違いだと思う。

急速にあの家が恋しくなる気持ちを抑えて、鈴はそつと壱からもらったかんざしを取り出した。

髪にはつけない代わりに、いつもお守りのように帯にはさんでいた。だから勝亦藩に帰って来た時も、帯に挟まったまま鈴と一緒にここへつれてこられた手の中の小さなかんざし。後から知った事なのだが、この幻想的なとんぼ玉の中にはいつている白い花は卯の花というらしい。餅つきの時に使う杵きねの材料となる空木うつぎの花の別名だという。

そして壱に以前こう言われた事がある。

「卯の花は、鈴に似ているな」

どこかと訊ねても、結局笑って教えてくれなかった。でもそれ以来、道で見かけるたびにその言葉を思い出して微笑んでしまう。そしていつしかもう一人の自分を見るように、卯の花を愛でていた。

(ここにも卯の花が咲いていれば、少しは寂しくないのかな)
寄り添うようにかんざしに唇をつけて、鈴は目を瞑った。

「鈴」

突如廊下から聞こえてきた予想外の、けれど待ちわびていた声に鈴がぱつと目を開いた。

「籐真！」

喜びを声ににじませて、この場所で鈴が唯一心を開いて話が出る友達に駆けよった。

「私あなたにとても会いたかったのよ、どうして今まで会いにきてくれなかったの？」

声を弾ませて喜ぶ鈴とは反対に、籐真は険しい顔を浮かべていた。あのあぜ道で再開して以来、籐真はいつもこうだ。いつもの彼の、いたずらっぽい笑顔がみたいのに、ここでも籐真は笑ってくれない。

「籐真……？」

そんな怖い顔をしてないで、何か言つて。

不安に駆られて伸ばした指先が籐真に触れる前に、籐真の口が開いた。

「鈴に、謁見禁止令が出た」

「謁見禁止令？」

意味がわからなくて子供のように言葉を繰り返す。

謁見なんて言葉、まるで鈴が偉い人のようではないか。

「どういう事なの」

「俺は、俺はもしかしたら、鈴を連れて帰ってこなかった方がよかったかもしれない」

困惑して問いたただす鈴を置き去りにして、籐真は独り言のように言った。それは身をすり潰すような言い方だった。

「どつして」

鈴の問いに籐真は何も答えなかった。ただ何かをこらえるようにじっと壁を睨んでいる。

「……籐真まで、私に何も教えてくれないの？」

我慢できなくて、失望をにじませた声でそう言っても、籐真はますます顔を歪ませただけだった。

宙に浮いたままの手が行き場をなくして静かに下ろされる。

唯一、籐真なら、籐真だけは鈴に話してくれると信じてた淡い希望が風に吹かれて消え去った。重苦しい沈黙が広がる。少しだけ落ちたお日様が音もなく二人の間に影をつくった。

やがて物音を聞きつけた兎のように、唐突に籐真が顔をあげた。そのまま少し耳をすませたかと思うと、まっすぐに鈴を見る。

「また、来るよ」

慰めるような響を残して、籐真は鈴が返事をする間もなく、瞬きをした一瞬の間に消え去っていた。夏にそぐわない静けさだけが残った部屋で、鈴は取り残された子供のように一人立ち尽くしかなかった。

すぐに籐真と入れ替わるように、するすると衣擦れの音がして、美津と侍女の二人が顔を出す。思わず鈴は眉をしかめた。二人揃ってやってくるなんて珍しい。それに二人の腕には、女の腕にはいささか大きすぎる行基が重々しく抱えられていた。

「今夜、菊間様と一緒に夕飯をとってもらいます」

いつもよりも少し表情が硬い気がする美津が言った。

「夕飯？……私と？」

「ええ、だからこちらのお召物を着るようにと」

そう言って重そうに降ろされた行基の中を見て鈴は息を飲んだ。

中に入っていたのは、牡丹色、青藤色、萌黄色、朱色、堇色、さまざまな色どりの打掛だった。手で触れることすらためらわれるくらい、一目で上質だとわかる煌びやかな打掛たち。複雑な刺繍がびっしりと覆い尽くすその中に、細かな金箔が散らせてあるものがほとんどだった。

なぜこれを私に、と思うのと同じくらい、同時に目の前の打掛に目が惹かれる。鈴も年頃の娘、美しい衣装に目がないのはしょうがないことだった。だから打掛をこわごわと畳に広げる自分を、美津

が苦い目で見ていた事にも気づかなかつた。

鈴は石竹色に枝垂れ桜や牡丹が咲き誇るやわらかな色合いの打掛をうつとりと眺めていた。その打掛は奥ゆかしさの中に華やかさもあつて、それが美しい庭園のような趣深い柄になっている。

(これを着たい)

そう思った鈴を諫めるように、美津が静かに違うものを差し出した。

「どうぞこちらをお召しになってください」

それは目の覚めるような赤地に金箔で鶴が描かれているものだった。

「これは……私には派手すぎないかしら」

知らず目尻が下がって非難するような口調になってしまふ。物自体は決して悪いものではない。しかし全体的にぎらぎらとしていて、線の薄い鈴にはささか豪華すぎる。恐らく鈴がこれを着れば、この派手な打掛に負けてしまふ。そんな代物だった。

「ええ。きつとそちらの石竹の打掛の方が貴方には似合つでしょう(ならばなぜ)」

鈴の無言の訴えを遮るように美津は続けた。

「けれど今日はこちらをお召しになってください」

それは有無を言わせない、確固とした命令だった。

美津の意思が掴めぬまま、けれど逆らうこともできずに渋々袖を通す。

着てみると、やはり強烈な赤だけが浮いてしまつて、着ているというよりは打掛に着られているようになってしまった。侍女がちらちらとこちらを盗み見ていたが、豪華な着物に負けている自分が恥ずかしくて鈴は気づかない振りをした。

続いて紅を引かれる。これも下品ともいえる程赤い紅を引かれ、鏡にうつる鈴の姿はまるで場末の遊女のようにだった。遊女のくせに、着物だけが不釣り合いに煌々と存在を主張している。

「美津様、これは」

堪らず抗議の声をあげた鈴に、それでも美津は静かに言っただけだった。

「今は、我慢しなさい」

結局それ以上何も言えずに鈴はがつくりとうなだれた。

「……では、行きましようか」

促されるまま、鈴は静かに美津の後をついていくしかなかった。

むせ返る酒

衣装と釣り合いのとれていない自分の姿を隠すように、背中を丸めて美津の後ろについていく。たどり着いた先で顔をあげると、心のどこかで予想していた通りに撫子の間が目の前にあった。

襖を前に美津は侍女を下がらせ、その姿が見えなくなってからゆつくりと鈴の方に振り返る。

「もし……もし何かあれば、迷わず私の事を呼ぶのですよ」

いつも通り厳しい、けれどいつになく焦りを含んだ言い方だった。

(なにかって、なに)

声には出さず心の中でそう問いかける。

もしかして誰かが菊間の命を狙っているのだろうか。それならば美津よりもっと他の人を呼ぶべきではないのだろうか。それとも鈴が何かへまをする事を言っているのだろうか。食事をとるだけにへまも何もないけれど、と心の中で付けくわえる。鈴が思いつく事といたらそれくらいしかなかった。

鈴が戸惑いながらも頷いたのを見て、美津は静かに襖をあけた。

「鈴が参りました」

中では既に菊間が鈴を待つことなく一人で食事を始めていた。といても膳に乗っている料理をつついた程度のもので、どちらかという酒を呑む事を主に楽しんでいるようだった。

「こちらに」

そう言っつて菊間が叩いたのは、彼のすぐ隣だった。確かにもう一人分の座席と膳が並べてある。距離の近さを怪訝に思いながらも呼ばれるまま隣に座った。

「お前はもう下がれ」

菊間は追い払うように美津をさがらせた。広い撫子の間には鈴と菊間の二人だけになる。その広さの中で、密着するくらい近くに座

つている事がどうにも落ち着かなくて鈴は小さく身じろぎした。

「飲みなさい」

美津を追い払った時とは打って変わって優しい声で、菊間は自ら目の前にあつた小さな盃はちに並々と酒を注いだ。それを上機嫌で鈴に押し付けると、自分はそれよりも二回りも大きい盃を差し出す。求められている事を察して、鈴は見よう見まねでそこに酒を満たしてから、誘われるまま盃に口をつけた。酒を見るのも飲むのも今夜が初めてのことだった。

むつと鼻につくような強烈な匂いに一瞬眉をしかめながらも、鈴は菊間の真似をして一気にそれを流し込む。喉がやけるように熱い。同時に鼻孔に広がる、元は米だった独特の匂いに鈴は我慢が出来ずにむせ込んだ。

「やはりきついかな」

そんな鈴をおもしろそうに眺めながら菊間はゆっくりと盃を酒で満たした。

「ご、ごめんなさい」

口元を押さえながら涙目になった鈴が頭を垂れた。いきなりなんてみつともないところを見せてしまったのだらうという思いに頬は赤く染まっていた。

「まあ、今日のところはそれだけでよい」

それはもう酒を飲まなくてもいいという意味だろう。鈴がほつとしていると菊間が無言で空になった盃を差し出してくる。慌ててそれに継ぎ足してやると菊間は満足そうに目を細めた。

それから菊間は、鈴に一方的に話し始めた。

最近の勝亦藩の情勢がおもしろくない事。美津の勧めで新しくついた巫女が藤と露ほど優秀ではない事。そのせいで周囲、特に隣班の小野原と緊張状態が続いている事。とりとめのない事から、鈴が聞いても大丈夫なのかと思う藩の機密まで菊間は止まる事なく喋りつづけた。

その間鈴は小さく相槌を打ちながら酒を継ぎ足していくだけだっ

た。

(なぜ、私がこんな事を)

本来こういう事とは最も無縁な巫女として育ってきた鈴は、あるうことか遊女のような格好をして、藩主とは言え男に酒をついでいる。戸惑いを押し隠しながらも鈴は黙って話を聞いていた。

「藤と露がいればな」

名残惜しそうに呟く菊間の瞳を鈴は盗み見た。もしかしたらそこに、姉達二人の死を嘆く光を見つけ出せるかもしれないからだ。けれど菊間の瞳は確かに二人の死を嘆いてはいたものの、そこに浮かんでいたのは人を亡くした悲しみではなく、便利な手駒を失った悔しさだった。煩わしそうに眉がひそめられているだけで、悲しみは微塵も見当たらない。

きゅ、と鈴の口元が引きしめられる。

(姉様達の死を、菊間様は悲しんでいない)

美津は姉達の事を何も話さなかった。二人の死を何も思っていないのか、それとも話さないだけなのかは分からない。けれど目の前のこの男は違う。姉達が死んだ事を、草履の緒が千切れたぐらいにしか考えていないのは明らかだった。

死ぬまで勝亦藩に仕えてきた姉達の事を思うと、悔しさに顔が歪みそうだった。必死にこらえていると、不意に菊間が自分を見つめている事に気が付く。

「……化粧はいささか似合っていないようだが、そのような顔をしているとやはり本当に撫子とよく似ているな」

撫子と言う名に、耳に全神経が集まった気がした。

(今なら、聞けば教えてくれるだろうか)

口を開こうかどうか迷っている鈴を尻目に、菊間は尚も一方的に喋りつづける。

「撫子め……唯一無二の巫女だと言うから、私が妻にせずにおいたものを、よりによってあんな事をしでかすとは。そんな事だったら初めから無理にでも我が物にしておくべきだった」

ぐいと酒を仰ぎ飲む。その瞳に浮かんでいる激しい憎悪の色に鈴は口を開くことができなかつた。差し出された盃に黙って酒をつぐ手がかすかに震える。

「しかし……やはり撫子は私のものようだな。見る。今また目の前に、あの当時のままの撫子が座っている。撫子は私の元に帰って来たのだ！」

菊間が戦に勝った武将のように拳を振り上げると、酒臭い息がむわと鈴の鼻をついた。随分と酒がまわっているのだらう。目が完全に据わっている。もう一度酒を継ぎ足して、鈴は仰ぎ見た菊間の瞳にぞくりとした。

菊間の目には完全に色欲が浮かび上がっていた。まるであの時鈴を襲った男達のように。

思わず体が後ろに引いてしまう。

「撫子よ」

舐めつけるような声に、更に半身を引いた。

「私は、鈴です」

震える声で答えると、突然酔っているとは信じられない程素早い動きで菊間の手が鈴を捕えた。

「いやっ」

逃げる暇もなく引つ張られ、目前に菊間の顔がせまる。

「いいや、お前は撫子だ」

ぎらぎらと獣のように光る目に、酒にまみれた匂いに、鈴は目を見開いた。

ゆっくりと菊間の唇が近づいてくる。咄嗟に顔をそむけると、ぬるりと湿った生ぬるい唇が鈴の頬に押し付けられた。

「やめてください！」

「何をやめる事があるのだ。あの時できなかった続きをするだけではないか」

（この人は、私を見ていない……！）

過去の”撫子”に菊間は話しかけていた。

「私は撫子じゃない！ やめてください！」

必死に押し返そうとする鈴の腕がいともたやすく封じられる。菊間に体重をかけられて鈴はそのまま一緒に床に倒れ込んだ。押しつぶすような体の重みが嫌というほど菊間の存在を感じさせる。

「いや！」

「大切にしてやろう。妻にはできないが一生私が困ってやる」

「やめて！」

首筋にもぬるい唇が押し付けられる。そのおぞましさに全身が粟立つ。その間も菊間の手が絶え間なく鈴の全身を撫でまわしていた。（助けて、助けて、助けて！）

心の中で必死に助けを呼んだ鈴の頭の中に、突如雷光のようにさっきの美津の声が蘇った。

”もし何かあれば、迷わず私の事を呼ぶのですよ”

「美津様！」

思い至った瞬間、出せる限りの大きな声を張り上げて鈴は叫んでいた。

「美津様！ 美津様！」

「無駄だ。美津には邪魔しないように言っている。大人しくしろ」

「いやあつ！ 美津様！」

鈴が叫べば叫ぶほどに苛立ちが見え始める菊間が恐ろしくて、同時にやっと見つけた蜘蛛の糸を逃すまいとますます大きな声で鈴は叫び続けた。最早それしか道が残っていない事を本能で感じとっていたからだ。

その時、呼びかけに応えるようにスツと扉が開いて、美津が静かに入ってきた。

美津の姿を視界に移した瞬間、鈴は安心のあまり泣きだしたい衝動にかられた。状況はまだ何一つ好転したわけではない。それでも美津は、鈴の呼びかけに答えて、今ここに来てくれている。

「菊間様、至急のお話が」

頭を深々と垂れて表情は見えないが、その明朗な声ははっきりと室内に響き渡る。

「美津、邪魔しないように言っただはずだ」

邪険にする気持ちのを隠しもせず菊間は言った。先ほどの熱っぽい視線が嘘のように消えている。

「それが、巫女が大変な物を見た」と

「明日にしる」

「至急を要するとの事です」

菊間のきつい声にも怯むことなく美津が淡々と返す。

そうして美津が一言返すたびに、鈴は腕を掴む菊間の力が確実に弱くなっていくのを感じていた。

「……全く。お前のせいで興ざめだ。もうよい。巫女のところへ案内しろ」

「こちらへ」

そのまま菊間は美津とともに、鈴を顧みることなく足早に撫子の間から出ていった。一人床に伏せたままの鈴が茫然と肩で息をしていると、代わりに黒い影がすりと入ってくる。

「鈴」

焦ったような声の主は籐真だった。

「籐、真……」

「大丈夫か！」

助けるように起こされて、その時初めて鈴の体が震え始めた。

今さらになつて壊れたからくり人形のようにがたがたと震えだす体をきつく両手で抱える。それでも震えはとまらない。

それを見ていられなかつたのだろう。青白い顔で必死に震えを抑えようとする鈴を籐真が抱きしめた。

「鈴……！」

「いやっ」

反射的に突き飛ばしてからしまったと鈴は思った。けれど籐真は

一瞬傷ついたような表情を浮かべて、すぐに申し訳なさそうに顔を歪めた。

「ごめん、怖かったよな」

「違うの、藤真のせいじゃないの。ごめんなさい……」

本当は縋りついてでも謝りたかった。でも体は意思とは裏腹に情けなく震えたまま指の一本すら思い通りに動かせない。

「大丈夫、わかってるから。……部屋にもどろう」

鈴を気遣って、藤真がそっと鈴の背中を押す。

藤真は優しい。あの人のようにどこまでも優しい

(なのにどうして、突き飛ばしてしまったんだろう)

咄嗟に出してしまった自分の行動と、そのせいで深く傷つけてしまった藤真に申し訳なくて鈴はぎゅっと唇を噛み締めた。

「今夜は、俺が外で見張っていいようか」

その声ではっと顔をあげる。いつのまにか、鈴の部屋の前についていた。

藤真が外で見張っている。それは多分今は何よりも安全なのかもしれない。

けれど

「……大丈夫、今は少し一人になりたい」

今は、藤真ですら傍にいて欲しくなかった。

優しい藤真。彼が鈴を傷つけるとは露ほどにも思っていない。それでも、今は誰にも傍にいて欲しくなかった。

一人を除いては。

「……わかった」

声に隠しようのない悲しさがにじんでいた。その顔を見る事が出来ずに、鈴はただ黙って俯いていた。

(気遣ってくれたのに、ごめんなさい)

藤真の気配がしなくなってから、鈴はすするとその場へたり込んだ。

抑えていた涙がゆっくりと溢れ出る。

（ごめんなさい）

両手で口を押さえて、鈴は嗚咽を噛み殺した。

（ごめんなさい）

ひどい事をしていと思った。

助けてくれた故郷の優しい友達を拒んで、勝亦の敵である忍びを強く求めている。それがどんなに籐真を傷つける事かぐらい分かっている。

それでも鈴は、命を乞うように、壱だけを求めている。

「ごめんなさい……」

うずくまるように、鈴はその場に倒れ伏せる。零れ落ちた涙が畳に吸い込まれて、跡形もなく消え去った。

勝亦の巫女姫

どれくらいそうしていたのだろう。暗闇の中で乾いた涙が膜のように頬にこびりついていて、不快に感じながらも、どうする事も出来ずに鈴はうずくまっていた。

そこへ焦ったように駈けて来る足音が聞こえた。

一瞬、菊間がやってきたのかとぎくりとしたが、男にしては軽すぎるその足音になんとか心を落ち着かせて体を起こす。こわばった涙の痕をこすり落とすと、それと一緒に少しだけ視界がはつきりしてきた。

やがて小さな行燈を手に持って、美津が息を切らせて部屋に入ってきた。

「大丈夫ですか、鈴」

入るなり焦ったようにそう言って、美津はもどかしそうに行燈を床に置いた。

「美津様……」

美津の声を聞いた途端、またじわりと滲んできた涙を隠すように下を向く。

「ああ、泣かないで。もう大丈夫ですよ」

まるで我が子を抱きしめるように、ふわりと美津が鈴を胸に抱きしめた。日向のような暖かくて、どこか懐かしい匂いが鈴を包む。それが美津の匂いだと知ったのは、籐真に連れられてここにやってきた日だ。

慰めようとしているのだろう、赤子をあやすように繰り返し背中を撫でられる。その穏やかな手は、まるで本当の母親のように優しいと鈴は思った。

どうして、と鈴は思った。思った次の瞬間には実際にそれを口に出して聞いていた。

「どうして、美津様は私に優しくしてくださるんですか」

行燈に照らされてぼんやりとしか見えない美津の顔をゆるゆると見上げる。美津の瞳が何か言いたげに、かすかな光を湛えていた。

美津はその問いには答えずに、代わりに違う事を言った。

「撫子の事を貴方に教える時が来ました」

一瞬はぐらかされたと鈴は思った。しかしすぐにそうではないと気付いたのは、美津が優しい瞳で鈴を見つめた時だ。

「私が初めてあの子に会ったのは、まだ今の鈴よりももう少し若い時でした」

鈴の髪をゆつくりと梳きながら、愛おしい思い出に触れるようにゆつくりと美津が語り始める。

美津がまだ十代の娘だった頃。当時の澄沢村には既に巫女になる為の少女達がたくさん集められ、生活を共にしていた。

当時の巫女はまだ名ばかりのもので、今のように藩の行く末を担う大切なものではなかった。少女達が学んだのは神楽で舞う舞や、形ばかりの祈祷、そして何よりも象徴としての巫女と言う存在のあり方だった。

「偽物だったのですよ。あの当時の巫女と言うものは。それを根本からがらりと変えたのが、撫子なんです。私はいまだにあの日の事を忘れる事ができません」

その日は朝から皆一様に様子がおかしかった。まるで春の訪れを感じた森の動物達のようにそわそわと浮き立って、同時に泣きだしなくなるような愛おしい気持ちにも包まれている。前日の夜までは何事もなかったのに、一体どうしたことかと首をひねったのは当時の世話役の巫女だけではなかった。

そのうちふと何かに呼ばれたような気がして、少女達が一斉に窓の外を見た。朝日が昇るのを見守るようにじっと見つめたその先に、先代の勝亦藩主、菊臣きくおみに手をひかれた小さな女の童が立っていた。

「気がついたら私たちはみな泣いていました。その子を見た瞬間から本能的に悟ってしまっただんです。ああ、私たちの巫女姫が来た、

と。それが撫子との出会いでした」

菊臣がどこから撫子を連れて来たのかは誰も知らなかったし、そんな些細な事はどうでもよかった。出生なんて関係ないと思えてしまふ程に撫子は絶大な力を持ち、同時に彼女自身の放つ眩いばかりの魅力に澄沢村だけではない、勝亦藩全てが魅了されていたからだ。「撫子が笑えば私たちの心は幸せに満たされ、彼女が泣けば何をしてもその涙を止めてあげたいと思わずにはいられませんでした。そうして気がつけば、撫子は勝亦藩の何よりの生きる宝となりました」

嫉妬などという人間臭い感情など遠く及ばない、それだけ神がかった力と魅力を持つ撫子は、その絶大な力で小国にすぎなかった勝亦藩をみるみる大国へと押し上げていった。その裏にどれだけの血が流されているかも知ることなく、ただ彼女は乞われるままその力を行使していった。

そんな撫子も、やがて童から美しい娘へと成長する。

「その頃から菊臣様の跡取り息子である菊間様の、撫子に対する激しい執着が見え始めするようになったのです。撫子を妻に、と父親に詰め寄った姿を私も何度も見たものです」

その息子の度重なる要求に、菊臣が首を縦に振ることはなかった。当時の菊間はいくまでも跡取り息子にすぎず、また絶大な力を持つ撫子の損失を藩は何よりも恐れていた。純潔を失う事があれば巫女の力も失われるかもしれない。その根拠のない、しかし絶対的な無言の怯えは、菊間にとつてなによりも強い牽制だった。

「撫子はそんな菊間を疎んでいました。それでもしつこく会いにくる菊間を拒まなかったのは、今おもえばいつも一緒にいた側近の勝也なりがいたからでしょうね」

目を細めて美津は言った。

勝也は、若いのによくできた男だった。菊間は主としてはいささか思慮に欠ける男だったにも関わらず、常に主の傍に付き従い全力

で支えてきた。涼しげで整った風貌とは裏腹に、寡黙で口数の少ない男だった。

そんな勝也に憧れる娘は少なくなかった。そして撫子も、他の娘と同じように勝也に強く惹かれていくことになる。

「撫子も巫女である前に一人の娘です。私は彼女の気持ちを知っていました。どう考えても破滅にしか向かわない恋。そう分かっているても止める事ができなかった。いいえ、私でなくとも、誰にもあの二人を止める事はできなかったでしょう。……やがて、それが定めだったかのように、二人は勝亦から姿を消しました」

そこまで言うてから、美津はまたゆっくりと鈴の頭を撫でた。

鈴の涙はもう止まっていた。その代わり食い入るように、美津の話に耳を傾けている。

「撫子がいなくなつてすぐに菊臣様は病でこの世を去りました。残ったのは愛する人と信頼していた部下に同時に裏切られ、失意のどん底にいた菊間様でした。もちろん菊間様と勝亦藩は血眼になつて二人を探しました。でもそれから何年にわたつても、二人が見つかる事はありませんでした。その頃には私はもうこのまま二人が逃げおおせてくれるものとはかり信じて毎日を過ごしていたのです」

けれど、美津の淡い願いが叶う事はなかった。

「取りつかれたように別人になつた菊間様の執着が、最終的に山奥に隠れていた二人を見つけ出したのです。そのまま二人が産み育てた幼子の目の前で、両親である撫子と勝也を切り殺しました」

美津の指の先に震えるように力がこもるのを鈴は黙って感じていた。

（あの人は）

頭の中に蘇る、鈴のもつとも古い記憶。松浦に暴かれ覗き見られた、一組の男女の姿。

（あの、穏やかな死に顔をした女の人は）
握る手が細かく震える。

「……それが、私の、母と父だったのですね」

美津がゆつくりと、頷いた。

沸き上がる悲しみに、鈴は静かに目を閉じた。

母をかばった父ごと斬り捨てる憎しみの籠った一太刀。嫉妬に狂って人でなくなってしまうた菊間の顔。それは、恐ろしいよりもただただ悲しかった。

小さな藤と露がそれを静かに見つめている。泣きもせず、怖がりもせず、まるでその訪れが分かっていたようにただ黙って。そして二人に抱えられるようにして、赤子の鈴は小さな眼を見開いてその光景を焼き付けていた。

両親の最後の姿を、唯一の思い出とするために

鈴の頬をゆつくりと一筋の涙が伝った。

「……幼子までは、殺せなかったのでしょうか。当時既に四つになっていた藤と、三つになった露。そして赤子の貴方を連れて菊間は帰ってきました。そのまま貴方達は澄沢村で、巫女見習いとして育ったのです」

鈴の頬を、美津が優しく撫でた。その瞳に溢れんばかりに悲しみが浮かんでいるのを見て鈴は口を噛む。

「貴方達を最初に見た時は、本当に驚きました」

ため息をつくように言葉をこぼして、それから美津は不意に眉を歪めた。

「というよりも、恐ろしかった」

「恐ろしい？」

思わぬ言葉に鈴が聞き返した。

「連れてこられた藤と露は、まだほんの幼子だったにも関わらず、何の感情も読みとれない瞳をしていました。それはまるで人との関わりに何の関心もない、小さな物言わぬ神のように」

目の前で両親を斬り殺されても顔色ひとつ変えない二人は、当時から神童という言葉すら陳腐に聞こえるほど人間離れをしていた。

「いつかあの二人は、両親を殺した勝亦藩に復讐するのではないかと、虫を踏み潰すようにあっさりと勝亦藩を滅ぼしてしまうのでは

ないかと、気が気ではありませんでした」

隠してきた罪を告白するように、美津は大きく顔を歪めて一気に吐き出した。思ってもみなかったその言葉に鈴は驚いて声もでなかった。

「けれどそうではありませんでした。あの子達は、ただひとつのものを守る為だけに、勝亦藩で使役することを受け入れていたのです」
まだ悲しみに揺れる瞳に鈴を映して、美津はそつと鈴の髪を掬いあげる。

「両親の死すら黙って受け入れたあの子達は……それでも貴方の幸せだけは願っていたのですよ」

美津の言葉とともに、二人の姉の表情が蘇った。

いつでも柔らかく微笑みながら鈴を見守っていた姉達。自分だけが使えないと鈴が泣けば何も言わずに、けれど愛おしそうに抱きしめてくれる姉達。その女神のような暖かい笑みが、鈴にとっての姉達のすべてだった。

「きつと勝亦藩を滅ぼすことなどあの子達には造作もなかったはず。あの子達は、信じられない事に撫子よりも強い力を持っていました。それこそ人間の域を超えてしまう程に」

それでもその力を滅ぼすことに使わなかったのは、鈴がいたからだ和美津は言う。

「どうしてあの子達が貴方を連れてここから去らなかったのかは、私にもわかりません。しかし力を持たない、けれど誰よりも撫子に似た貴方をあの子達は本当に大事にしていたんですよ」

美津の指が、いつの間にか流れ出ていた鈴の涙をぬぐった。

「姉様……」

とめどなく溢れる涙が一度は乾いた頬を濡らしていく。

(藤姉様、踏姉様)

心の中で祈るように呼び掛ける。抑えきれなかった嗚咽が部屋に響いた。

会いたかった。今すぐに会って、もう一度あの優しく暖かい笑

顔を見たかった。

けれど二人はもういない。

鈴の手には届かない、遠い、遠い場所に行ってしまった。一度は納得したはずなのに、胸を焦がすような悲しみが鈴を抱きしめていた。

鈴が泣きやむまで、美津はゆっくりとその背中をさすり、やがて独り言のように口を開く。

「……私は随分、貴方に厳しく接してしまいましたね」

背中をさする手はそのままに、美津が言うのを鈴は黙って聞いていた。

「あの子達が貴方を大事にしていると悟った時から……同時にあの子達はそう長くない未来にいなくなってしまう事も感じていました」
藤と路は、ひとつの藩に縛られ続けていいような存在ではない。

いつかあるべきところに帰る日がきつとやってくる。巫女ではなく、神をあがめる人としての美津の予感が正しかった事を知ったのは、あの火事の夜だった。

「だから貴方を、強く育てたかった。強く……菊間様の手が及ばない程、強く」

鈴をさする手がとまった。額にきつい皺を寄せて、美津がぎゅつと目をつむる。

「藤と路には手出ししたくてもそうさせない強い力がありません。それにあの子達は撫子にはあまり似ていなかった。でも、鈴。貴方は成長すればするほど、面差しが撫子に瓜二つになっていく。力を持たない、ただの娘としての撫子に」

力を持たない、ただの娘としての撫子。

それを放っておけるほど、菊間は満たされてはいなかった。

闇の底からひたりと男の手が伸びてきたして、鈴は美津の胸に強く顔をうずめた。

「今夜は、どうか貴方を助ける事ができました。けれどももう一度同じ状況になった時、私にはどうする事もできません」

固く強張っていく美津の声を聞きながら鈴は悟っていた。

（あの似合わない打掛は、わざとだったのね）

少しでも似合わぬように、少しでも菊間の気を削げるように、鈴の良さを隠してしまえるほど派手な打掛に、濃く惹かれた下品な紅。鈴を守るうと考えた美津のせめてもの策は、虚しくも赤子の衣を奪うよりも容易くはぎとられてしまった。

（もう、何も私を守るものはない）

なすすべもない絶望に、鈴は眠るように目を閉じた。

最後の

どんなに拒んでも朝日は昇る。古の頃からただひとつ変わらない理を、無情なものを見るように鈴はぼんやりと眺めていた。

こんなに早く起きたのはこの城にきてから初めてだった。いつも手もち無沙汰になった後は自然とうたた寝をしてしまう事が多い。そのおかげですっかり乱れていた生活の中で、今日だけは明確な意思を持って起き出だした。

巫女装束ではなく、美津に頼みこんで密かにとつておいた薄藍つすあゐの着物に袖を通す。鈴が籐真に連れられてここにやってきた日、最後に舌と言葉を交わした日に着ていた舌からもらった一枚。それに合わせた白花色の帯をぎゅっと締めると、鈴はゆっくりと頭をあげた。

辺りに人がいないのを確認してから、音もなく足を滑らせる。目的は、いつもは決して訪れる事のない、この城の隅々まで調べる事だ

132

もはやここで誰にも頼る事が出来ない以上、自分でどうにかするしか道はない。そして今の鈴が唯一出来る事。それはここから逃げ出す事。

逃げだした先にどんな恐ろしい事が待っているのかは想像もしたくなかった。けれど何もせず、ただじっとその時を待つ事はそれ以上に怖い。ここで受け入れられてしまったら、きつと自分の人としての何かが死んでしまう。その恐ろしい確信が鈴を突き動かしていた。

初めて見る城の中は、いくら朝方早くとは言え、奇妙な程人の姿がなかった。まるで城自体が眠っているかのようにひっそりと、変わる事のない沈黙に満ちている。立派な造りの城だけに、その静かさには寒気がするほどだ。

当然誰もいなければ、誰にも見咎められることもない。

少し様子を見るだけのつもりが、気がつけば外へと続く門が目の前に広がっていた。むっつりとふさぎこんだように重苦しく佇む城門にも、やはり人の姿はなかった。

想像もしていなかった事態に、ごくりと唾を飲み込む。緊張で心音が少しずつ早くなってくる。

（今なら、逃げられるかもしれない）

門には重たそうなかんぬきこそかけてあれど、鈴一人でも頑張れば十分開けられそうな代物だ。

辺りに誰もいないのをもう一度用心深く確認してから、鈴は忍ぶように黙りこくっている門へと歩み出した。

はやる心を抑え、震える手をそっとかんぬきに伸ばす。

「おやめになつた方がいい」

闇の奥から聞こえる、氷のような声に鈴は凍りついた。

「貴方には、常に我々の監視がついております」

人間とは思えない程感情の籠らない声。その冷たさは嫌でもあの時の舌を連想させた。

「貴方がそこから一步でも外に踏み出せば、貴方だけではない。美津殿や、藤真が傷つく事になるとだけ、申し上げておきます」

淡々と告げられるその言葉の恐ろしさに、鈴はみるみる蒼白になった。

人質に取られているのは鈴自身だけではない。美津と、そして勝亦の忍びである藤真までそうなのだ。

菊間は例え一人の忍びを失ったとしても、自分を手放す気はないのだとその時初めて鈴は悟った。

それから生きてままだま沼に沈められるような、暗い幽閉の日々が始まった。

目に見える範囲に人はいない。けれど鈴を監視する目は絶えず地を這う虫のようにじつとりと存在している。藤真はあれから鈴に会いにやってくる事はなかった。なぜなら藤真も監視の対象となつてゐる一人だからだろう。その事を心配する事はあつても、責める気など沸き上がるはずもない。藩主に逆らうのがどんなに恐ろしい事かぐらい鈴も知つてゐる。

今やもう、美津以外の人間はすべて信用できなくなつてゐた。そんな鈴の思いと同時に日に日に侍女の鈴を見る目つきが冷たくなつてくる。

（ああ、もうこの子にも分かつてるのね）

鈴は悲しい気持ちで思つた。ただでさえ彼女は鈴に仕える事をよしと思つていなかつたはずだ。それがふたを開けてみれば巫女どころか、ただの妾だつたなんて、たまつたものじゃないだろう。

侍女の冷たい視線に曝されながら、毎日届けられる煌びやかな打ち掛けには目もくれず、鈴は拒否の意思表示にずっと薄藍の着物を着てゐた。

（私は巫女ではない。けれどあなたの妾でもない。ただの鈴です）
心の中でしか言えない拒否の言葉に唇を噛み締める。どんなに無言の拒否を貫こうと、いつかその日はやってくる。あとはいつその日がやってくるのか。その時鈴には拒否する事などできないだろう。どうする事も出来ない。

あまりの無力さに、泣いて過ごす日々もあつた。

雨が降つた後のように、夏の濁りを色濃く残したまま、どこか物悲しい匂いのする日だつた。行基を持って歩いてくる侍女の姿を見て、とうとう恐れていた時がやってきたのだと鈴は悟つた。

「今夜、撫子の間にお召しにあがるようにとの事です」

侮蔑のこもつた固い声で侍女が淡々と言う。それは鈴にとって死の宣告と等しいものだつた。

「つきましては、この衣を着るようにと」

すつと差し出された衣を見て、絶望に打ちひしがれていた鈴の目が大きく見開かれた。

「これは」

綿帽子こそなかったものの、それは間違いなく今度こそ白無垢だった。

「馬鹿にしてるの！」

侍女が立ち去った後、鈴は白無垢を持ち上げると思い切り畳に叩きつけた。あまりの怒りに顔が真っ赤になっているのがわかる。叩きつけた反動で頭がくらくらとした。

「鈴」

後ろから美津の声がした。

「美津様！」

振りかえると同時に美津に抱きついた。そのまま取りつかれたように早口でまくしたてた。

「白無垢です。私に白無垢を着させて、それから汚そうだななんてどこまでも鈴を馬鹿にしている。いや、馬鹿にどころの話ではない。一人の人間としてすら扱われていない。

「私は、単なる代わり。玩具なんです」

最後の方は声にならなかつた。悔しくて、それでも逆らえない惨めさに、鈴はただただ咽び泣いた。そんな鈴の背中をいたわるように、美津はずつと撫でていた。

嵐のようにひとしきり泣いた後、鈴はそつと美津から体を離れた。もう今さら泣いてもどうしようもない。生気の抜けた顔で鈴が黙っている。美津が緊張した面持ちで辺りを見渡した。そして鈴の手に、布に包まれた何かをそつと差し出してくる。躊躇いながら受け取ったそれはずしりと重く、包みを開けて鈴は目を見開いた。

それはまぎれもなく、懐刀だった。

「どう使うかは貴方の自由です。決して誰にも見つからないように」
その言葉の意味に、鈴は息を呑んで手の中の懐刀を握った。

「私たちは、大丈夫です」

だから貴方の思う通りにやりなさい。美津の瞳がそう語っていた。

目の前で静かに撫子の間の戸が引き開けられる。開けたのは美津ではない。あの侍女だ。

よほど危ない橋を渡ってきたのだろう。美津はあれから周りを警戒しながらすぐに姿を消してしまった。恐らく今夜はもう現れない。

鈴は小さく息を吸ってから、一步を踏み出した。

撫子の間にはまだ誰もいなかった。けれどその真ん中に、わざとらしくひとつだけしとねが敷かれている。

分かっていた事とはいえ、頭に血がのぼるのを抑えられなかった。拳がわなわなと震える。

（大丈夫）

自分を落ち着かせるように鈴は心の中で呟いた。

今、鈴の懐の中には、美津からもらったあの懐刀がある。

すぐに自害をする気はなかった。姉達が生涯をかけてまもってくれた命を、何もしないうちから自分でむざむざ散らす気はない。

（私は玩具でも身代わりでもない。意思はあるのよ）

菊間が現れれば、刃を自分の首にあてるつもりだった。自分の体を人質に、なんとか交渉するつもりだった。浅はかな考えだとは分かっている。それでも今はこれしかすがりつく方法がなかった。

（万が一狂言だと笑われてしまえば、その時は）

脂汗がじわりとにじみ出る。

油断して近寄って来たその瞬間に、心臓を一突きに刺してやるつもりだった。殺す事は叶わなくても、逃げるその一瞬を稼げればそれでいい。忍びも主の情事までは見張っていないはずだ。逃げだし、美津と籐真だけを逃がせれば、あとは自分で首を掻き切るつも

りだった。

(たとえ殺してでも、守ってみせる)

友を。自分の操を。

その決意とともに、自分が人を殺そうなどという恐ろしい考えを持つ日が来るとは思わなかった。けれど環境が変われば人もまた変わる。その気持ちこそが今の鈴の全てだった。

(…… 壱は、どんな気持ちでいつも人を殺していたのだろう)

思考が遠い思い出へと引っ張られる。あの時壱を怖がった鈴は、今この時、もしかしたら人を殺す事になるかもしれないとじっと身を強張らせている。

(少しは、貴方に近づけたかな)

やろうとしている事がどんな事かなんてどうでもよかった。ただ最後に、少しでも壱を近くに感じていたい。それが鈴に残された最後の安らぎだった。

銀色に光る

いくつもの行燈に照らされた仄明るい室内の中で、白無垢を来た鈴は神託を受ける巫女のように座っていた。

凜と背筋を伸ばし、そびやかすことなく顎は引かれている。垂らされたままの長い髪の前から見える首は白くほっそりと輝いていた。固く閉じられた瞼に、何の感情も込められていないように一文字に結んだ口にはうっすらと紅が引かれている。袖の中に隠された懐刀を握る手だけが別の生き物のように熱を持っていた。

耳とともに精神を研ぎ澄ませて、鈴は静かにその時を待っていた。心臓が低く重厚な音をたてて大筒のように鳴っているのは反対に、心は冬の湖のように、波一つ立てることなく深い静けさを保っていた。

とん、と誰かの足音がした。それは女にしては重い足音だった。

その瞬間自分でも驚くほどの速さで体が動いた。視界の隅で垣間見えた銀色に光る抜き身を首につきつけて、鈴は警笛のように鋭く叫んだ。

「こないで！」

懐刀を握る手が汗でじっとり濡れている。ぎらぎらと狂人のように目を輝かせて鈴は人影を睨みつけた。けれど。

そこに立っていたのは菊間ではなかった

闇夜に浮かび上がる灰青の瞳に、何度もまじまじと眺めた整った顔。

それは鈴がこの世で一番会いたいと思った人にそっくりだった。

(うそ、でしよう)

心の中で嘘だと思いながら、それでも確かめられずにはいられない。

「い、ち……？」

自分の声がみつともなく震えている。それを気にする余裕もないほどに、鈴は目の前の人物に全神経を傾けていた。

「……鈴」

ためらう様に人影が動いた。低く発せられた声も、行燈に照らされた茜色に染まる顔も、まぎれもなく鈴の知っているきだった。

(幻覚を、見ているのだろうか)

咄嗟に思い付いたのはその事だった。鈴を油断させるために菊間がつくりだした幻覚なのかもしれない。

しかし前の前で苦しそうに顔を歪めているきは、鈴の知っているきでしかありえなかった。

また一步、きが近づいてくる。

「……こないで……」

頭の中で疑問がぐるぐると渦巻いていた。

(本当にこれはきのなの？ 本物のなの？ 本物ならどうやってここに？ どうしてここに？)

鈴の声にきはその場で足をとめた。その事にほっとする。

「本当に……本当にきのなの」

信じられない。でも信じたい。

本当に目の前の人物がきであるなら、今すぐにでもその胸に飛び込んでいきたい。たとえその瞬間に心臓を一突きにされようとも、きの胸で果てるならそれでよかった。

鈴が刺すように見つめるその中で、そうだ、というようにきが微笑んだ。

言葉ではなく笑顔で肯定する。それはいつものきのの癖だった。

「い、ち……！」

手から懐刀が滑り落ちてかたんと音をたてる。

震える足取りで、必死にきの元へ歩み寄る。両手を伸ばして触れ

ようとする前に、逆にきにすっぽりと全身を包まれていた。

きの広い背に腕を回しながら、鈴は日向のような、土臭い暖かい匂いを胸一杯に吸いこんでいた。

「き、き！」

目の前の感触が、存在が嘘じゃないように、確かめるように鈴は何度も名前を呼んだ。それに応えるように同じ数だけ鈴の名前が呼ばれる。

「き……！」

痛いくらいにきつく抱きしめられて、息もできなくなる。それでもその痛さがどうしようもなく嬉しかった。背中にまわした手に力をこめる。嬉しさに瞳が潤んでいた。

「無事で、よかった……」

苦しそくに吐き出されたきの言葉に、鈴が顔をあげた。灰青の瞳と鈴の瞳がぶつかつて、その近さにまた頭の中が熱くなってくる。

「どうして……どうしてここに」

「ある人に聞いたんだ。鈴が……鈴が危ないって」

言いながら、きは鈴の頭ごと胸にきつく抱えた。頬を押し付けた胸から、きの大きな心音が伝わってくる。

（籐真だわ）

すぐに分かった。きの元にたどり着けて、そしてきの存在を知っているのは籐真しかない。

（なんて、なんて危険な事を）

敵に情報を漏らした事がばれてしまえば籐真の命は危ない。けれどそこまですて鈴を助けようとしてくれた籐真の気持ち痛みほどに嬉しかった。

「大丈夫。彼は敵の忍びをおびき寄せるといふ名目で情報を流しているだけ。命までは、取られない」

きなりの気遣いだったのだろう。それでも籐真が全くの無事で済むとは思わないし、きもそうは言わなかった。そしてふと鈴は気づいた。

「おびき寄せる？　じゃあ」

（ここにきが来る事を、菊間様は知っている？）

鈴の不安を読みとったきは先廻りして言った。

「もう間もなくこの藩主と忍びがやってくる」

「そんな」

では、ではきは一体どうなってしまうのだろうか。

いくらきが強くとも、一人で何人もの忍びを相手に無事でいられるとは思えない。ましてやここは敵陣のど真ん中だ。

「逃げて、今すぐここから逃げて」

焦ったように叫ぶ鈴に、きは小さく首を振った。

「今日は、鈴に返しに来たんだ」

返す？　何を？　第一、今はそんな悠長な事を言っている場合ではないと目で訴える鈴に、きの顔がゆっくりと近づいてきた。

前髪を、そつときの額がくすぐる。こんな時に何を、と恥ずかしさどくすぐったさから身を引こうとした鈴をきがぐつと抱きとめた。暖かく合わせられた額から、何か染み出るように鈴の中に伝わってくる。

「あ……」

見る見る目の前に広がっていく光景に、鈴は気がつけば浮世ではない所に立っていた。

柔らかな風が吹く丘に、一人の少女がまっすぐに立っていた。風をうけて緩やかに、長く艶やかな黒髪がたなびいている。強い光を湛えた瞳はどこか遠くをまっすぐに見つめていた。

「撫子！」

撫子は後ろを振り返ると、息も絶え絶えに駆けあがってくる一人の娘を見て微笑んだ。

「美津。そんなに息を切らしてどうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょう。みんな心配してるのよ」
少し野暮ったい形の眉をしかめて美津はたしなめるように、けれど愛情をこめて言った。

(これは……母の記憶?)

二人を見ながら、鈴は自分がゆらゆらと、実態のない風のようにそこにいる事に気付いた。そんな鈴に、二人はまるで気が付いていないようだった。

「風が気持ちいいの」

笑いながら、見て、と言わんばかりにしなやかに手が延ばされる。撫子の笑顔は光を受けて春の女神のように綺麗で、暖かく、そして力強い生命に溢れていた。

少女の真実

撫子は、驚くほど激しい少女だった。

少しでも楽しい事があれば腹のそこから大きな声で笑い、嫌な事にはどんなに頼まれようとまんとして首を縦に振らない。

菊間の父、菊臣がその強情に困り果てたのは一度や二度じゃなかった。

「頼むよ。また占ってくれ」

「嫌よ。そのせいでまた人がたくさん死ぬんでしょ」

つんと顎をそびやかし、腕をくんで撫子はいべもなくその頼みを断った。

（知っていたんだ……自分の占のせいで、人が死ぬ事を）

美津から話を聞いた時はつきりもつと無垢な少女なのかとばかり思っていた母は、実際には自分の力がどうという事をもたらすのか知っていた。

けれど頼みを一蹴にされた菊臣も、ただ困り果てるだけではない。「そうだ。けれど撫子が占ってくれなければ、もっとたくさん、そして勝亦の人間が死ぬことになる」

ぴくりと撫子の肩が震えたのが分かった。それでも強情に顔をそむけたままこちらを見ようとはしない撫子に、菊臣はさらにゆっくりと追い打ちをかける。

「その中には、美津や、私たちの家族も含まれている」

撫子の瞳が激しい怒りを伴って菊臣を見た。

「ずるい人！ 家族を持っているのは、勝亦の人達だけじゃないのよー」

しかしその言葉が撫子を大きく動かしたのは間違いなかった。乱暴に立ちあがると、部屋から出て行くこうとする。

「占ってくれるのか」

菊臣の言葉に憎々しげに撫子は振り向いた。

「占うわよ。その代わり勝亦の人は誰も死なせないで！ 相手の人達もなるべく殺さないで！」

その願いが聞き届けられる事はないと知っていた。それでも撫子は言わずにはいられなかった。

「私の占のせいで人が死ぬ。……もうたくさんよ」

悔しそうに唇を噛みしめて、それからきつと面をあげる。鋭い眼差しに宿っているのは気の強い少女ではなく、絶大な力を持った巫女の光だった。

（母は、力を疎んでいた……）

思ってもみなかった事実、鈴の目の前が大きく揺れた。

それでも撫子は菊臣を嫌っているわけではなかった。むしろ父親に懐く娘のように、親愛に近い情を見せる事が時折ある。それだけではなく、撫子の中に嫌いな人という概念はなかった。それはあの菊間に対しても同じで、若干鬱陶しがりながらも、それでも聞き分けのない弟の相手をするように接していた。

ただ一人を除いては。

「撫子様、菊間様がお呼びです」

「馴れ馴れしく話しかけないで」

嫌悪を隠す気もなく、ありありと顔に浮かべて撫子は言い放った。冷たく言われた青年は、整った眉をかすかにしかめただけで、むっつりと言り返す。

「しかし、そう伝えるよう言われましたので」

「じゃあ他の人に伝えさせて」

鼻面を打たれるようにぴしゃりと返される。青年は気持ちを無表情に押し隠したまま、静かにその場から立ち去った。

唯一、撫子はこの青年だけはおぞましい毛虫のように毛嫌いしていた。青年の消えた部屋の中を見渡して、それでも眉はきつくしか

められたまま大きいため息をつく。

「撫子、どうして勝也の事を嫌うんだ。あいつはいい奴だぞ」
しばらくしてやってきたのは、菊間だった。

（この人が、菊間様……？）

一目見て、その違いに驚いて鈴はまじまじと見つめた。

今の菊間とは違い、この頃の菊間は随分とほがらかな雰囲気をして
いた。顔も少しふつくらとしているし、何より目は細いままでも、
その瞳に優しい光を湛えている。

それは今の姿と比べると、あまりにも違っていた。

（母が、この人をあんな風に変えたの？）

決して変えようと意図して変えたわけではないのだろう。分かつ
ていても、その影響力の大きさが怖かった。

「それでもあの人は嫌いよ」

目の前では撫子が冷たく言い放っていた。

やれやれというように菊間が眉を八の字に下げた。

「本当に勝也の事だけは嫌いなんだな。他の女子はみな勝也の事が
いいと言うのに」

「他の子は他の子よ。私はあの人が嫌い。なんといわれようと、大
嫌いな」

撫子は頑なだった。その横顔を見ている菊間の顔に、ほんの少し
だけ喜びが広がる。けれどすぐにそれに気付いて菊間は顔をただし
た。

「どうだろう、今度白百合の群生を見に行かないか。いいところを
みつけたんだ」

その言葉にぱっと撫子の顔が輝いた。先ほどの嫌悪などもう忘れ
てしまったかのようだ。

「いく」

「なら今度、握り飯を持って一緒にいこう」

菊間が嬉しそうに笑った。それは、赤子が母親に見せる笑みのよ
うに嬉しさと信頼と、愛しさに溢れていた。

「あ、でも」

撫子の綺麗な眉が片方だけいびつに歪められる。

「あの人は連れてこないで！」

菊間はやれやれと肩をすくめ、愛おしそうに撫子を見た。

「それは無理だよ。勝也は私の側近であると同時に懐刀でもあるんだ。主を守る刀が常に近くに控えていないでどうするんだ」

「では絶対に姿を見せないようにして」

「わかったよ」

二人のやりとりを見ながら、鈴はどうして撫子が勝也を、やがて鈴の父親になるだろう人物を毛嫌いしているのか分からなかった。照れ隠しにしては、あまりにも激しく、徹底的な嫌い方だった。

そんな鈴の疑問が晴れることなくゆるゆると月日は流れ、最初見た時よりも更に撫子は成長していた。あどけない少女から美しい娘へ、平らだった胸はなだらかな曲線を描くようになり、ただでさえ整っていた顔にかすかな色気が加わってますます人を惹きつけるようになっていた。

けれど同時に、この頃の撫子は体調を崩す事が多かった。

「う……っげえ」

多くあるうす暗い蔵の一つで、人目を忍ぶように撫子は血反吐を吐いていた。びしやりと飛び散った液体の中には、血以外の物はほとんどまじっていない。

苦しそうに体を震わせながら、手の甲で大きく口を拭う。立ちあがるうとして揺らいだ体がかたりと積み上げられた荷にぶつかつた。「誰かいるのか」

外から聞こえてきた声に撫子の体が強張った。そのまま黙っていると、恐る恐る蔵の戸があげられる。差し込んだ明かりに目を細めると、ぼんやりと輪郭が浮かび上がってくる。

「撫子様？」

勝也の姿を目でとらえて、撫子は眉をきつくしかめた。よりによってこの男に、と思っているのが鈴にすら丸わかりだった。

勝也は地面の血と、撫子に気がついて慌てて中に入ってくる。

「どうしたんだ！」

「なんでもないわ」

「なんでもないわけないだろう！ こんなに血を吐いて」

驚きのあまり言葉づかいを忘れていたようだった。駆け寄ってくる勝也に反抗するように撫子はふいと顔を逸らす。お前には絶対に言うものか。そんな強い意思を感じて、勝也も苛立ち始めたようだった。固く強張る声で言う。

「俺に話せないのならいい。菊間様にご報告するまでだ」

「やめて」

はじかれたように撫子が勝也の腕をつかんだ。

「お願い、誰にも言わないで」

焦った真剣な瞳がまっすぐに勝也の瞳をとらえる。

その時鈴は初めて勝也の顔をしっかりと見た。硬質でしなやかな撫子の髪と違って、やわらかそうな、日にすけると茶色にも見える黒髪。少し色素の薄い、黒茶色の瞳。青年と言うにはいささか甘い、けれど端正な顔立ち。

（この人が、私の父）

どこかきに似ていると思った。弓なりに伸びた眉や、淡い光を湛えた瞳の雰囲気が、真剣な顔をしている時のきに似ていると。

「よくある事なのか」

勝也は地面の血を見て言っていた。

「……最近、少し多いだけ」

視線を地面に落して、言い訳のように撫子が呟いた。

こここのところ、撫子は力を使うたびに激しく血反吐を吐くようになっていた。それは大きすぎる力の代償として撫子が背負い始めたものだった。

その事を知られたくなくて、いつも一人でひっそりと隠れて吐いている。飛び散った血の後始末を自分でしながら、私はあと何年もつのだろうと呟いているのを鈴だけは見ていた。

「……ここで、まっっている」

立ち去ろうとする勝也を慌てて撫子が引きとめる。

「お願い、誰にも」

「言わない。手拭を濡らしてくるだけだ」

無表情に言い放った勝也を、茫然と撫子は見ていた。

やがて戻ってきた勝也は、言葉通り濡らした手拭いを持って撫子の汚れた手や口の周りを清めていく。

「い、いいよ……。自分でする」

恥ずかしがって手を引く撫子の手を、無言のまま勝也は拭きつづけた。汚れた面を丁寧に折り返して、まだ清潔な面で撫子の口元を拭っていく。勝也にじつと顔を見つめられて、撫子の頬が紅色に染まった。

「どうしたのか？ 具合が悪いのか？」

目ざとくそれに気付いた勝也が、けれどその意味には気付かずに聞いてしまう。撫子がかつと頬を赤らめて勝也の手をはじいた。

「貴方なんか嫌い！」

何度も聞きなれたお馴染みの台詞だった。普段だったら勝也は何も言わずに聞き流す。だが今はそれどころではなかった。

「お前が俺を嫌いなのは分かっている！ 今だけ我慢すればいいだろう！」

「そういうところが嫌い！ 大嫌いよ！」

押しかけて外に出ようとする撫子の腕を勝也が掴んだ。

「その姿のまま出て、ばれてもいいのか」

一瞬体が固まって、それから悔しそうに撫子が引き返す。勝也が再び手拭で拭き始めると、嫌々ながらも黙ってされるがままになっていた。

「嫌いよ……貴方なんか大嫌い」

今にも泣きだしそうな撫子の声に、勝也は聞こえないふりをした。けれど撫子の声は止まらなかった。

「貴方はいつか私を連れていくんだわ。そのせいで私たちは死ぬことになるのよ」

その言葉にはさすがの勝也も聞き捨てがならなかった。

「連れて行かない。大事な巫女姫を俺が連れていくわけがないだろ」

「いいえ、それでも貴方は私を連れていくわ」

「それなら撫子がついてこなければいい」

その言葉に撫子が黙った。不思議に思った勝也が見上げると、撫子の濡れた瞳とぶつかつた。ゆらゆらと、淡い光を湛えながら波面のように揺れている。勝也の心臓が大きく震えた。

「泣くな」

咄嗟に撫子の頬に手を伸ばしていた。

「泣かないわ」

言いながら、大きな涙が一粒、撫子の目から零れた。

それから二人は秘密を共有した。撫子は必ず吐く直前になると、どこからか勝也の居場所を見つけ出して鋭く目配せをした。そうすると勝也も静かに目を伏せただけで、必ず隠れて吐いている撫子を見つけ出してくれる。

それは逢引きというにはあまりに鋭く、そして凄惨な現場だった。

「うっ……げほっ」

体内の血液が全て流れ出ているのではないかと思うくらいの血反吐が次から次へと溢れ出て来る。そのままその中に突っ伏してしまふいそうになつた撫子を勝也が抱きとめた。

「服が汚れる……」

撫子が朦朧とした意識で呟いた。

「いいんだ。後で洗えばいい」

しばし二人はそのまま抱き合った。自分とは違う暖かい体温に包まれて、撫子の目に涙がにじんでくる。

「……本当に、菊臣様達に言わなくていいのか」

「いいのよ。言ったところでどうしようもないもの」

勝也が自分の心配をしてくれている。それだけで撫子が嬉しかった。今やもう、撫子の気持ちは隠しようのないものになっていた。けれど気付かぬふりをして、撫子はその気持ちに固く蓋をして閉じ込める。

「けど、このままじゃ撫子の体が」

「平気よ。苦しいけど、死ぬほどのことじゃないの」

「少なくとも今は。」

撫子が飲みこんだ言葉を鈴は聞いた気がした。

「それよりも貴方は早く行った方がいい。菊間が探しているわ」

その言葉に二人の間に重苦しい沈黙が流れた。

撫子の事に関して人一倍敏感な菊間は、撫子の体調の変化に気がつきながらも、その何倍も強い気持ちで二人の事を疑っていた。

穏やかだった瞳には嫉妬と猜疑の光が浮かぶようになり、事あるごとに勝也につらくあたるようになっていた。

「……先に戻っている。何かあったら呼べ」

いつものように濡らした手拭いを撫子の手押し付けて、勝也はその場から立ち去った。

冷たい手拭でゆっくりと口を拭う。勝也が握っていた部分だけがかすかに暖かくて、撫子はそっとそこに唇を落としていた。

終息

「撫子、どこに行っていたんだ」

帰って来た撫子を呼びとめたのは、顔を曇らせた菊間だった。

「厠よ。そんな事女に言わせないで」

いつもなら照れながらごめんと謝る菊間は、その日はじっとりとした目で撫子をねめつけながら黙ったままだった。

（菊間様は、感じていている）

撫子と勝也の変化に。鈴は心を痛めた。確実に二人がこの村を去る日が近づいている。それを感じているのは菊間も同じだった。

「……撫子、私の妻になつてくれないか」

たまらなく甘い言葉のはずなのに、菊間のほの暗い水の底のような瞳が、どこかそれを気持ち悪いものにさせていた。せめてもう少し、以前の朗らかな菊間が言っていた言葉であれば撫子の気持ちは変わっていたのかもしれない。けれどそれは既に失われ、そして永遠に帰ってこないものだった。

「厠の話のあとに、こういう話する？」

なるべくおどけて見せても、菊間はにこりとも笑わなかった。しようがなく撫子は大きいため息をついた。

「……私は巫女よ。貴方の妻どころか、誰の妻にもなれないのは貴方が一番知ってるでしょう」

「勝也の妻にもか」

不快を隠すことなく撫子は眉間に皺をよせた。

「何度言えばわかるの。私はあの男が大嫌いなものよ」

「嫌いという事は裏返せば関心があるという事だ」

正論だ。思わぬ反撃に撫子が面白がつて目を見開いた。それでも菊間はどんよりと、通夜のような声音で喋りつづけた。

「いつか、いつか勝也が撫子を連れて私の目の前から消えてしまふ気がする。その時は私はどうすればいいんだ撫子」

さすがのように手が伸ばされる。以前だったらそんなこと、と鼻で笑い飛ばしていたのに、今はもうそれを笑い飛ばせる程馬鹿げた話ではなかった。撫子が何も言わずに黙っていると、握られていた手が強く引つ張られて体ごと菊間に抱きしめられた。

「撫子を他の誰かに渡すくらいなら、私のものにする。力がなくなつたつていい。撫子を私の妻にして、一生大切にするから」
頬に菊間の唇が触れた。

「や、やめて。冗談でもそういう事はいわないで」

「冗談ではない。撫子が欲しい。私だけのものになりたい」

熱く湿った吐息が撫子の耳にかかった。菊間は本気だった。そのまま畳に押し倒されて、菊間の体の重みに撫子が悲鳴をあげた。

「撫子、撫子……」

上ずつたように名前が呼ばれて、菊間の手が撫子の体を這いまわる。

「やめて……！ やめなさい！」

次の瞬間菊間の体は大きく吹き飛ばされて壁に叩きつけられていた。人形のように力なくずるとその場に菊間がへたりこむ。

（力を使つたんだ）

鈴はごくりと息を呑んだ。鈴が使えなかった、自分の身を守る力。それを撫子は使っていた。

けれどその代償はすぐに帰って来た。

逃げるように菊間から離れた後、撫子は先ほど吐いていた蔵にかけこんでもう一度大きく吐いた。砂をかけてごまかしたばかりの地面にまたもや黒い水たまりが広がっていく。

もう、限界だ。

撫子の叫びを聞いた気がした。

もう、ここに留まっていることも、気持ち隠し続ける事も、限界だ。

急速に物語が、そして撫子の命が終わりに向かっていているのを鈴は感じていた。

十六夜がためらうように揺れている、美しい夜だった。日中の暑さが嘘のように、窓を開けた室内には涼しい風がゆるやかに通っていく。

勝也はふと、人の気配を感じて目を覚ました。こんな時間に一体何だ。

醒めきっていない目をこすりながら室内を見渡すと、月を背に撫子が静かに立っていた。

「撫子……？ どうしたんだ、こんな時間に。また具合が悪いのか？」

勝也が問いかけても、撫子は何も答えなかった。またあの時のように、濡羽色の瞳が、妖しい光を湛えて勝也をじっと見つめている。一瞬、くらりと空気に酔ったような気がして、勝也は寝汗に濡れた額を拭った。

「立ってないで、こっちに来い。手当てをするから」

そこでようやく、撫子はふっと視線を落とした。そして。

すると、滑らかな上衣が撫子の白い肌を滑り落ちていくのを勝也は息を呑んで見つめていた。

「撫、子」

「抱いて」

一糸まとわずに、露わになった撫子の肌が月明かりを受けて仄明く輝いている。それは月の女神が部屋に舞い降りたようだと思っは思った。

「……駄目だ、そんな事出来るはずがない」

「いいえ、私には隠せないわ。貴方は私を抱きたいと思っているでしょう」

臆することなくまっすぐ言われた言葉に、勝也の方が恥ずかしさに顔をそむけた。

「……それは、俺だって男だ。抱きたくないなんて言ったら嘘にな

る。でも撫子、君は」

「でもなんてないのよ」

気がつけば、すぐ目前まで撫子が迫ってきていた。目の前に浮かぶ白い乳房が目に入って、勝也は慌てて目をそらした。

「駄目だ、撫子」

けれどその声は頼りなく揺らいでいた。撫子の顔にほんの少しだけ嬉しそうな色が浮かぶ。

「駄目じゃないわ。私がいいと言っているの」

「それでも、だめなんだ。撫子、君は勝亦の大事な巫女姫なんだ。勝手にそんな事を決めてはいけない」

なけなしの理性を振り絞って勝也が抗った。勝亦の名前に僅かに撫子の顔が曇る。

そのまま黙ってしまった撫子の顔を、勝也はそつと盗み見た。

無表情なその顔に、けれど似合わぬ大きな涙が筋を描いていた。

「撫子……」

思わず手を伸ばしてしまいそうになり、それからひっこめた。ここで触れてしまえば、もう二度と後戻りはできない事を勝也は知っていた。

「……どうせ、貴方が私を抱かなくても、もうすぐ私は散らされる」
自嘲するでもなく、嘆くでもなく、淡々と撫子は言った。

「どうして」

「もう力がないのよ」

当たり前のように言う。

「正確には力に耐える私の体がもうもたないの。菊間はその事に気づいていて、私が諦めるのを待っている。もう、何度も襲われかけたわ」

初めて聞く話に勝也が大きく目を見開いた。菊間が以前から撫子に恋をしていたのは知っていた。けれどあのほがらかだった主がそんな風に女を手籠めにしようとするなんて。

「散る前に、貴方に抱かれたかった」

小さな声で呟いた本心に、勝也は胸を打たれた。けれどここで手を伸ばしてはいけない。伸ばしたら、撫子の貞操だけじゃない、二人の全てを巻き込んだ取り返しのつかない事になる。

撫子は静かに立ちあがった。

「無理をいって、ごめんなさい」

裸のまま、ゆっくりと窓の方へ向かう。勝也の部屋は城の一角にある。窓の外は地面から遠く離れていた。

「どこにいくんだ」

ふとその後ろ姿が今にも消えてしまいそうな気がして勝也は思わず声をかけていた。

「部屋に戻るだけよ」

振り向かずに撫子が言った。

嘘だ、と勝也は思った。理由はわからない。けれど撫子のなだらかで美しい、真っ白な背中から強い拒否を感じた。生きる事に対する、強い拒否を。

もう抑える事ができなかった。勝也は跳ね起きると撫子の体を抱きしめた。花のような甘い匂いが勝也の鼻をくすぐる。腕の中で撫子が驚いているのがわかった。

「死ぬな」

それだけを言った。

「……どうして、わかったの？」

そう聞かれても明確な理由なんてなかった。ただそう感じたただけだと言ったら、撫子は泣きながら笑った。

「勝也はいつもそうね。他の誰にも気づかない事に、貴方だけいつも気づく」

ゆるゆると撫子の手が勝也の腕に触れた。

「私、ここに残っていればあと十年は生きられるわ」

月に語りかけるように、まっすぐに夜空を見上げて撫子が言う。

「でもね、その十年が幸福だとは私、どうしても思えないの。だって私の隣には貴方がいないもの」

撫子を抱く勝也の手に力が籠った。

「巫女姫としての私はもうすぐ死ぬわ。その後に貴方が私の傍にいてくれないなら、もう生きる意味なんてないのよ。それなら今命を絶つても、同じ事」

撫子はもう、疲れ切っていた。

巫女姫としての自分。たくさんの命の行方を握る自分。その代償に日々蝕まれる体。長くない先に怯えながら暮らす日々。そして。

「もう、兄上からの愛にも応えられない」

勝也が目を見開いた。それは、つまり

「私は菊臣様の庶子よ。お父様は決してその事を言うなとおっしゃったけれど。だから、菊間は私の兄という事ね」

(兄妹……)

勝也だけでなく、鈴までもが息を呑んだ。

「それを、菊間様に告げてしまえば……」

「信じないわ。いえ、信じても認めないまま、兄妹としての禁忌を犯そうとする」

それは勝也ですら、十分に想像し得る事だった。最近の菊間の撫子に対する執着ぶりは常軌を逸していた。

「……最後に、貴方が追いかけてきてくれて、嬉しかった。もう思い残すことはないわ」

そっと、撫子は勝也の腕を押した。離れて、と言わんばかりに。けれどそれに逆らうように勝也の腕に力がこめられる。

「……生きよう」

勝也が言った。

「撫子の予言通り、俺は撫子を攫っていく。でも死ぬためではない、生きるために攫って行くんだ。一緒に生きよう、撫子」

撫子が驚いて振り返った。その柔らかな唇に、勝也の唇が重なった。

(予言の日が来た)

静かに重なる二人を見ながら、鈴はこの後二人に訪れる運命を嘆

かすにはいらなかった。

明日の話をしよう

月夜にまぎれて撫子と勝也は勝亦藩から姿を消した。残していく全ての人達に心の中で詫びながら、それでも目の前の愛しい人を手離す事は出来なかった。

二人は人目を避けて、人里に近い山の麓でひっそりと隠れて暮らした。勝亦にいたころとは全く違う原始的で不自由な、けれどこの上なく幸せな生活に撫子も勝也も心の底から満たされていた。

それに、日々の生活を営む程度になら、力を使っても代償が返ってこない事を知って撫子も勝也も喜んだ。

やがて野風が気持ちのいい春の日に藤が生まれ、その翌年の、春が訪れたばかりのまだ肌寒い日に続けて露が生まれた。人間離れした不思議な外見を持つ子供が二人も生まれた事に撫子は随分戸惑ったようだったが、それも勝也の穏やかな態度にすぐに心がほぐれていくことになる。

そしてしばらく間があいてから、撫子は鈴を身ごもった。

本格的な寒さが訪れるようになり、山の麓では早くも雪が舞うようにちらつき始めていた。体を冷やさないように勝也に渡された衣を分厚く着こみながら、まだ芽吹いたばかりの命を、愛おしそうに撫子は撫でていた。

とその時、鈴が転がるように軽やかで心地よい響きの声が撫子に語りかけた。

『かあさま、わたしをころして』

撫子はびっくりして辺りを見渡した。けれど藤も露も、今は勝也と一緒に外に遊びに行っているはずだった。

もしかやと思ってお腹に手をあてて語りかけてみる。

「貴方なの？」

すぐに返事が返ってきた。

『おねがい、わたしをころして』

かわいらしい声で、恐ろしい事を頼むその声に撫子はふっと笑みをもらした。

「どうして？」

『わたしが生まれたら、かあさまととうさまはころされる』

幼いなりに、切羽詰まった声だった。

それでも撫子は笑みをくずさなかった。

「しっている」

『なら、どうして』

優しくお腹をなでながら、撫子はまだ見ぬ娘に優しく語りかけた。

「それでも貴方の顔を見たいからよ」

声はそれ以上聞こえてこなかった。けれどお腹の中の子が、ほっと安堵しているのが撫子にはわかっていった。

「貴方は何も考えず、ただ健康に生まれてきて。それだけがかあさまの望みよ」

子守唄をうたう様に、ゆっくりと撫子は喋った。

「撫子ー」

外で勝也の楽しそうな声が聞こえる。呼ばれて撫子はゆっくりと立ち上がった。

変化は藤を産んでからすぐに訪れていた。

以前使えた力の半分も使えない。そしてそれは路を産んで、更に加速する。

「きつと、藤と路に力を譲ってしまったのね」

複雑そうに二人の娘を見つめて言う撫子に、勝也が何気なく言った。

「そうだね。あげてしまえばいい」

あまりにも軽い調子で言うものだから、撫子は拍子抜けしてしまった。

「あのね、私も一応巫女姫だったんだけど」

「でも今は俺がいるだろう。力なんか藤と路にあげてしまいうくらいでちょうどいいんだ」

藁がさを編みながら当たり前のようにそう言ってくれる。その言葉と言う事が他の人にとってどんなに難しい事なのか、きつと勝也は知らない。心にお湯を注いだようにあたたかく満たされていく。撫子は我慢できずに、勝也に腕を伸ばした。

「言わなければ、ね」

幸せな思い出に浸りながら撫子は呟いた。

最後の子を産めば、きつと撫子の巫女としての力は完全に無くなる。けれど大事なはその事ではない。最後に見た、二人の死の予言を言わなければ。

「鈴を産んですぐよ。兄上にここが見つかるわ」

勝也は神妙な顔をしていた。

「今から逃げたとしてもすぐに見つかる。もう私には姿を隠していただけるだけの力が残っていないの」

撫子の手を勝也が掴んだ。ゆっくりと見上げると、勝也の色素の薄い瞳と目が合う。

「いつ、子供の名前を決めたんだ」

予想していなかった質問に、撫子が変な顔をした。

「俺は、また”ふ”ではじまる草花の名前を考えていたのに」

「そんなことにこだわっていたの」

盛大に呆れた。呆れたと同時に笑いが零れた。撫子だって、死の予言を言うのにいつの間にか随分緊張していたのに、勝也はあつという間にそれを吹き飛ばしてしまう。

「大事な事だ」

「だめ。この子は鈴よ。だってお腹の子がそう言ってるんだもの」
本当に？ と疑わしげな目で見つめながら、それでも勝也は諦めたようだった。

「その子が言うならしょうがないな」
撫子は笑った。

いつか来ると分かっている終わりの日。巫女姫の撫子ならともかく、ただの女になった撫子と勝也が藩から永久に逃れられるとは思っていなかった。それを感じていたのは撫子だけではなかった。きっと、勝也も同じ事だったのだろう。感じながらも、その事に勝也が囚われる事はなかった。

「言っておくけど、俺は諦めたわけじゃないからな」

小さな小屋の中で、寒さから身を寄せ合うようにして二人は抱き合っていた。傍らには藤と蔭が重なり合うようにして眠っている。

花卉のように上気して赤くなった撫子の頬を、愛おしそうに勝也が撫でた。

「望みが薄い事くらい俺にもわかる。でも、俺は最後まで撫子と一緒に生きる事を諦めないよ」

勝也のしなやかな強さに撫子の心が痛んだ。

「……貴方は、後悔してないの」

「後悔？ どうして」

驚いたように勝也が聞き返す。

「貴方は、私を連れてくることなく勝亦に留まっていれば、出世して、もつと穏やかな人生が歩めたはずなのよ」

それを脅すようにして奪ってしまったのは他ならぬ自分だった。撫子は今の生き方以外に道なんて最初からなかったと思っている。でもそれに勝也を巻き込んだ罪悪感だけは、いまだに残っていた。

「それを俺が望んだと思うのか？ たとえ、あの日の夜に何度戻れたとしても、何度でも俺は撫子の手をとるよ。命がある限り、ずっと」

勝也の言葉は無造作なのに、いつもどんな砂糖菓子よりも甘くて、撫子の心を狂おしいほどいっぱいに満たしてくれる。それを伝えたくても、きつと撫子には上手く言葉に出来ないだろう。こういう時だけ舌が回らない自分を恨めしく思いながら、でもせめて、少しでもこの気持ち伝われればいいと撫子は心から微笑んだ。

「変な事を考えるとお腹によくない。今はもうおやすみ」
愛しい人よ。

勝也の瞳が最後にそう語ったのを、鈴も感じ取っていた。

まだ梅雨の匂いがかすかに残る、雨上がりの朝だった。大きな産声をあげて鈴がこの世に生まれおちた。人里から助けとして呼んできた産婆が血に濡れた鈴の体を清めている横で、撫子が額を汗でぬらしながら幸せそうに微笑んでいる。勝也は不思議そうに鈴を見つめている藤と膝を膝に抱えて、必死に涙をこらえているようだった。
(うまれて、しまった)

嬉しいのに悲しい。泣きたいような茫然とした気持ちで鈴はそれを見ていた。

(すぐだと言っていた。私がつまれて、すぐだと)

「鈴の瞳は、私と一緒にね」

撫子の嬉しそうな声が聞こえた。

生まれてすぐにはっちりと開かれた瞳は黒々と濡れたように輝いている。

「次は、俺に似た男を産んでくれ」

撫子の腕に抱えられた鈴を覗きこんだ勝也の黒茶の瞳が、悔しそうに細められた。

「そうね……そろそろ男の子も悪くなくかもしれない」

言いながら、けれどそれが叶う事のない夢だと分かっている。分

かっついていても願う事はやめられなかったし、やめるつもりもなかった。

「明日の話をしよう。命の続く限り」
それが二人が交わした約束だった。

しとしと土を濡らす雨音の向こうに、乱暴にぬかるんだ地面を蹴りつける馬の蹄の音が聞こえていた。ふ、と笑うような短い吐息が撫子の口から漏れた。

「藤、躊躇。鈴をお願いね」

優しく藤の腕に鈴を渡すと、途端にそれまで子供らしい笑みを浮かべていた二人の表情が消え去った。

藤色と若葉色の瞳をそれぞれ大きく見開いて、けれど人形のように硬く感情のこもらない顔で二人は静かに撫子から離れた。藤が、鈴の脛から何かをつまみあげる。

勝也の腕がそつと撫子に回された。嗅ぎ慣れた勝也の鼻にも似た温かい匂いを撫子は深く吸い込んだ。

静かに勝也の顔が近づいてきて、二人は慈しむように唇を重ねた。
「……明日はもっと、たくさん口づけをしよう」

勝也の温かい唇が撫子の頬に触れた。
ふわりと笑みが零れた。

戸が乱暴に開かれる。飛び込んできた菊間は寄り添う二人を見て、大きく目を見開いた。刀が抜かれる。庇うように勝也が撫子に覆いかぶさった。辺り一面を染め上げる深紅の飛沫が鈴の視界を覆った。
それから。

撫子は目の前で既に息絶えた夫の顔を見つめていた。
苦悶に歪んだ、けれどどこか穏やかなその死に顔に手を伸ばしたかったが、もう手はびくりとも動いてくれなかった。

それならせめて、と思い通りに動かない頬をひきつらせるようにして撫子は微笑んだ。

明日は、私から口づけをするわ

母の音が、聞こえた気がした。

二人の巫女

鈴の頬を、はらはらと止まることなく涙が伝っていた。そして驚くことに、額をつけたままの壱の瞳からも静かに涙が流れていた。

「壱……」

そっと手を伸ばして壱の涙を拭う。

壱が目を瞑った。そこからまた溢れ出た涙がゆっくりと鈴の指を濡らしていく。

「壱も、見ていたのね」

今、鈴と一緒に、この記憶を見ていたのだろう。美津から聞いた話とはところどころ違っていた、けれどこれこそが本人達が見た真実の記憶。

「鈴」

鈴の指を壱の手が掴んだ。ゆるゆると、壱の唇に自分の指が触れるのを鈴は感じていた。

「この記憶を、鈴の姉達から預かっていた」

鈴は驚いて壱を見つめた。

「姉様から？」

「どうやって、と言おうとした鈴の口を塞ぐように、鈴の唇に壱の指が触れた。」

「続きがある」

「言っや否や、鈴の目の前が暗闇に包まれた。」

暗闇の中で光る瞳が、月明かりに照らされた澄沢村を上から見下ろしていた。ゆっくりと視線を巡らせ、瞳の主は何かを探しているようだった。その瞳を通して、鈴は外を見ている。

（これは）

考える前に体が動いていた。体はまっすぐに、藤と蔭がいる屋敷

へと向かっている。その心の中に、何の感情も宿っていない事に気づいて鈴は驚いた。

(壱の瞳だ)

あの日の夜、壱が見た記憶。

知らず心が震えていた。

(大丈夫、信じている)

壱の目を通して見える澄沢村を、鈴はきつと睨みつけた。

今や壱の体は、姉達の寝所のすぐ目の前に立っていた。視線が戸ではなく屋根を追っている。上から忍びこむつもりなのだ、と気付いた時には壱の筋肉が飛び上がるために柔らかくしなっていた。その体の軽さに、鈴は思わず感嘆を漏らす。

けれどそこにたどり着く前に、壱に上からすさまじい圧力がかかった。それは澄沢村を取り巻く空気そのものが壱を地面に押し付けようとするような、圧倒的な力だった。

かろうじて体勢を崩すことなく地面に膝をついたものの、力は容赦なく壱を潰そうと重みをましてくる。

「くっ……」

壱の唇からかすかな呻きが漏れた。その途端、壱を取り巻いていた空気の力が霧散したように消え去った。

『正面からいらして』

誰かが直接壱の頭の中に語りかけてくる。歌うような、それでいて地の底から聞こえてくる不思議な声音だった。壱がびくりと肩を震わせた。

(藤姉様の声だ……)

壱は躊躇っているようだった。けれど心を決めたように、ゆっくりと寝所に歩み寄っていく。

慎重に戸を引き開けると、座敷の上で藤と路が並んで深々と頭を俯いていた。

「お待ちしていました」

藤が顔をあげた。

久しぶりに直視した姉の姿に、鈴は息を飲んだ。

記憶の中にある姉達よりも更に美しく、妖しく、文字通り暗闇の中でも全身からほの白い明りを放っている。傍にあつた茜色に燃えるかがり火が、完全に吞まれていた。

「お前が壱か」

藤と同じように白く光を放ちながら、露も顔をあげた。

その時、壱の手がすばやく動いたかと思うと、二本の苦内クナイがまっすぐに藤と露を指指して飛んでいった。

(だめ！)

けれど鈴が目を瞑るよりも早く、音もなくそれは地面にたたき落とされた。壱の眉がぴくりと動く。

藤と露は顔色一つ変えなかった。

「せつかちだな」

露がむっつりと言った。

それに構うことなく、壱は唇を動かす事なく口の中で術を練り上げていた。終わるや否や、見えない蛇のような術が二人に向かって放たれた。

「まあ、お待ちなさいったら」

その一言で壱の術は最初からなかったかのようにあっけなく存在を消し去られた。

ころころと、おかしくてたまらないというように藤が笑っている。二度目の失敗に壱が今度こそ眉をしかめた。同時に自分を殺しに来た忍びを目の前に、どうして笑っていられるんだと壱が思っているのが伝わってくる。それでも壱の目は容赦なく、二人に隙ができるのを探っていた。

「わたくし達、何もただ貴方を入れてあげただけじゃありませんのよ」

「まさか自分でここを見つけたとは思っているまいな？ 私たちがわざと入れてやったに決まっているだろう」

妖しく狐のように微笑む藤の傍で、それを守る不機嫌な狼のよう

に露が目を光らせている。

鈴は驚いた。そんな姉達を見るのは初めてだったのだ。いつも藤も露も、ただひたすらに優しく、母のような慈愛を浮かべて鈴を見ていたから、二人が外の人間に対してどんな態度をとっているのかまるでしらなかつた。

吉は硬く口を閉ざしたままだった。まるで一言口を聞いたが最後、魂をとられると思っっているようだ。

「まあ長話もめんどくさいので手身近に話しますわね、貴方」

「鈴を連れていけ」

藤の言葉を遮るように露が言い捨てた。話の続きを邪魔されてむっとした藤が妹を見たが、露は気にも留めていないようだった。

「鈴とは、誰だ」

そこでやっと吉は言葉を発した。その途端、藤の瞳が獲物をしとめたとばかりに輝きだすのを見て、吉だけでなく鈴までもが身ぶるいした。

「鈴はね あ、露は黙っててちょうだいね 鈴はわたくしたちの可愛い可愛い妹よ。可愛すぎて、一緒に連れて行きたくなくなるほど」

そう言つて笑つた藤は怖い程美しかった。

「でも、連れていけない」

ぴしゃりと露が言つた。

「そう、連れていけないの。それがあの子の幸せじゃないから」
残念そうに藤がため息をつく。

「分かるように話してくれないか」

目の前で繰り広げられる二人の会話についていけないのは吉も同じようだった。露が今にも舌打ちしたそうな表情を浮かべて押し黙り、藤がゆつたりと話し始める。

「簡単な事よ。鈴を連れて、貴方は自分の家に帰ればいい。それだけの事、できるでしょう？」

確かに簡単だ。

けれど吉にはそれを実行する義理はない。

「貴方にしかできないの、お願いね」

壱の気持ちを讀んだように藤が言った。くつと低い笑いが壱の喉から漏れた気がした。

「敵を前に、とか思っているんだろう。私だって本当はお前なんかに任せたくないんだ」

苛立ちを隠しもせず、露が壱を睨みつけた。そんな露をなだめるようにそつと藤の手が露を抱きしめる。

「お願いだから聞き遂げてちょうだいね。わたくし達はもう疲れたの。貴方が来るまでこの狭い村で何年も待ったのよ」

そう言う藤の髪に指をからませながら、露がうつとりしたように目を瞑っている。

それはまるで恋人同士の戯れのようなだった。

奇妙な関係の巫女二人を前に壱は戸惑っていた。しかしその意思は最初にこの村を目に移した時から全く変わっていない。任務を遂行するためだけに何のためらいもなく、狩人が獲物をしとめるよりも無感情にその時を狙っている。

「これ以上この男に話しても無駄だ」

露が静かに目を開けた。

「そうね。私もそう思うわ。どうして鈴がこんな男になんか」

蔑みを含んだ目で藤が壱を見下ろしていた。座っている藤と違って立っている壱の方が視線が高いはずなのに、それは見下ろすとはまかいような瞳だった。見くだして、馬鹿にしているのとはまた違うもの。そもそも人間が虫を見下したりしないのと同じように、藤もまた壱をただ上から淡々と見下ろしていた。

「まあ、いいわ。貴方はちゃんと今見た事を鈴に伝えてちょうだい。それと、これを鈴に返さなくてはね」

ゆるりと、風が舞う様に藤の手が宙を舞ったのと同時に、壱の体の中に何か熱い物が流れ込んでくる。

術をかけられたのかと慌てて胸を抑える壱に、露もめんどくさそうに口を開いた。

「ああ、それからこれも」

今度はひんやりとした何かが入ってきた。

「まあ、それは必要？」

「鈴だけ知らないとか哀想だろう」

「貴方もなんだかんだ鈴には甘いわよね」

「藤ほどじゃない」

見つめ合ってじゃれあいのような囁きを交わしてから、それから二人はまだいたのか、という目できを見た。

その無感情な瞳の冷たさにぞくりときの背筋が震えた。

ここに来て初めてきは悟ったのだ。

二人がきを殺そうと思えば、瞬き一つすらする事なく出来るのだと。

それに気付いた瞬間、きの目の前で火花が散った。

卯の花月夜

「……それから、気がついたら元の場所において、屋敷が燃えているのを見ていた」

ゆっくりと額を離しながら壱が言った。

「殺さなかったんじゃない。殺せなかったただけなんだ」

罪を告白するように、壱が目を伏せた。

分かっていた

壱の記憶とその感情を見た時から分かっていた。それでも。

「私を助けてくれたのね」

まっすぐに見上げると、壱の瞳が揺れた。

正直、鈴にはあの時の壱が自分を助けてくれた方が信じられないでいる。あの時の壱が鈴の存在に気がつけば、ためらうことなく殺すはずだった。

「……何が起こったのか分からなくて、もう一度同じ場所に行ってみたんだ」

答えを教えるように壱が言った。

「もしたらそこに君がいた。……すぐに分かった、君が鈴だと。殺そうと思って構えた時に、君が崩れた屋敷の下敷きになったんだ」
炎の塊が倒れてくる、目の前が茜色に染まった気がして、鈴はそっと目を瞑った。

「放っておいても死ぬのは分かっていた。だから見届けようと、近づいたんだ。もしたら君は、鈴は」

暖かい手が鈴の頬を包んだ。つられるようにゆっくりと瞼を開けると、あの夜見た灰青の瞳があった。

「自分が死にかけてるのに、必死に姉を助けてと叫んでいた」

壱の熱い吐息が鈴の頬にかかる。

「その途端、どうしても見てみたくなかった。目覚めた鈴が、どんな瞳で俺を見つめるのか」

引き寄せられるように鈴の唇に壱の唇が触れた。そのままためらうように一瞬浮かせてから、強く唇が押し付けられる。

何度も、何度も、貪るように口付けが交わされる。熱くあがった息がどちらのものなのか見分けがつかないほどに、激しく唇が重なり合った。

「本当は、すぐに返すつもりだったんだ」

切なく吐息をもらしながら壱は言った。

「でも、段々返すのが怖くなった。返してしまったらきつと鈴はいなくなってしまう。あるべきところに行ってしまう気がした」

「いなくならないわ……」

かすかに微笑みながら、鈴はそつと両手で壱の頬を包んだ。

「私のあるべきところがあるとしたら、それはきつと壱の隣だけなの」

壱の瞳が大きく揺らいだと思った次の瞬間、また鈴の唇は塞がれていた。

「鈴、鈴」

うわごとのように繰り返される言葉を受け止めながら鈴は壱の首に手をまわした。

やがて静かに唇が離れ、震える唇で壱が言った。

「でも、だめなんだ。俺は鈴を怖がらせる事しかできない」

それはあの日の月夜の事を言っているのだろう。

「生きるために人を殺さなくてはいけない。その事に慣れすぎて、鈴を怖がらせた事にも気付かなかった」

つらそうに壱が顔を歪める。

「確かに、怖かったわ」

でも、と鈴はつづけた。

「あの時の壱の心は虚ろだった。そうやって心を虚ろにしていなくて、とても人なんか殺せないでしょう」

壱が目を見開いた。どうしてそれを、と思っているのが伝わってくる。

それでも吉は首を横に振った。

「……それに鈴だけだったら守れる。でも俺には守ってやらないといけない家族がいる」

「知ってる」

優しい吉の弟達を思い浮かべて、鈴は笑みを漏らした。明るくて頼れる睦、生意気だけど本当は優しい響。騒がしくてうるさいけれど、それもまた可愛い雷と風。

吉が鈴の手をとれば彼らが犠牲になる事は分かっていた。だからこそ吉は鈴の手をとれない。彼らを捨てられない。

(そして、捨てさせない)

鈴の瞳が揺るぎない決意を映した。

「そこまでだ」

低く轟くような菊間の声に、はじかれように吉が顔をあげた。

「女に夢中で気がつかなかったか？」 黒衣の吉”と呼ばれた男も、とんだものだったな」

くつくつと喉の奥で笑いながら、けれど菊間の瞳は血走って全く笑っていない。

「紺色の装束が返り血に濡れて黒く見えるから黒衣、か。誰が考えたかはわからないが、いくらそんな男でもこれだけの数を相手には生きて帰れまい」

見ると、菊間の後ろにそびえるように忍びが数人立っていた。吉が鈴をかばうように背におしやり、先ほどとは打って変わって冷たい殺気を放ち始める。

「退路を開く。その間に逃げるんだ」

鈴にだけ聞こえるような小さな声で吉が囁いた。

「言うておくが、これだけじゃないぞ。お前たちを取り囲むように配置してある」

その言葉に無言の圧力を四方から感じた気がして、吉がぐくりと唾を飲んだ。

とその時、吉の手をゆるりとかわして、鈴が吉の隣に立った。

「鈴、危ないから後ろに」

「いいえ」

静かだが、はっきりとした拒否だった。

「なにか申し開きでもあるのか。言ってみる。汚れた巫女め」

菊間の顔が憎悪に歪んだ。

二度も裏切られた。瞳がそう語っていた。

その瞳を真正面から受け止め、怒りに燃えるわけでもなく、悲しみに曇るわけでもなく、そして許しを請うわけでもなく、鈴はただまっすぐに見つめていた。

「いいえ」

あたりに響き渡るような、澄んだ声だった。

「吉」

思いがけず名前を呼ばれて吉が戸惑うように鈴を見る。

「私は、やっぱり貴方と一緒に生きるわ。貴方の隣で、貴方を見て死んでいく」

それは、決意であり、宣言であった。

「だから、貴方が守ろうとするものを、私も共に守っていく」

「どうやって守るんだ。自分の身すら守れない癖に」

あざ笑うように菊間が言った。

「こつするのよ」

鈴が微笑んだ。そして大きく息を吸い込んで、辺りに響き渡る声で朗々と発した。

『誰も私たちを傷つけないで』

それは頭の中から聞こえてくるのに、どこか遠くから聞こえるような気がする声だった。鈴のように高いのに、地響きのように低い。母のような慈愛にあふれているのに、鬼のような残虐さも隠しきれない。

一瞬菊間や忍びたちが警戒したように身を沈めたが、何も起こらないと知るとすぐに体勢を立て直した。

「何かと思えば、そんな子供だまし」

「子供だましかどうか試してみればいいでしょう」

菊間の眉がきつくつりあがった。

「やれ」

本来なら、忍びたちが一斉に鈴達を攻撃するはずだった。しかし忍びたちは木偶の坊のように突っ立ったままで何も起こらない。

「……なんだ？ やれといっているだろう！」

「しかし、体が動きません」

菊間が後ろを振り返って怒鳴ると、忍びの一人が額に脂汗を浮かべながら息も絶え絶えに言った。

「情けない、それなら私自身の手で」

腰にかけて刀を抜こうとして、しかし抜けなかった。刀が鞘に溶接されてしまったようにがちりと固定されて動かない。

「くそ、お前の刀をかせ！」

近くにいた忍びから忍び刀を奪い取っても、結果は同じだった。

刀だけではない、全ての武器が使役される事を拒むように、元いた場所からぴたりと離れない。

「言ったでしょう」

「何をやった！」

憤慨した菊間が大股で近づいてくる。その瞬間すらりとした抜き身が菊間の首に突き付けられていた。鈴が落とした懐刀を、壱が使っていた。

「命令しただけ」

「馬鹿な！」

憤りながらも、首の刃に恐れをなした菊間が一步後ずさる。

「鈴、これは……」

戸惑っているのは菊間やその忍びたちだけではなかった。壱が刃を突き付けながらも困惑を浮かべて鈴を見る。

「姉様達に、返してもらったの」

恥ずかしそうに肩をすくめる鈴を、壱はただただ驚きの目で見ていた。

「姉様達も人が悪いと思う。私からこんな力奪っておいて貴方の事
ひどく言うなんて」

愚痴を言うように、むっつりと言った。

あの時記憶とともに姉達に返してもらったもの。

それは鈴だけが持っている強大な言葉の力だった。いつの間にか
取られたのはわからない。ただ両親が斬り殺される直前に、藤が
そつと鈴の脛から何かをつまみあげていたのを覚えている。大方そ
の時なのだろうと思う事にした。

「動かないでください。私も傷つきたいわけじゃないから」

それからゆつくりと辺りを見渡した。

『藤真、来て』

再びあの不思議な声が発せられる。と思うと、音もなく藤真がそ
の場に膝まづいていた。

「藤真」

鈴は慌てて駆け寄った。その体には拷問の後と分かる傷が幾筋も
ついていた。

「ああ、ひどい」

「鈴、これは」

藤真は驚き、戸惑っているようだった。無理もないと思う。

『傷なんてすぐに治るわ』

見る見る鈴の目の前で、藤真の傷がふさがっていく。驚いて藤真
が立ちあがった。菊間達も大きく目を見開いてそれを見つめている。

「ありがとう藤真、壱に知らせてくれて」

ふわりと鈴の腕が藤真を包んだ。

「私、貴方にひどい事をしていた。本当にごめんなさい」

「……いいんだ。鈴が幸せなら、それでいい」

優しい友の言葉に、ふわりと笑みが零れた。ゆつくりと身を離す
と、鈴はまた菊間を見た。

『藤真を解放して。自由にして』

籐真の瞳が大きく開かれる。

「鈴」

「籐真はここで終わるような人じゃない。忍びを続けるのは貴方の自由よ。戻りたければまたすぐ戻るわ。でも忍びより貴方に合う事があると思う。そうでしょう？ 籐真」

鈴がまっすぐ籐真を見た。その揺るぎない優しい輝きに、籐真がくしゃりと笑った。

「ありがとう、鈴」

にっこりと笑って、鈴は顔をあげた。

『美津様』

待っていたかのように、静かに扉が開いた。

「美津……」

菊間が驚いたように振り返る。

美津は自分がどうしてここにいいのか理解していないようだったが、鈴の姿を見てはっとした。

「無事だったのですね」

瞳を潤ませて、美津は心の底から安心したように呟いた。

途端に鈴の目頭が熱くなる。半ば転げるように美津の元に駆け寄ると、硬く美津の体を抱きしめた。

「美津様、ありがとう……」

美津からもらった懐刀が実践で役に立つ事はなかった。けれど一時でも鈴の心を守ってくれていたのは、間違いなくあの刀だった。

あの刀は、鈴にとって美津が鈴を慈しむ心そのものだった。

「美津様、美津様はどうしたい？」

美津はその問いの意味が分からないようだった。

「ここを出て、好きに生きられるの。美津様さえ望めば」

「……私を呼び寄せた不思議な力は、鈴が使ったんですね」

母が子を撫でるように、ゆっくりと美津の手が鈴の頬を撫でた。それがくすぐったくて、嬉しくて、鈴は笑みをこぼした。

「でも私は、このままここにとどまる事にします。撫子の思い出が

つまった、この城で」

鈴ははっとした。思い返せば、記憶の中で見たあの城は、今鈴が立っているこの城に他ならなかった。そして撫子の間こそ、鈴の母が生前暮らしていた部屋だった。今は一見がらんとした広間にしか見えなかったが、確かにここで撫子が暮らした記憶がある。

「澄沢村にいたのは、最初の数年だけだったのでね」

「ええ……撫子を傍におきたがったのは、菊臣様だけじゃなかったですから」

鈴は無言で、もう一度美津と抱擁を交わした。名残惜しそうに体を離すと、鈴は壱の傍に駆け寄った。

「もう、それをしまつても大丈夫」

そつと促すと、壱は懐刀を静かに鞘におさめた。

「菊間様……いいえ、伯父上」

鈴はまっすぐに菊間を見た。その言葉に菊間が大きく動揺する。

「な、なにを。私はお前の伯父なんかでは」

「いいえ。本当は知っていたのでしょう」

否定しようとして、けれど菊間はそれを諦めた。大きく、疲弊したようなため息がゆっくりと漏れ出た。

「私は、壱と一緒にいきます。もう二度とお会いする事はないでしょう」

「それを私が許可すると思うか」

「思います」

力を使っていなかった。ただまっすぐに、伯父の瞳を見つめながら鈴は言った。

やがて諦めたように菊間が目を逸らした。

「だけど、この気持ちはどうすればいい。狂う程に恋焦がれたこの気持ちは」

『忘れてしまえばいい』

菊間の心を、そつと鈴の声が撫でていく。

『妹に抱える狂う程の恋情も、罪悪感に苛まれて病んでしまったそ

の心も、憎しみも、悲しみも、愛したその人自身も、全て忘れてしまえばいい」

歌うように柔らかく、有無を言わせない力強さがあった。菊間の目から一筋の涙が流れた。

残酷な事をしていていると思った。人を愛する気持ち、愛した人の存在を忘れさせてしまうなど、この上なく残酷なやり方だった。けれどそれが、両親を殺した菊間に対する鈴の報いと、優しさだった。「伯父上はもう、十分に苦しんだ」

その言葉を聞いて眠るように崩れ落ちた菊間を支えたのは美津だった。

「……美津様だけは、覚えていてください。母の事を」

美津と瞳で言葉を交わして、鈴はゆっくりと振り返った。

壱がこちらをじっと見つめている。

急に恥ずかしくなって、鈴は俯いた。

（壱と一緒にいきたい）

この力があれば、それは容易い事だった。けれど今さらになって、怖いとも思う。

（こんな力を持つ私の事を、どう思っているんだろう）

それは奇しくも、以前撫子が抱えた悩みと同じだった事に、鈴が気づくのはもう少し先になってからだ。

鈴が口を開くことができずに黙って俯いていると、ふっと影が鈴を覆った。顔をあげるまえに、ゆっくりと両手が持ち上げられる。

「一緒に生きよう、鈴」

はっとしたように鈴が顔をあげた。目の前の壱は、瞳に優しい光を湛えて鈴を見守っていた。

「……父の、真似をしたわね」

咎めるように言つと、そうだったけ？ ととぼけてから、壱はいたずらっ子のように笑った。

「鈴」

自分呼び掛ける柔らかい声に、鈴は拗ねたように唇を尖らせて

から、ぐいと壱の衿を引つ張った。たどたどしく唇がふれあう。それが答えだった。

「あ、卯の花」

壱に抱えられていた鈴が驚いたように指差した。壱が指差した先を見ると、月明かりに照らされて城の片隅に確かにぽつんと卯の花が咲いている。

「すごい時期外れね」

夏はもう終わりを迎えていると言つのに、一人だけ遅れて咲いているその花は、まるで鈴達を見送る為に咲いてくれているようだと思った。

「見送つてくれているみたいだ」

鈴が思っていたまさにその事を壱が口にして、鈴は目を丸くして壱を見た。鈴が驚いている意味に気付くことなく壱が微笑んで鈴を見返す。

(……分かつてるんだか、分かつてないんだか)

ふ、と笑つて、それから鈴はもう一度壱の衿を手繰り寄せた。

卯の花月夜。月が照らし出す道にたたずみ、卯の花に見守られて、二人の影がそつと重なった。

後日談

厳しい冬が過ぎ、卯の花が咲き乱れる夏先に、二人はひっそりと祝言を挙げた。参列者は吉の家族と、籐真と、それからはるばるやってきた美津だけだった。鈴の晴れ姿に涙が止まらない美津を、籐真が支えるようにして立っている。その前で、二人は夫婦となった。その時鈴が着ていたのは、一度は畳に叩きつけたあの忌まわしいはずの白無垢だった。

「どこかで、伯父上にも祝って欲しい気持ちがあったのかもしいい」

その事を籐真に尋ねられると、鈴ははにかんだように笑った。それを聞いて、籐真は女の気持ちはよくわからない、と言っただけだった。

「でもさ、鈴はその力でどうにかしようとは思わないの？」

「どうにかって？」

すっかり自由の身となって、今は方々を好きに飛び回っている籐真が縁側に腰かけて鈴に話しかけた。鈴はその傍らで僅かに大きくなったお腹をさすりながら幸せそうに聞いている。

「だってその力、文句のつけようがないくらいすごいものだろ。多分、望めば天下もとれると思う」

籐真がそう言うのも無理がなかった。

言葉に出したただけでその通りになってしまう、恐ろしいまでの力。そんな力があると知ったら、世の権力者たちはなんとしてでも手に入れようとするだろう。

けれど鈴はくすりと笑っただけだった。

「いらないわ」

予想通りの答えに、籐真は呆れたように息をついた。

「私はね、普通の娘なの」

愛おしそうにお腹に視線を落としながら鈴はつぶけた。

「人に妬まれたり嫌われたりだってする、ごくごく普通の娘」

強大すぎる力を持つ前も、持った後も、いつだって鈴は普通の娘だった。

泣いて笑って恋をして、命をまっとうする。それだけが鈴の生き方だったし、今も、これからも、その生き方を変える気はない。

「愛する人と、愛する家族。それに愛する友達もいて、それだけで泣きたいくらいに幸せよ」

そう言っただけ微笑んだ鈴を、籐真は眩しそうに見た。

「それにね、姉様達もそういう考えがあって私から力を預かっていてくれたのかもしれない」

「考え？」

籐真が分からないというように片眉をあげた。

「だって、最初からそんな力があつたら、きっと私使っていたわ。

そしたら母さまと同じ事になっていた気がするの。ううん、もっとひどい事になっていたかもしれない」

けれど撫子の事をよく知らない籐真は曖昧に頷いて見せただけだった。

「鈴ー」

「帰ったぞー」

高らかな声をあげて、少しばかり背の伸びた雷と風が駆け寄ってくる。その後ろを追いかけるように響がついてきていた。

「おかえりなさい」

「あ、籐真だー」

「遊べよ籐真ー」

今ではすっかり籐真に懐いてしまった双子を、籐真が早くも両脇に抱えて笑い転がせている。

「秋物の服、さっき睦が受け取ってきたよ」

響がそういうや否や、居間の中にどさりと物を置く音がした。振り返ると睦が疲れたように膝に手をつけていた。

「俺一人に押し付けるなよ。結構重かったぞ」

「武士になろうとしてる人がそれくらいでへばってたら勤まらないよ」

響の言葉に睦がうへえと舌を突き出した。

この秋、睦は武家の一人娘と結婚して婿入りする。前々からひっそりと想いを寄せている娘らしかった。鈴も一度顔を合わせた事があるが、武家の娘らしい、凜とした芯の強さを持つ美しい娘だった。" なんてみんな壱兄なんだろうな"

いつか台所で聞いた睦の言葉がその娘を差していた事に気付いたのはつい最近の事だ。

けれどこうして無事に婿入りするという事は、なんとかその兄に打ち勝つたのだろう。その影に隠された睦の努力を思うと、くすりと笑みが零れた。

「何、また思い出し笑い」

ぱつと頬を赤らめて睦が鈴を見た。相変わらずこういう事には敏感だ。

隠す気もなくくすくすと鈴は笑いつづけた。

「あ、壱兄。頼まれてた筆買ってきたよ」

居間に顔を覗かせた壱に、響が懐からごそごそと筆をとり出した。壱がにっこりと微笑む。

あれから鈴は壱とともにまっすぐ松浦の元へ訪れた。そして籐真を解放した時と同じように、いともあっさり壱を解放したのだ。

もつとも、松浦は壱を手放す事を大層渋っていたが、鈴の力を前に何もできる事はなかった。

今、壱は寺子小屋で書道の先生として日々を営んでいる。

あの壱が先生など勤まるのだろうか、とはらはらして見ていたが、

意外にもあつさりと吉は受け入れられた。それどころか、厳しく言わないのに教え方が分かりやすいと評判にすらなっているようだ。

子供の手をとりながら一筆一筆丁寧に教える穏やかな姿を見るたびに、鈴の心が跳ねあがる。

(いつかこの子にも教える日がくるんだろうな)

我が子に手習いをする吉の姿を想像して、また鈴は微笑んだ。その時。

『かあさま』

春の野に咲く花のように、小さな声が聞こえた。

「あ」

慌てて立ちあがると、吉が顔色を変えてすつ飛んできた。鈴を支えるようにして立つ吉に、そつと耳打ちをする。

「あのね、女の子みたい」

それを聞いて、吉が嬉しそうに、くしゃりと笑った。

昼の流れ星

晴れているとも曇っているとも言えない曖昧な空を見上げながら、
舌は一人ため息をついた。太陽は雲に隠れて見えない。それでも茹
るような暑さの中で、家の中は生気を失ったように暗く、沈んでい
た。

(鈴が帰ってから、どのくらいたった)

考えてもどうしようもないことだった。ただ一日でも早く時が経
てばいいと思う。一日でも時が過ぎて、やがて胸に巣食うこの鈍い
痛みを忘れられればいいと舌は思った。

「……睦のご飯、おいしいけどおいしくない」

「うん、おいしいけどおいしくない」

勢いを失った蝉が気だるく鳴いている中で、眉を八の字に寄せな
がらむつつりと双子がお茶碗のご飯をつついていた。

「なら食べるな」

いつも穏やかな睦が、この日は冷たい声で切り捨てる。双子の顔
がくしゃりと歪んで今にも泣き出しそうになった時、響が慌てて飛
んできて二人を胸に抱えた。

「睦！」

響が非難がましい声で睦を諫める。双子は抱えられるまま鼻をす
んすんとさせて、必死に泣くまいとこらえていた。

「……ごめん」

ぶっきらぼうにそれだけ言うと、睦はまた無言でお茶碗と向き合
った。そんな睦を見て、響が小さくため息をこぼす。そしてちらり
と舌を盗み見る。舌はそれに気付かない振りをして、もくもくと箸
を進めた。

今日も睦のご飯はおいしい。それでもやっぱり、鈴のつくったご
飯ほどおいしくはない、と舌は思った。

「吉兄」

食後に居室で書きものをしてしていると、思いつめた顔をした睦がやってきて膝をついた。ここ数日、何か物言いたげに吉を見ていたから、なんとなく来るのを予感していた吉は、呼ばれると静かに筆を置いて睦の方を見た。

「なんで、鈴を帰したんだ」

まっすぐに問いかけられて、吉もまっすぐに睦の瞳を見返した。

「鈴の仲間が迎えに来たから」

嘘はついていない。例え、その仲間が今までもずっと鈴を迎えに来ようとして、それを吉自身が遮っていたとしても。

「でも、鈴は望んでいなかったんじゃないのか。鈴だけじゃない、吉兄だって、鈴に帰って欲しくなかったんじゃないのか」

睦の声にはかすかな怒りが含まれていた。吉は黙って目を伏せた。「じゃなきゃ、鈴があんな風に俺たちに何も言わないで帰るはずがない」

吉は何も答えなかった。その代わりにふつと微笑んでから、置いた筆を持ち上げて、話はおしまいだ、とばかりにまた書きものを始めようとする。

「吉兄！」

睦が声を荒げた。それでも吉は無視して筆を進める。睦の声が更に荒くなる。

「吉兄はいつも俺たちに何も教えてくれない。いつも一人で背負って、一人で解決しようとする！今回だって何かあるのかは知らないし、言ってもどうしようもないことなのかもしれない。でもたまには俺たちに言ってくれたって、頼ってくれたっていいだろ！」

強い口調で言い切った睦を、吉は驚いたように見た。怒ったように目を吊り上げながらも、睦の顔には吉を心配している様子が浮かんでいる。

ふ、と、今度は作り笑いではない笑みに吉の顔が緩む。

「ありがとう」

ぼん、と睦の頭に手をのせてそのままなでまわしてやると、睦が怒りの中に恥ずかしさを混ぜてその手をはじいた。

「笑いごとじゃない」

むつつりと口を尖らせる睦を見てまた壱が笑う。

「昔はよく、こうしたな」

思い出して、目を細めた。

壱と一番年の近い睦でも、その間には五歳の差が空いている。親をあんな形で早くになくしたこともあって、今までずっと壱は父親代わりとなつて頑張ってきた。そして年の離れた小さな弟たちに不安を見せないよう、どんな時でも常に笑顔を浮かべてきた。それは今でも変わっていない。けれど今、睦はその作り笑顔を踏み越えて、壱に手を差し伸べようとしている。

「俺たち、いつまでも守られてばかりじゃいやなんだよ。壱兄の足をひっぱらないくらいには、自立したいんだ」

言葉にしなくても、聡い睦は何かを感じているようだった。

大きくなったな、と壱は思う。けれど、睦が望む自立は、決して壱の助けになるわけではなかった。

壱が望むように動けば、敵になるのは小野原藩そのものだ。どんなに関係がないと言つたとしても、壱の血縁であるというただ一点に置いて、睦たちは否応なしにその事に巻き込まれ、そしてなすすべもなく命を散らされるだろう。それが忍びとしてこの身を捧げた壱の逃れられない因果であり、壱たち一家全員の因果でもあった。

だから、壱一人の身勝手で一家全員の命を脅かすことだけは、絶対に望まないことだった。例え、鈴ともう二度と会えなくなつても「鈴が、元気で過ごしているならそれでいいんだ」

壱は言った。それは諦めではなく、静かな結論だった。

もともと鈴は元いた場所に、ただ帰つただけだ。力を持たない鈴は巫女としては生きられないだろう。けれど、長年をかけて育てた鈴を勝亦藩があっさり捨てることもまたない。侍女なり女中なり、

いくらでも生き方は存在する。あとはその生き方に、鈴がささやかにでも幸せを見つけてくれれば、それでいいと吉は思っている。

それ以上何も語ろうとはしない吉に、睦は固く口を結んで立ち去った。今ではもうすっかりたくましくなったその背中から、どうして、という悲痛な叫びが伝わってくる。それでも吉は声をかけることなくただ黙って見送った。

(鈴が元気なら、それでいい)

もう一度確かめるように心で呟いてから、吉は再び和紙に向かった。いつのまにか筆は固く乾いて、ひび割れていた。

何の変わりもなく毎日は過ぎていく。相変わらず家の中は静かだったし、睦だけでなく、響まで問うような眼で吉を見ることもあったが、それでも日々は着実に過ぎていった。

今なお吉の胸にしつこく留まり続けるこの鈍い痛みも、いつしか慣れて当たり前のもとなっていた。もしかしたらこの痛みが消える事はないのかもしれないと最近思う。それでも痛みを抱えたまま生きていくことは、そう難しいことではない、と吉は思った。

(こうして少しずつ、鈴のいない毎日に慣れていく)

若い蝉の力強い鳴き声を聞きながら、吉は空を仰ぎ見た。太陽はただ黙って吉を見下ろしていた。

灰色に濁った空の下、あぜ道だけが、沈みかかった太陽によって^{だいたい}橙色に染め上げられている。ゆつくりと家に向かって歩く吉以外辺りに人影はない。しかし微かにだが、確実に感じるこちらを何う何者かの気配に、吉は声を響き渡らせた。

「いるんだらう。出てこい」

音もなく風が壱の頬を撫でていく。誰も現れる気配はない。それでも壱は神経を研ぎ澄ませたままその場にじっと立っていた。

「……やっぱり、あなたには隠しきれないか」

とん、と足をつく軽い音とともにその場に現れた少年を、壱は忘れようもなかった。

あの日、鈴が籐真と呼んだ少年。壱に激しい敵意をむき出しにして、壱を連れて帰った少年。

「何の用だ」

冷たい声で問う。彼が壱にかなわないことなどとうに知っているはずなのに、なぜ今さらになつてのこのこやってきたのだろう。見たところ、他に仲間を連れてきた様子もない。

「あなたに、聞きたいことがある」

少年にこの間の威勢はなかった。代わりに思いつめたように、まっすぐに壱を見ている。

「鈴はここにいる間、笑っていたか」

それは思いもよらない質問だった。

同時に敵陣まで一人でやってきた忍びとしては、あまりに間抜けで頼りなく、そして純粹な質問だった。

想像もしていなかった問いに一瞬壱が言い淀む。それから確かめるように、ゆっくりと壱は答えた。

「……笑っていた」

鈴はずっと笑顔でいられたわけではない。それでもあの忌まわしい事件が起きる前までは、鈴は花のように清らかに、美しく笑っていた。

その笑顔がいつしか壱にとって欠かせないものになっていくと気付いた時には、同時に二人が一緒に生きられない事にも気付かされた時だった。

「笑わないんだ」

少年の、籐真の固い声が聞こえた。

「帰ってきてからずっと、鈴は笑わないんだ」

拳をぎゅつと握りしめて、どこか遠くを見ながら籐真が言った。

「俺は、あんたについて鈴が幸せになるはずがないと思ってた。だからためらうことなく鈴を連れて帰った」

でも、と籐真の唇が震える。

「おかしいんだ。鈴も、菊間様も、なにもかも」

「……菊間？」

それは記憶違いでなければ、勝亦藩の藩主の名前ではなかったか。壱がそう思っていると、籐真が肯定するように頷いた。

「俺たちに鈴を奪還する任務を命じた時から、何か様子がおかしかった。その時に気付くべきだったんだ。菊間様は鈴を巫女として欲していたんじゃない。女として、自分の妾にするために欲していたんだって」

吐き捨てるような籐間の言葉に、壱はごくりと息を飲んだ。

全く想像していなかったわけではない。鈴は壱の目から見ても美しい娘だったから、鈴を妻に、妾にと望む声はきつと多いだろうと思っていた。それでもあえて考えないようにしていたし、考えたくもなかったのに、籐真の言葉は無情にもその儚い望みを切り捨てる。同時に目の前が一瞬真っ赤になった気がして、壱はそれを悟られないよう目を伏せた。

「俺は、そんなことさせるために、鈴を連れて帰ったわけじゃないのに」

籐真の肩が震えていた。怒りと、悔しさにきつく眉をしかめて、こらえるように唇を噛んでいる。

もしかして、この少年は、と壱は思った。

「俺は鈴には笑っていて欲しい。でも俺にはそれができない。だから、今日ここに来たんだ」

ああ、やっぱり、と確信する。

(この少年も鈴のことを)

「頼む。俺の代わりに、鈴を助けてくれ。あんたにしかできないんだ」

籐真は頭を垂れた。握ったまま微かに震えるその拳に、敵に頭を下げる悔しさも、敵に助けを求める情けなさも、そして自分のふがいなさも全て呑みこんで、籐真はただただ鈴のためを思っただけで頭を下げていた。

「……少し、時間をくれ」

それでも吉には、即答する事ができなかった。さすがのように籐真が顔をあげる。

「今日の夜には菊間様は帰ってくる。頼む。時間がないんだ」

夜までここで待つ、という籐真を残して、吉は一人うす暗くなってきた居室に座り込んだ。

あの忌まわしい事件のあとでも、鈴は少しずつ笑えるようになっていた。なっていたのに、その笑顔を再び凍りつかせたのは他ならぬ吉自身だった。

満月に照らされて、怯えたように目を見開く鈴の顔が蘇る。もう過ぎたことだというのに、思い出すだけできゅ、と吉の心臓が縮こまった気がする。

あの日は任務の帰りだった。そこで一体何人殺したのか、吉は自分で覚えていない。いつものことだった。人を殺した後、それどころか人を殺している最中ですら吉の記憶はいつも虚ろだ。虚ろな心を抱えたまま、体だけが任務遂行のために黙々と動いている。そして後になって、服に沁み込んだ返り血の多さから、ぼんやりとまたたくさん殺したんだらうとだけは分かるのだ。

そんな状態で、まだ傷の癒えきっていない鈴を怖がらせた。自分でもどうかしていたと思う。

ただあの時は

自分でもどうしてそう思ったのかはわからない。ただ視界に入ってきた鈴にどうしようもなく触れたかった。触れて、そしていつものように柔らかく微笑んで欲しかった。自分がどんな姿をしている

のかも忘れて。

(やっぱり、だめだ)

吉は顔を歪めた。

何度考えても糸口なんて見つからない。勝亦藩から鈴を攫って、この家に隠しておくのはそう難しくはない。けれどそれを今度は小野原藩が許さない。小野原藩を敵に回せば睦や響、双子たちの身が危ない。仮に、その障害がなくなって鈴を傍に置けたとしても、任務の度にあんな風に怖がらせてしまうのは目に見えていた。

(そうしたらまた、あんな風に怯えた目で見られるのか)

そこまで考えて、吉はくつと自嘲するように笑った。吉が家族の前では決して見せない笑い方だった。

(結局、ただ怖いだけじゃないか。鈴に、あんな風に怯えられるのが)

情けない話だと思った。それでも、一度気づいてしまった気持ちはまだ隠せない。

それは、吉が鈴を欲する気持ちをもう隠せないのと同じだった。

(……初めは、ほんの少しの興味だったのに)

本当にそれは道端の花に目を留めたくらいの、ささやかな興味だった。鈴がどんな風に自分を見るのか、それだけ確認したら、殺しはしなくてもすぐに返すつもりだった。なのにそれを見たら、今度はどんな風に笑うのか気になった。そしてその後はもう、気づいたら手放すことなんて出来なくなっていた。

泣いて、笑って、また泣いて。時には怒って、そしてまた笑う。

今までそんな感情豊かな女は何人も見てきたのに、なぜかその中で鈴だけは目を離せない。ある時は朝日に満たされた台所で一人包丁を滑らせるその横顔に、ある時は干した洗濯物を満足そうに眺めるその瞳に。そんな、なんてことのないふとした瞬間にどうしても目が離せなくなる。

鈴の姉たちから預かった記憶とともに、鈴も勝亦に返さなければいけない。頭ではそう思うのに体は動かない。気がつけば人に押し

切られる形でやっと鈴を帰してやれたうえに、記憶は返し損ねていまだに壱が持ったままだった。

(ちょうどいいのかもしれない)

この記憶を返すのにも、今回はちょうどいい機会なのかもしれない。冷静に考えれば、鈴を助けて、記憶を返して、そして彼女を勝亦から逃がしてしまえばいいだけで話は解決する。そうは思っても最後の決心がつかなかった。

次に一目見れば、今度こそ鈴を手放す事が出来なくなるかもしれない。

一緒に生きる道など、全て閉ざされているのに、それでも鈴の手を掴んで、もう一度離す事はひどく困難なことにように思えた。

(どうしたらいいんだ)

くしゃりと前髪をかきあげた壱の耳に、誰かの足音が聞こえてくる。

「壱兄」

顔をあげると、睦が立っていた。睦は少しためらうように視線を落としてから、それでもはつきりと言った。

「鈴のこと、助けてやってくれよ」

壱が驚きにかすかに目を見開く。

「ごめん、さつきそこで聞いたんだ。壱兄とあいつの会話」

どうやら、弟の気配にも気づかないほど、自分もあの少年も切羽詰まっていたらしいと知って壱は苦笑いを浮かべた。本来なら二人とも忍びとしては信じられないほどの失態だ。

「壱兄に何かあるのかは俺は知らない。でも、鈴が大変なんだろう。頼むよ、壱兄」

壱の苦笑には気づかず、睦が苦しそうに叫んだ。

「鈴を助けて」

立ちこめる靄を突き抜けるように、睦の言葉がまっすぐに壱の耳に届く。その時になってやっと、壱ははっとしたように顔をあげた。

気がつけば今まで自分の事ばかり考えていた。

けれど今大事なのは、鈴に危険が迫っていることだ。自分の気持ちよりも何よりも、鈴を助けることの方が大事だと言うのに、今まで一体何を悩んでいたのだろう。

（こんな情けない男になってしまったのも、鈴に会ってからだ）
壱は心の中で苦笑した。

決心したように、淀みなくすつくと立ちあがってから、ぽんと睦の頭に手を乗せる。

「鈴のところに行くてくる」

そのままほつとしたように見る睦の脇を通り抜けたかと思うと、壱は音もなく消え去っていた。

壱の消えた廊下を、睦はただ黙って見つめていた。その瞳に祈りを込めて。

もう一度会って、どんなに愛しくても、苦しくても鈴の手を離さなければいけないだろう。それは身を切られるよりも苦しいことかもしれない。それでも今、鈴を傷つけるものだけは放ってはおけなかった。

ただ、最後ならせめて、と壱は願う。

（せめてもう一度だけ、あの笑顔が見られればいい）

先導する籐真とともに流れ星のように弧を描いて、風の中を通り過ぎていく。その瞳に浮かんでいるのは、ただひとつの決意だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4326t/>

卯の花月夜

2011年8月16日12時33分発行